

十三鐘 妹脊山婦女庭訓

近松半二  
作者 松田 榮善平

後見 近松 三好 松洛

○第壹

頭直位す、數津八州の三器智たり仁たり英勇の利劔四夷を刑し和らぎ  
治む和歌の道、入つの耳をふり立てゝ小男鹿の音彌高く、曲を直し措操  
久しき君子國、榮枯交る皇の寶祚傳へて卅九代、天智天皇の宮居なす奈  
良の都の冬木立、日の本の聖主たる君萬乘の御身だゝ、聞き盲の御惱天  
地、日をうしなふとどく、堂上堂下是をいたみ時々の評議も外ならず、  
玉座の左に蘇我の蝦夷子大臣、政務を預かる威はびこり我意憍慢た

る其勢いさばひ右の坐あは安倍中納言行主ちゅうなこうしん庭上ていじやうの勤臣きんしんより大判事清澄だいはんじきよしみと守護の武功ぶこうを立てゑぼし素袍すはうの袖そでもたをやかゝ同どうぞくこなたの蝦夷子えみしが家臣かしん宮越みやこ玄番げんぱん其外くわん百官百司ひやくくわんの面々めんめん威儀ゐぎを正ただえて伺公しこうある蝦夷子えみし寛然くわんぜんと上筋しやうしん改あらためていふしやう及およばねど帝みかど盲めうとならせ給たまひ神例しんれい古實こじつ日々ひひの政務せいむ行おこなはせ給たまふ事ことあたはず老身らうしんの此蝦夷子ここのえみし悉ことごとく是ことをはからふ倅せ入鹿いりかの大臣だいじんの病床びやうしやうより引ひこもり又また進出しんしゅて力ちからとなるべき鎌足かまたりの大臣だいじんより假初かりそめも虚病きよびやうを構行事かまへぎやうじを捨て引込ひきこひ了簡りやうけんとく々みかど帝みかどへ奏聞そうもん遂とひ今日けふの鎌足かまたりを呼よ出し事ことを糾たづすな一決いつけつ夫れ故使こしを立て置おきたりと儕しが邪智じやちを押おし隠かくしさかゑらごとどせひもなき中納言進寄ちゅうなごんしんきよ蝦夷子公えみしこうの仰おほもさる事ことながら忠勤ちゅうきん直ただき鎌足かまたり大臣だいじん何を以もつて野心やしんあらん再三さんざん思慮しりょをめぐらされ鹿忽ろくごつの計はかりひなき様ようもと仰おほも待たず宮越みやこ玄番げんぱん行主公ぎやうしゅこうの詞共ことども覺さへず君きみの戯慮たふしりょを安やすんせんと老身らうしんの勞つかれも厭いとはず忠勤ちゅうきん一途いつづの蝦夷子公えみしこう鹿忽ろくごつの奏問そうもん有ある

べきか、歌蹴鞠<sup>うたきりく</sup>の日をくらし政務<sup>せいむ</sup>をまらぬ馬鹿<sup>ばか</sup>公家<sup>こうけ</sup>と、一つ口<sup>くち</sup>に申さ  
れずと、傍若無人<sup>ぼうじやくぶじん</sup>のお主<sup>ひいき</sup>最負<sup>さいき</sup>大判事<sup>はんはんじ</sup>居直<sup>いぢく</sup>つて、陪臣<sup>たいしん</sup>の玄番<sup>くわばん</sup>過言<sup>くわごん</sup>千万<sup>たふせん</sup>堂<sup>だう</sup>  
上の論談<sup>ろんだん</sup>の君子<sup>くんし</sup>の諍<sup>ちやう</sup>ひ、其方達<sup>あちやう</sup>ちが知る事<sup>こと</sup>ならづ、さがつて居やれとき  
め付<sup>めづ</sup>ければ、陪臣<sup>たいしん</sup>でも陪臣<sup>たいしん</sup>でも、理非<sup>りひ</sup>を正<sup>ただ</sup>すゝ遠慮<sup>えんりよ</sup>はない、今一言<sup>ひとこと</sup>ゆつ  
て見よ手は見せぬと誥<sup>ご</sup>かくればこあたも鍰<sup>つば</sup>元<sup>もと</sup>くつろげて、すべよかう  
よと互<sup>あひた</sup>の争<sup>あらそ</sup>ひ蝦夷<sup>えみ</sup>子聲<sup>ここゑ</sup>かけ、清澄<sup>きやうさう</sup>玄番<sup>くわばん</sup>めも指扣<sup>さしひか</sup>へよ不禮<sup>ふれい</sup>至極<sup>しごく</sup>とせ  
いする折<sup>せ</sup>から取次<sup>とりよ</sup>の青侍<sup>せいし</sup>罷<sup>は</sup>り出<sup>で</sup>、武官<sup>ぶくわん</sup>の旁<sup>かたわ</sup>へ御願<sup>ごがん</sup>ひの筋候<sup>すぢこう</sup>とて、先達<sup>せんたつ</sup>て  
相果<sup>さうくわ</sup>し太宰<sup>たさい</sup>小貳<sup>せうに</sup>の後室<sup>こうしつ</sup>押<sup>お</sup>して伺公<sup>しこう</sup>仕<sup>し</sup>ると、呼<sup>よ</sup>ひる程<sup>ほど</sup>なく入<sup>い</sup>来る、太宰<sup>たさい</sup>の  
後室<sup>こうしつ</sup>さだか迎媚<sup>むかひめ</sup>もけはひもさだ過ぎて世<sup>よ</sup>を捨<sup>す</sup>、草<sup>くさ</sup>の二つ髻<sup>むすぶ</sup>襦<sup>じゆ</sup>さばき玄<sup>くわん</sup>  
とやかみ階<sup>あゐしちやう</sup>近<sup>か</sup>く兩手<sup>りやうて</sup>をつき、恐<sup>おそ</sup>れあがら申上<sup>まうしあ</sup>ます、過行<sup>くわかう</sup>きし太宰<sup>たさい</sup>小貳<sup>せうに</sup>、五  
十日<sup>じふにち</sup>の忌明<sup>きみ</sup>も相濟<sup>あいすみ</sup>、何卒<sup>どぞ</sup>娘<sup>むすめ</sup>雛鳥<sup>ひなどり</sup>も、似合<sup>にあ</sup>はしき智<sup>ち</sup>をもふけ太宰<sup>たさい</sup>の家相<sup>さうさう</sup>續<sup>ぞく</sup>  
の御願<sup>ごがん</sup>ひが申上<sup>まうしあ</sup>度<sup>ど</sup>く、ついよ上<sup>のほ</sup>らぬ雲<sup>うゑ</sup>の上<sup>うへ</sup>慮<sup>りよ</sup>外<sup>ぐわい</sup>にお赦<sup>ゆる</sup>し下<sup>くだ</sup>されと會釋<sup>かいしやく</sup>

の顔も紅葉せり大判事打向ひ、某取次を申上御覧ひ申べけれ共小貳殿  
存生か、此清澄どの遺恨有る家、取次して叶はぬ時私意趣より依怙  
の沙汰致したと疑はれて詮がきいと玄番取りつがれよ、是幸  
ひ何さだか殿、兼て主人蝦夷子公とお願ひ申、貴方の息女雛鳥殿某が宿  
の妻も申受け度く、いろくど申せ共、今又何のさたもあら、只今のお詞  
で、拙者も安堵致したと思ひも寄ぬ智がね、どかうの返事いひ兼て差  
しうつゝひいてゐたりける、行主耳もかけ給はず、くさだか玄番が願  
ひの内意の事何れの内奏問、逐家名相續の沙汰あらん、有がたうござ  
ります、長居いふそれと押し付けの聲の評議をせぬかれて、御前をえづ  
く立歸る君の御惱の奥深き帳裡を出る采女の局、蝦夷子大臣も打向  
ひ、帝様の勅諭有行主様も聞こし、召せ、鎌足大臣も野心有るの奏問、今  
日御殿へ招き寄せ、事明白も糺すべしとの倫言なり、父上を召まして何



事も聞給はれど、打まめりの給へば蝦夷子大臣居尺高鎌足大臣遅参の不審又も使を馳候へと呼はる折から参内と案内して入り来る鎌足大臣、中納言坐を譲り給へば押し直つて蝦夷子又向ひ今日某を改めて召さるゝ事、何事やらんどの給へば采女の局進寄り、父上へ申え、まじく病床又まじまじして、久しく参内なき事を、諸卿野心有との疑ひ、忠勤厚き大臣、何か曲れる心あらん速言ひらくべしと有難き勅詔と、聞もあへず、蘇我の大臣、鎌足の大臣とい、主上の左右を助け合、水魚の交り厚けれど、詔を正すゝ遠慮ならぬ、只今貴卿又見する物有、彌藤次参れと呼いれ、あつと答て荒卷彌藤次一つの箱を携へ出、御前又直し引きさがる蝦夷子件の箱打ひらき、五日の前春日の社壇へ、何者共しれず奉納の此一箱中又一つの鎌を入、男子誕生平天下と書付けたり、其方の娘采女、斯の如く君又侍誰れ及ばぬ寵愛男子誕生有、鎌足殿の自然と外

咸平天下と書添たるの四海を乗取る心の祈願、鎌足かみあしの家の寶、外も類のない重寶てうほう、其影の錄を新あらたに打たせ、奉納有し、余人でない、覺ないといはれまい、返答有れ、鎌足殿と、思ひも寄ぬ印の錄、數多の公卿、軻果口を閉てぞ居たりける、鎌足大臣思慮を定め、此身こみも取て曾かつもつて以覺なけれど、目下疑まのあたりひしき影の鎌、反逆の者有て、我を罪つみも落さん、結構、此惡黨を見出す迄、申分けても詮なき事、我われも暫く禁裏をさけ、何れへ成りと、蟄居せん、其身の明かり立つ迄、何れへ成と、蟄居有れと、立番彌藤次、門前へ送り出せ早ふ、又采女の局なせ申分けを遊ばさぬ、之のふ申父上と歎きをいさめる中納言耳みみもかけず、鎌足大臣、しづく歩出給へ、蝦夷子を始め數多の諸卿早退散と立か弓、武勇たゆまぬ清澄も、覆へる雲も、是非なくも、心の駒の扣へ綱荒卷宮越素袍の袖、肩臂はつて歸館のけいと、利を隠せる錄足とくの心も、はかる七重八重、馴し九重ふり捨て、い

づくの空やはかりなき後の榮を松の色操かいらぬ、君が代の例久しき、  
春日野の社頭も近き小松原時雨晴間のかり戻り、大判事が嫡子久我之  
助清船美男ども美童共さたゝ聞へし角前髪それとい、見せぬ簀笠もふ  
りかたげたる吹矢筒、まふで休の捨床几は幸ひと腰打かけ勞を休むる  
其折から、本社の方々下向の一、群はでを揃へる風俗の中、際立武家育  
年の二八か夫れぞ共ふりの袖のみ、みを玄るしゆたの、たゆたの絹かつ  
ぎ、姫數多引連れて、打過ぎあがらふり返り見合す顔も清船と互ふ月よ  
花の香の、こぼるゝ愛もつくりと、思ひよなやむ立ち姿、氣轉きかして  
姫共、桔梗殿、けふの餘程の道、お上みにも嘸お草臥、こちらの床几で  
一休み、小菊殿よう氣が付たと、附ゝ共よいさあ、いれ腰と思ひをかけ  
まぐも、神の教のゑよしかと心の内の嬉しさ、雛鳥の只清船が、姿も見  
とれ餘念あり、申し御寮人最前から見ますれば、あなたの方持つてさ  
ざる遠目鑑の様を物ふしぎと思し召すのであろう、ふえつけあがらわた

しがいて、借ましてお目よかけん、桔梗殿合點かど、黙頭あふて隣の床  
凡、小腰をかいめ會釋して、申ああた様も御無心がござります、此方の  
御寮人の申されます、お前様の持つてござる其遠目鑑の様な物暫し  
が間お借しなされて下さりませと云かけられて、安い事、是の小鳥  
狩を致す吹矢筒と申す物、そしたら是が吹矢筒でござりますか、もふ  
し、御寮人様、是を御らうじませ、雛鳥でも大鳥でも、あなただの吹  
矢を持つてくつしやりと射さるの玄や、此筒をちよつと握つてごら  
うなませ、どの様な所へでも、心よう届きそふか、長があい物でござりま  
すど、おどけ交りの戀の橋岩木もあらぬ清船も、よつこり笑顔相ほれよ  
下行く水のこぼれ口、すくひ上げて桔梗が氣轉、や御寮人様、早ふ埒の  
明く様も思ひのたけをおつしやりませ、何をいやるやら、つい逢見  
ぬあのお方へども、直きよいけれふぞ、わしや耻しいと袖覆ふ、折から  
社の境内、蝦夷子が家來宮越玄番、鎗狭箱いかめしく代參の戻りがけ、

此場の体、を見るやいお供よせいで狭箱、腰打かけて窺ひ居る、斯ども  
知らず、小菊、中前髪のお侍様、私が方の御寮人様、ゆしたい事が有れ  
ど、耻しうござりますすげお、幸な此吹矢筒咄し、聞た町竹、どふぞ聞て上  
けまして、耳と口とくあてがふて、かう此中を私、が持、取も直さず媒役、  
雛鳥、の筒へ手を思ひ有りたけ、一口よ、いへばこなたの耳で受け打黙い  
て返り言かはいらし事通じ合、互に嬉し、耻紅葉、玄番主従夢現、ぬ共の  
氣を利し、二人を床几へ押え、やれば扇を開き、寄り添て、口と口とを鴛鴦  
のひつたり抱付き、こなたよは、ぐはつたりとつさり、狭箱こけ落るやら  
鎗持ち、鎗をこかえて立さは、清船も打驚き、床几を退け、宮越玄番  
越上つて砂打拂ひ、久我之助殿、よつ程、味やらるゝ、そこを相手の  
過ぎつる頃、相果し太宰の娘、興があるは、能い所へ出くはしたと、聞  
て二人、又恟り、扱、太宰殿の息女、成るかお前、大判事様の御子息  
久我之助様か、過ぎ行れし其方の父、太宰の小貳と、我父と、故有て遺

恨有る家其息女とい夢も知らず只今の躰たらくそんならお前も添  
事ハ成りませぬか、はつと斗り又はや涙宮越は聞とがめ、兩人は早  
ちへくくつたよあ、いやこれ必鹿相いはれぬ、遺恨有る家共知らず、  
最前の時雨の内同し床几も雨舎り、成る程、今の雨舎り、夫れから夫れ  
よしておこふが一體此雛鳥も、某が大執心夫れ故宿の妻も申受けん  
ど、兼て主人へ願ひ置く、今迄の事ハ譬いか様お事有ふと儘よさ、此後  
心も随へばそこい々と了簡する、是にきつい粹様、私は雛鳥の召し  
使小菊と申す者でござんす、ほんま浮世宏や入鹿様の様お聖人と  
いなる、情深いお方の親御も、意路悪るの蝦夷子様、其御家來の小意  
路悪る此方の御寮人を嫁よせふとい、笑止と打笑へば、玄番睨付、  
女め其過言覺ておれ、是から直ぐは御所へはせ行、二人の様子を觸廻り、  
どいつもこいつも身の上と、かけ出すを勉ども、袖よすがつて、  
の様よいふたの、お前様のお心を引て見る、正直お方で有る

い、身がいは様は取持つか取持いでよい物かい、夫れなれば  
了簡する、お娘が眞實はおふといふか、最前ちらと見て置た、吹矢筒  
の咄竹で、聞たい、扱も目早いお方で有るぞ、お望の通り、咄竹で御  
返事を聞かせふ、耳へおあてあされ、心得吹矢筒耳は押し當  
居合腰、どふか、コレは雛鳥様、よいお返事を早ふおつしやれ、申  
玄番様、耻しがつていゝござります、ちつどの間お目をふさいで、成程  
夫も合點と眞赤な顔は似合ぬ成佛眼、小菊の心得有合ふ吹矢筒へ  
差込口押當ふつと吹は宮越が耳へくつさり、こりやどふしをる  
どうろたへる、其間、雛鳥打連れ立館へこそは送歸る、玄番は吹矢抜き  
取て、堪忍ならずと追かくるを、久我之助押し留、高が女の戯事、彼はい  
ふ程却て耻辱と、なだむるこなたの組道、數多の侍走り付き、清船殿是  
よござるか方々とお尋申た、先刻采女の局様禁庭の御殿を拔出いづく

共なく行方知れず、貴殿事うねめの采女様の傳役かしつきやく、早はやくおしらせ申すると、聞て驚く久我之助、何采女様御行衛知れずとや、何なんもせよ程ほど有るまじ貴殿方は是こゝ直すく所ところの出口を吟味ぎんみ有れ、我は山手を詮議致さん、聞捨すてあらぬ采女の出奔しゅつぽん、蝦夷子公へ注進ちゆうしんせんと、玄番諸共數多の侍、出口の方へ急ぎ行、跡あとは清船只一人、心得こころえずと一思案しあん、胸むねもえどろ入相いさうの、山手やまてをさして歩行あゆみゆく、向むかふ來る人音ひとおと、身を除よけてやり過すこせば、さもやとなき内裏うちり上臈じやうらふ心こゝろも空くう、歩行あゆみ、袖そでを扣ひかへて、采女様うねめでござりまするか、久我之助か、只今組下の注進ちゆうしん有つて、采女様うねめの御殿を抜け出御行衛知れずと申が、いか成御所有なりての事ことと問とれてつらき物語ものがたり、其方そのかたも聞及きいたべれん、蘇そ我がの蝦夷子えぞこ威勢ゐせい、ほこり、我娘わがむすめ橘姫たちばなひめを后きさき立たんと兼かねての望のぞ、わらひ君と思はれ参らせ、夜の御殿晝ひるの亭暫しばししもお傍そばを離はなぬそねみ、父鎌足様ちかあしをも讒言ざんげんして大内を遠ざけ、何方どこもお渡り有あり共、此身このみさへ露つゆしらすわら



いが傳き参らす程、帝様のお身の仇誠有る入鹿の大臣、父蝦夷子を諫兼  
引籠り給ふ由、夫れ故父の隠れ家を尋求め身を隠し、姿をかへる身の望、  
只見遁しゝ頼むぞと跡い涙よくれ給ふ、此身い傳の役目なれど、後日  
の難義少ゑも厭はず、此身の爲又第一い天子の爲、成程落し参らせん  
が諸士共方ゝ手配致せば、村口を御供申したばかりつてお通え申さん先  
ゝ是をお石有れと件の簀笠させ参らせいたはり出る出口の方又も大  
勢足音して以前の武士共走り付、宵闇紛れすかし見て久我之助殿いま  
だ是ゝか、出口く吟味せしがお局の行方知れず、拙者の山路吟味の  
上、コレ是ゝ居る百姓が怪しき人見付し、注進未夫れとい極めねど大方ゝ  
采女の局我い是ゝ此土民ゝ案内させて吟味を遂る各ゝい此趣急いで  
禁裏へ奏問有、畏り候と、皆ゝいさみ大内へ、こなたは浮身隠れみの笠  
ゝ、涙の天が下、清き心の清船も俱ゝしぐれて、行空い、九重の榮ゝ隣る一

構三條の所と持ちはやす蘇<sup>そ</sup>我<sup>が</sup>の蝦夷<sup>えみじ</sup>が廣館<sup>ひろやかた</sup>雪見<sup>ゆきみ</sup>の亭<sup>ちん</sup>を設<sup>まうけ</sup>の座<sup>ざ</sup>、女小  
姓<sup>にくびやう</sup>を肉屏風<sup>にくびやうぶ</sup>奢<sup>おこり</sup>と透間<sup>すきま</sup>中庭<sup>なかつて</sup>の蔭<sup>かげ</sup>を轉<sup>ころは</sup>すつかね雪<sup>ゆき</sup>つめたさこらへ主命<sup>しゅめい</sup>の  
重<sup>おも</sup>き役目<sup>やくめ</sup>と宮越<sup>みやこ</sup>玄番<sup>げんぱん</sup>跡<sup>あと</sup>と荒卷<sup>あらかまき</sup>彌藤次<sup>やふでじ</sup>が臺<sup>たい</sup>と乗<sup>のり</sup>たる雪人<sup>おのゝこ</sup>形<sup>かたち</sup>各機嫌<sup>おのゝこ</sup>を窺<sup>うかが</sup>  
ひける、女中<sup>にようぢゆう</sup>達口<sup>だつぐち</sup>と、是<sup>こゝ</sup>は兩所<sup>りやうじよ</sup>のいかい骨折<sup>こせ</sup>殊<sup>こと</sup>と此雪細工<sup>このゆきこざし</sup>兎<sup>うさぎ</sup>の  
耳<sup>みみ</sup>がきつい手際<sup>てぎわ</sup>、しほり殿<sup>との</sup>の云<sup>い</sup>しやる通り<sup>どおり</sup>束帶<sup>そくたい</sup>姿<sup>すがた</sup>の此人<sup>このひと</sup>形奇麗<sup>かきれい</sup>な事<sup>こと</sup>  
ぢやないかいのふと響<sup>ひび</sup>そやされて兩人<sup>ふたり</sup>はおとあげなくも出<sup>で</sup>か玄顔<sup>げんがん</sup>蝦夷<sup>えみじ</sup>  
夷<sup>えみじ</sup>もつこと打笑<sup>うちわら</sup>給<sup>たま</sup>ひ、玄番<sup>げんぱん</sup>彌藤次<sup>やふでじ</sup>出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>た、酌<sup>しやく</sup>取<sup>と</sup>れと餘念<sup>よねん</sup>なく廻<sup>まわ</sup>  
る盃<sup>さかづき</sup>養老<sup>やうらう</sup>の盡<sup>つき</sup>ぬ泉<sup>いづみ</sup>の底<sup>そこ</sup>はかど、案内<sup>あんない</sup>もなく廣庭<sup>ひろてい</sup>傳<sup>でん</sup>ひ、入<sup>い</sup>來<sup>き</sup>る二人<sup>ふたり</sup>の僧<sup>そう</sup>、彌  
藤次<sup>やふでじ</sup>見咎<sup>みがめ</sup>く兩僧<sup>りやうそう</sup>、何用<sup>なんよう</sup>有<sup>あ</sup>て罷<sup>か</sup>り通<sup>とほ</sup>る、は前<sup>まへ</sup>成<sup>なり</sup>るぞときめ付<sup>つ</sup>くれ、我<sup>われ</sup>  
といは領分<sup>りやうぶん</sup>と住職<sup>ぢゆうしやく</sup>致<sup>いた</sup>す文聖<sup>ぶんせい</sup>寺<sup>じ</sup>八乗<sup>はつじやう</sup>寺<sup>じ</sup>、佛法<sup>ぶつぽふ</sup>歸依<sup>きゐ</sup>の入鹿<sup>いりか</sup>様<sup>さま</sup>、今日<sup>けふ</sup>行法<sup>ぎやうぽう</sup>の満<sup>まん</sup>  
願<sup>がん</sup>の日<sup>ひ</sup>あれば、拜禮<sup>はいらい</sup>と伺公<sup>しこう</sup>せり罷通<sup>かとおほ</sup>ると奥庭<sup>おくてい</sup>へ、入<sup>い</sup>んとするを蝦夷<sup>えみじ</sup>の睨<sup>にら</sup>  
付<sup>つ</sup>け、いらざる入鹿<sup>いりか</sup>が佛<sup>ほとけ</sup>さんまいらぬらも其組<sup>そのぐみ</sup>下<sup>した</sup>か、忝<sup>かたじけ</sup>なくも日<sup>ひ</sup>の本<sup>もと</sup>の

神の守護有る我館奥の亭へ通らんなどい、其身をしらぬ、賣僧共、首を  
あらぶる覺悟せよと、氣色變れば、申しお前様が佛嫌とい、夢三寶存せ  
ぬ事、命はお助け下さりませ、是も又お嫌ひか存せませねど、拜まする  
と手を合せ、身をふるはして青ざめ顔、首引拔てくれんすあれど、取  
足ぬづくようめら、玄番彌藤次兩僧が衣をはぎ、月代を奴より立て  
門前へぼつ拂へ夫れを肴、又一献、娼共用意、と詞の中さめき立  
て女中達ち櫛笄の剃刀持出て、兩士へ渡せば、このうながら文聖寺、  
そんなら此衣をはぎ、頭を奴にお剃なさんと、還俗でござりますとふぞ  
夫れに御堪忍、還俗がいやならば、兩人が手は掛ふか、申し、  
文聖寺、命がはりじやとふなとして貰まじや、よい合點、今玄番の  
いわるゝ通りいやといふと直に成佛、御前様のお慈悲を以て、うぬらが  
好の佛國、天竺へ所がへ、天竺へ行かいでも、ほんの是が天竺浪人、手

又覺た能はなし、こまつた物じやとつふやく中、玄番彌藤次傳手こんで又衣は  
 ぎ取り引きそへて剃刀手合せでつし、剃りかゝれば兩僧の首をす  
 くめて、アイタちつと待つて下さりませ、から剃りといあんまりむごい。こ  
 八乗寺、こなたも嚙さいたかろく、申うどふもこたへられませぬア、コレ文  
 聖寺夫れの悟道ごだうの居すらぬからざや、首がはりの此月代悟さかやきどりの道を極きまめたら  
 いたいと思へばいたけれど、ハチいたうないと思へばやつぱり、アイあ  
 たくを興けうとして、蝦夷の酒宴しゆゑん、こなたより、奴頭やつこゑたま又剃り立つれば撫廻ふで  
 く、残つた鬘びん又顔見合せ、ホンニあんまりの事でいたおかしいわいのふ八  
 乗寺チ、サ、われがおれか、おれがわれかで、どふも濟すまぬ頭あたま又成た、ハチ是から  
 申合せ何などゑて渡世とせする、貴僧きそうは是文聖寺の一字を取、文七と名を  
 改めよ、愚僧の又八乗寺の八を取、八藏ハチと付てこそ、レかいつた事な  
 った、文七殿ホ、、こはや、めてたうあつたわいこあたもそんなら今

ら八藏殿、ふくどやくだい坊、玄番、彌藤次追つ立て門外さえて出て行く  
折から表の廣間口取次の青侍罷り出、大判事の子息清船、召よ應じて参  
上と、呼ゐる聲よ入来る久我之助、清船、器量骨柄、武氣備ゐる中よ優美の  
長上下禮儀正しく座よ付、蝦夷大臣進み寄り、珍敷久我之助、使を立し  
よ早速の入來、尋度事別義であし、帝愛憐をかけ給ふ采女の局、鎌足が  
娘、此頃内裏を拔出、入水せしと聞つるが、其方、采女が付人、實否を聞た  
く、呼寄たり、噂の通り違ひないか、仰の通り、采女殿、世をはかなく思  
ひ取、猿澤の池へ入水有しが、我傳の役目おれ、野邊の送り營參らせ、い  
まだ三日を過ぎずと、詳よ答れば、さこそ、親鎌足が蟄居を悲しみ、淺  
ましい采女が成行き、其方付人の越度と成、親大判事よ勘當を受たと聞  
さ有、主も親もなき身、夫れよ何ぞや、いかめしく禮服を着飾て、我目通  
しへ出たる、心得難き汝が心底、御不審の段、御尤、親もなく主君もな

く獨立の私若輩ながら蝦夷公へ奉公の義願ひ上度君と敬ふ此禮服と、  
心は探りの一思案誠にやかは相述べ、扱ひ此蝦夷を頼み奉公の望と  
や、若輩者の神妙く、我も望む所あれど、其方が父大判事は汝が勘當赦  
させて、親子共臣下となさん、仰共存せず、親大判事が氣質として一旦  
申出せし事、翻らぬ鉄石心、勘當も赦さず、元々二君は仕へぬ所存、其口  
このき大判事、蝦夷が幕下は付けて見せふ、お手柄はいか様共、親清澄  
得心致さば、其上もなき仕合、所詮私一人の奉公が相叶はずば、どや角申  
て益あき事、先お暇と禮儀をなし廣庭より立ち、まづ歩む向ふの  
方、兼て云付け置たりけん、玄番彌藤次立出て、前後を圍み二王立、と蝦  
夷か下知は連れ兩人一度は切付くるを、身を沈め、双方の刃の合打、さ  
まつたりと開いて、又も横備へ、車輪の劔付込切先清船心得、左右の柄元  
まづつかど握り、蝦夷公の仰成か、何故は尾籠の手向ひ、不審は尤其方が

武藝ぶげいの試こころみ、兩人ふたり又云付け置たが、天晴あつたれく、こゝいかめしき御尋若輩じやくわいの私なれ、腕うでためしの覺しるもなし、猶此上しゆれん又手練しゆれんを極め重かさねて御覽ごらん又入ませふと、双方ふたうを突放つきはなせば、跡へえさつて兩人が又も切込刃きいぎと刃庭やいばの飛石エイ、請うければ御殿ごでんの天井てんじやう々、怪あやしく下る鉄網かちあみ又、清船吃度眼きやうどを配くばり、再さい三さんのお試、眞劔けんのお相手あひまが、お望もちならべ兎も角いも、イヤ驚おどき入たお手際てぎは、見届みとけましたと、双方ふたうの刀やいばの鞘さや又飛石トビイシも、元へ直せば御殿ごでんの網あみ、棟木むねぎ遙はるか又隠れける、久我之助くがのすけさあらぬ體てい、蝦夷公えぞこう試こころみの切先きりさきを、受け留とどめた今の飛石トビイシ、地ちを放はなるゝと下る鉄網かちあみ、元もとのとく石いしを置おけ、網あみも隠れて其體そのていなし、六む个こしい御用害ごようがいと、譽ほめる一言ひとこときつくりと術じゆつの試毛こころみを吹きて、疾きつをくろめるえたり顔かほ、太切たいせきの此用害ここのごようがい、其方そのかたの身内みうち同前どうぜん見せて置おけ、幸さいと、俄さたん又なつける詞ことばの艶つや、此清船しよせんも、武士ぶしの端は、只今ただいま如ごときの御手配ごてはいり決けつして他言たごんの仕しらぬ、氣遣きぢは無用むようと、暇いとま申まをて久我之助くがのすけ、左右さうぶ又目配めくばり悠ゆう々と表うらを、さして立歸たちかへる、跡あと又蝦夷えぞ、溜ため息いき

の、一間の襖押し明けて、入鹿大臣の妹橘姫、跡は續てめどの方舅は心奥の間のけふの酒宴はかけ合ぬ、鉦の響も身はまみど、は機嫌いかいと兩手をつき、酒宴の半ながらあなただ様へは願ひ、夫と入鹿大臣より、秋の頃を一向は佛の道に入給ひ奥の亭へ引籠り一つの棺を地中納め、丁どけふが百日目入相の鐘を限り定入給ふと聞何は譬ん此身の悲しさ何と便りが有物ぞ、少しの思ひやり給ひお諫なされて下されど、涙先立つ吃言、同じ歎きを橘姫何卒再び兄上様、遁世の思え立といまり給ふお願ひと、一つ思ひを二人して、いふを打消父大臣、聞たくもあい入鹿めが沙汰、今此蝦夷が威勢は次き、何不足なき榮花を捨、佛法といふ天竺外道の術は歸依し、奥庭へ引籠り、晝夜わがたず稱名讀誦此世は有て益なき悴、土へ成と定へ成共、入次第はえて置めせ、また最前から鉦が鳴、いまいしい不幸者、嫁も娘も重て云まい、いゝやまだ不吉な泣聲、此



酒宴しゅえんを妨さまたるか、い、何なにの御遊興ぎょゆうきやうを妨さまたげませふ、何なにもすしませぬ  
涙なみだもこぼしゝ致いたしませぬ、御赦ごしやされて下くだされど、袖そでも解行とくゆくしほり雪思ゆきおもひ  
の、胸むねも氷こほりるらん、橘姫たちばなひめ引取ひきとて、すど、様さまも兄上あにがみ入鹿いんろく様の事こと、す者もののござり  
ませぬ、御機嫌ごきげんを直ただされて、別殿べつでんで御酒宴ぎょしゅえんを、娘能むすめいふた、是こゝは居間いまを  
かへ再宴さいえんを催もよほさん、玄番げんぱん彌藤やどう次つぎも奥おくへ來きよと、怒いかりの風ふうもなぎのかち、ぬ共とも  
が取とるゝ、一ひと間まへ伴ばんひ入いふけり、橘姫たちばなひめ心こゝろせき、父上ちやうじやうのわのお氣質きしつ、何程いかにお願ねが  
遊あそばす共ともお聞入きこいれは有あまい、是こゝは此橘大内このたちばなだいないへ急いそぎ参まゐり、何卒なんぞ兄上あにがみ入鹿いんろく様  
入定にうちやうを止とどまり給たまひ、再ふたび昇殿せうでん有あ様さまも、幾橋いくはしのお局つはねへお願ねがひす心こゝろぞど、力付ちからづく  
れ、めどの方あた、難面なづれは入鹿いんろく様、今日けふを限かぎりの入定にうちやうど、生なまき別わかれのわたしが  
身み、同おなし館くわんも有あながら暇乞いとまごひも、顔かほをど、願ねがふ事ことだも中なゝも、築山つきやまの門かどを閉と  
物ものいひかはす事ことさへも、泣なて暮くしておりますと、むせぶ涙なみだを友千鳥ともちどり同おなし  
翅つばさも露時雨しづなのぐ方あたなき思おもひ也、姫ひめは涙なみだを打うはらひめど、様氣遣やまきぢやうひ遊あそべ

すな、暮を限りの事なれば一刻も早ふ、自内大内へ、夫の一入御苦勞ながら、是は改まつたわらわ迎も同じ事、惣共大内へ上る用意せよ畏まつて附ゝが、興乗物といふ榮の、日頃中よき嫁小姑互ふ力付け合ふて禁裏を、さして急ぎける跡見送つてめどの方、便りすくなき身の上を諦兼し胸の内、譬願ひが叶ふ共心變せぬ夫どの氣質、夫れど知りつく頼みえも、妹御の深切を破らぬ誠とやかくと、思ひ續けて庭ふあり、本草の枯葉詠ても猶いや増の無常心、夫どの命もけふ限、涙は胸ふふりつもる、雪かき集めかき寄せて氷の手先きも後世の爲束ね、丸めて五輪の形、此世の名は入鹿大臣、頼生菩提と手を合せ、心の回向せぐりくる聲も、憚るしめ泣く哀はかなき風情なり、夫れ又引きかへ奥の間、地下を寫しの、三味線よ、なまめく歌の聲さへて花うちどても、春咲消て返らぬ其雪よさへおどる憂身消もせで、あんまりといふか心ないといふか、現

在子といひ嫁といひ、けふを限りの命ぞと、悲まむ事を聞捨ゝ捨た、浮世  
も、かふまゝ居れば、仇名たつたの流の錦、心ない此中で雪見の酒宴所  
かい、鉦の打納めが入鹿様の御臨終、夫とを先き立何樂しき、我も一所  
も此雪と、俱も未來の道連れと、上着を脱ば、墨染の、けさよりつもる廣庭  
の、雪も坐をしめ合掌し、此儘爰も埋もれて、死んど誓ふ、貞心は天に通玄  
て降りさる、膝も袂も白妙も色香盛の黒髪も八十の姥と疑ひる、恩愛血  
筋も屈託せぬ、蝦夷大臣一間を出、嫁めどの方、まだそこ泣いているか、  
扱とてくも立ぬ、馬鹿者の入鹿が事を苦も病、物好きな雪なぶり、もふ打  
やつて爰へ来て、火も當りやれ、胴欲なかつしやり事、夫とは定も入給  
ふも、そもやまわ妻の身で、褥の上も居られませふか、雪も凍て死るのが、  
せめてもの夫婦の誠、貞節な心底、其實心を聞てお身も問たい事が有  
る、悴入鹿が入定、佛法信仰斗りて有るまい、様子なふては叶はぬ筈、親

子まこは増まる夫婦の中、夫どの心知て居ゐよふ、何いぞ密ひそかに聞きた事があらふがな、其子細こさいが聞きたい、我がづよういふ物の、實じつは不便びんな子の命いのち、様子ようすによつて入定にやうぢやうを止とめる、思案しあん有あまい共ともいはれぬ、どふじやくと脇道わきぢやうから、猫撫ねなで聲こゑも氣味悪きゐわるき、親御おや様さまへ御存知ごぞんちない事、何のわたしが知しつて居ゐませふ、去りながら脇目わきめから存ぞんじますは、夫ど入鹿いんろく様のお覺悟かくごいふ前様のお心こゝろが知れぬ故ゆゑかと存ぞんじます、いふ蝦夷えみしが心こゝろいふる白雪しらゆき、一目ひとめ見みへて有あ潔白けつぱく、其雪ゆきは埋うづれてい、上うへから見みへぬ塵芥ちりくた、心の底そこがどふも解とけぬ、入鹿いんろくが性根しやうね聞きたい、いふ、イヤ常つねは夫どがやさるゝい内大臣ないだいじん鎌足かみそと父蝦夷ふえみしの國くには二ツの柱はしら同然どうぜん一つかけても我君わがきみのお爲ためはならずと物語ものがたりり、其大事だいじの鎌足かみそ様を退退おひしりぞけなされたい、深い様子ようすの有あるふな事こと、知れた事こと、此こゝ蝦夷えみしの忠臣ちゆうしん、佞人ねいじんの鎌足かみそをばつ下くだしたい天下てんかの爲ため、我君わがきみのお爲ためじやわい、いふ鎌足かみそ様は罪つみあい事ことい、世上せうじやうの人がよう知しておりまする、威勢せいせいを妬ねたみ

ねんでのさかしら事と世の人の譏は耳入鹿様夫れが積てあのお覺  
悟一人の榮花を極めん逆、譏も返り見給ぬ、蝦夷様のお心さへ改めて  
下されなべ、入定も止り給はん夫の生死の爺は様のお心次第、嫁子不便  
と思え召、お聞入下さりませ、夫婦が命を厭ねど、お心が直らねば、お前も  
遣れぬ危い命、君のは恩を受けながら、十善の位を奪ふ、は謀反の思し立  
てござりませふがな、天道様のは罰めて、お身は報ふが悲しきまわら  
がは意見、惡心を止まつてたべ、蝦夷様と舅を思ひ夫を思ひ合す兩手  
はらくと涙深山の灘なせり、始終とつくと蝦夷大臣、よい、すりや我  
大望残らず入鹿は聞たよな、そふ有ふと思た、氣遣ひすなそち達ちが望  
の通りよえてくれふがまだ尋る事が有、めどの方、駒下駄直せど刀提げ  
庭の面もえや得心有そ海底は白州よ、あやふむ目遣ひ、嫁近ふよりや、  
と立寄る目先へ氷の刃、と飛退、舅は様、そんならどふでも、思ひ止るお

心いござりませぬな、馬鹿盡すな女め、天下を取らば肉身の入鹿譲りく  
れんと思ひの外、道立てする倅いもふ構ひぬ、思ひ立た大望、一度万乗  
の位い昇る此蝦夷、ふがいなき性根とえらず、入鹿い渡えた連判狀、儕  
が有所知て居よふい、謀反の譯い聞たれど、連判とやらは、いぬかす  
まい、一大事を聞た女殊い安倍の行主が娘、所詮生けて置れぬやつ、いふ  
ても殺す、いひひでも殺す、其一卷爰へ出せば、苦痛せずい一思ひ、あらが  
ふとなふり殺し、何とつけ廻す、道がたな肩先すつぱり、付込蝦  
夷か尖き切先き、手負い大地いこけながら、蹴上る白砂雲、烟手い渡さ  
ど懷中の一巻火鉢い燃立炎、嵐い連て烈いと、折しも聞へる鐘太鼓、い  
ふかしき攻鼓、連判狀を焼捨し、我大望を蹙たる、不孝の入鹿夫婦のや  
つばら、大事を敵い洩せしな、いつくい女め思ひ知れど、足下い踏付け肝  
先をえぐりくる、流る血汐、雪を染なす皆紅眼、血ばしる表の方勅

使成と呼ゐる聲、目鐘の音は引きかへ、勅使の案内に我胸中、窺ひさぐる謀、身體けふの一舉は極まる、装束せんと不敵の蝦夷帳臺、深く入る程も有せず細殿傳ひ、入来る勅使に安倍中納言行主副使の武官大判事清澄、威儀を正して座に付け、出向ふ主も衣服改め、上座に招じ頭をさげ、勅使とえて行主殿、雪中の路次別して御苦勞は存ずると挨拶終れば膝を寄、今日の勅使尋常のさたゝあらず、貴卿の父馬子に代ふの功忠勤あつく君の寵はこりたるや、はい逆心の徒をかたらひ、帝位をすすめん企有と獻聞は達せし故、諸國の勤番武官の面々、此館を園所、此行主の一家の佳、今老臣の蝦夷子大臣鹿忽の斗ひなすべからずと、進出て使を乞受け取あへず馳向ふ、包まらず言上すされよと、聞て蝦夷子の居丈高、くく何事かと存たれば、此老人は逆心有とや、最前を遠く聞る鐘太鼓、禁庭は大事有と思ふ折から我家へ勅使佞人讒者の詞を用ひ獻慮

くらき帝の疑ひ勅答致すも馬鹿くしいと、詞尖は云放せば、大判事進  
寄、血迷ひ給ふか蝦夷子公、其身の白狀進め給ふ、行主公の一家の佳敵  
聞は達する大事、再三吟味有ての事いか程ゝあらがはれても、抜きさし  
ならぬ證據有と、懷中へ取出し、投やる一卷かつ取て、見れば疊の連判狀、  
序文の手跡、誓書の名印、さしもの蝦夷も證據み、ハッ斗驚く面色、見られ  
しか蝦夷子殿我智の入鹿大臣、此一卷を帝へ捧げ諫ても承引なき父が  
逆心、子とえて是を顯へす事、不孝の罪莫太なれ共、君恩にかへる道なけ  
れば敵聞は達する也、我は祖父馬子が意をつぎ、佛法を歸依しぬれば遁  
世の外なしと引籠りめさるれ共、我娘めどの方謀は命を捨、最前燒き捨  
し贖物の連判狀は、誠は逆心有るかなきか、えらせの狼烟、貴殿の口を謀  
反の次第、最前既は白狀の上、最早陳ずる詞はあらじ、とときめ付られ  
一句一答詞なく、只默然たる斗なり、大判事さし心得、三方は腹切刀、蝦



夷子が前より指置べ、行主立寄傍なる、雪人形手より取上、見られよ、愚成る儘なれど、此束帶の雪人形、其形をなすといへ共、火より當れば、忽水、其人よりあらざる逆心、消果る、天の罰せめて最期の此雪の如く、潔く生害有れと諫の詞を耳よりも入らず、無念より堅まる雪人形傍なる火鉢の炎の上のみ、碎け水烟肌押くつろげ腹切刀、腹より突立怒の眼中、無念口惜や、仕込より仕込し我大望、現在の悴、入鹿が手より洩たる、我運命の盡る所、去りながら此蝦夷子世を去べ、見よ、忽天地の常闇、かたの者の帝を始め月卿雲客思ひ知れど、きりきりと引き廻す、太刀取後より大判事、はつしと、落す首諸共、矢一つ來つて行主の、胸板射抜きあへなき最期、こはそもいかよと、悔り仰天十方より、立てまじと、清澄必驚く事なかれと、聲かけて一間の襖、二人の武士より引拂はせ、築山の岩間陰しづく、出る入座大臣、髪のかどろみ、麻衣、さもすさまじき有鬚の僧形、大判事ぎよつと

て入定有し入鹿公、ふしぎの對面いふかしと立寄れど、實もくさも有らん、不審の一條語つて聞せん、父蝦夷子年を重ね反逆の企有れど、其器ちいさくして、中々大望成りがたし、爰を以て此入鹿表の仁をかざり、父の惡事をうとめる容佛法歸依と引籠り、帝を始め數多の公卿、父蝦夷子と心を付け、油斷の間を行法の築山と禁庭の寶藏へ隠れ道土を堀石を穿、妙計違はず忍び入とくより評定有し違はず、神璽は鏡失給へど村雲の寶劔、安くと手入たり父が命妻が命、芥の如く見捨し、此時を待謀、あら心地よや潔しと、殿は響くうあり聲、扱いと驚く大判事、玄番彌藤次弓と矢つがい取かこめば、大臣重て、馬鹿者の舅行主、血祭り手ふかけた、其方、我所存有ば、味方ふ付けば其通り、否といはい行主同前、勝手次第と返事せよと、大惡不道の入鹿が行跡、爰ぞ大事の大判事、心を定め、低頭平身時を得給ふ大臣、いかでか違背すべし、我君と

仰ぎ奉ると、上ればよつと笑、潔し、三徳備はる此入鹿、天地の間  
又狭まる物誰か敵たふ謂なし、今日、我こそ万乗の主たり、ア、いまは  
しの墨衣、いでや衣服を改めんと呼べる、聲は數多の官女てん手は着せ  
る綾錦、立なをつて大音上、清澄は皇居の案内、立番彌藤次殿せよ、是を禁  
裏へはせ向ひ、帝を始め月卿雲客、殘る寶の有所を責問、擲ひしいで心の  
儘、中門のほとりへ丸が車をすゝめ、官人共來れやつと聲は隨ひ數多の  
武官列を、正して先備へ、玄番足駄を奉ればひらりとおり立、いさみの姿  
心も雲井は高足駄、門出の音樂、璉然と又も降來る雪の空心得供奉のみ  
さふらひ、柄長の御かさ差かくれば、六つの花びらひら、雪威風邊を  
拂ふ雪深き思慮有る大判事、前後のそなへ、おとそかみ、御車はつと時め  
きて内裏をさしていでてゆく

○第貳

山又山も都路は心も連て奥深き、名も猿澤さるさわの地もさへ波立世こそうかりけるこなたの道よりたどり來る山働はたらきの狩人共打連立て立ち留りし丸右衛門、こちらが仲間の芝六が、此間から夜狩がりして能い代物付け出した夫れで、はいらを助けの雇やとひ、つゝ山から山城境へ入込んで居るどの事今夜こんやぐつと働いてやらよやなるまい、コレサもふ明ても暮てもはいらが相人あいての猪武者いのしむしや、五六正射あとめてやつてぐつと褒美ほうびを貰はふ、サアく行ふと世渡りも追ると獵師山も見ず、足を早めて急ぎ行、世のうさは、高きたか異ひききも亡魂あまたまの雲隠くもがくれせし思ひ人、采女の局つばねの跡幕したひ勿体なくも万乗ばんじやうの帝みかどの歎き淺からず御所を忍びの夜の鶴つる其とい更さら人知ず舍人どねりも武官くわんも只官女のみ道案内池の邊へ御車のきしる音さへ物淋みびし、殊めも目盲しびの君なれば哀あわれも勝る御姿みさだ宣のたまふ聲も打ちしはれ此邊こゝりが猿澤の池なるかと、仰おほも官女進み寄り、此間久我之助清船奏問そうもんやせし通り、采女じゆ様入

水の跡、猿澤の池ゝていと、やし上れば今更ゝ御落涙をせきあへて、思ひ  
出せば去年の秋、民へ營なみ憐て、我衣手の露ゝ濡つゝと丸が詠せし傍  
ゝ筆を取りし其采女、早此世ゝは無人とや、誠ゝ我衣手の涙ゝ濡るはしな  
らんせめて今宵の手向ぞと、わきもこがねのみだれ髪を猿澤の池の玉  
藻と見るぞ悲しきと詠し捨御涙こそ限りなし、かゝる折しも、こなたよ  
り、おは打からせし浪人姿、御車近く手をつかへ、女中方へお頼みやす、帝  
様の御車と遙ゝ見受けし故、押して御願ひやす事有、憚ながら奏問  
の御取次頼み入ると、いふ聲夫れと聞し召、珍らしや淡海なるかと、仰  
ゝ猶も頭をさげ、私過ぎつる節會の時、神例の式を過とくゝも勅勘蒙り、  
先非を悔て内裏を遠ざけ、市中ゝ響り有所曾、我の蝦夷我意をふるひ、父  
鎌足も蟬居致させ、猶玉體も安からずと聞より前後願ず、何卒玉體守護  
の爲、勅勘の御赦免を、願ひ上奉ると土ゝひれ伏詫ゝける、君戲感斜なら

ず、朕が不徳のなす所か左右も奸佞の人絶ず、蝦夷帝位の望有て叛逆の  
 企有る事、嫡子入鹿大臣が忠臣も事顯ひれ、安部の行主を使ひ立て、今日  
 事を糾すに及ぶ、いまだ歸り來らねど、蝦夷か自殺の目下、餘足内裏をさ  
 げし事も悔ふかいなき有様ぞ、今、元の淡海再び忠勤勵むべしと、さも  
 有難き免許の勅詔、淡海初め付とも皆悦びを奏する所へ、禁庭の勤番使  
 車のは跡慕ひ、息つぎあへず馳參じ、主上是も渡御なる事漸相知れは  
 注進、今日曾我の蝦夷館へ行主公勅使とえて、大判事を召連られ、渠農叛  
 逆吟味の所述も白狀有て、蝦夷の其坐も切腹有り、清澄是を介錯す然る  
 所行法も取り籠つたる入鹿大臣、寶藏へ忍び入り、村雲の御劔を奪取り  
 誠の親蝦夷も越王位を望む大惡人、行主も忽ち手もかけ禁庭へ馳込だ  
 り、是に支へる公卿の面も或も蹴殺し切り倒し上を下へと逃けさまよ  
 ひ、さしもも廣き禁裏の内人種も盡ん斗り、猶も追つ注進と、呼り捨て

立ち歸る、皆とはつと驚きよわきて帝の御歎きいか成る天の咎めぞや、  
思ひ計らぬ入鹿が悪心我れ四海の主として臥所さへなき身となる、  
淺間しき境界と歎かせ給ふを淡海は、御心よはき御仰と、勇る中と思慮  
を廻らし竊に官女の耳に口申し名せて、車に向ひ、思ひがけなき只今の  
注進は、馳付け遠見を致し、安否を言上申さんと、出行ふりの偽りも、目  
しいの君の御心地を休る術となた成る、木影に暫しイむ中ち、取ゝいさ  
め奉る、暫く有つて淡海は急ぎ歸りし足音して御車近く息をつぎ、只今  
遠見致せし所、諸國の軍勢蟻のごとく禁庭へ馳参り、さゑも又猛き入鹿  
大臣直に退け候へば、忽ち内裏に穩なり、早入御ならめ候へと、誠しやか  
相述べば主上の安堵の御思ひ御悦びは限りなし、淡海は、官女を制し、急  
いで還御と先立長柄を取りて、舍人役、押て行衛、いづことも空定め  
なき空いさみ、露踏分て、蹊行山手の道より親子連爰に名高き狩人芝六

弓矢手狹たばさみいつきせき、人絶たへの木影かげも立留とどまり、聲こゑを嘯こりや三作此間から夜  
 の狩かり、是は渡世の表向雇やとひのせこ共山手谷方とかけ廻す、此物音の  
 騒さわぎも紛きぎれ兼てそちも云付た彼爪黒つまぐろといふ女鹿めじかは千疋ひきが中の一疋、夫れ  
 取りたいばかりで此様も骨はねを折る、其念力が通つたやら、ア葛籠山くわらちの  
 向ふの谷合、見付得た其爪黒つまぐろ、猪狩しぐかりの螺鈺かいかねでぼつ立たら驚いて、向ふの  
 山を越すは必定ひつちやう、そちは是から谷へ廻り青願せこも螺鈺かいかね打鳴うちなりさせ件くだんの鹿を  
 追出せ、心得こころえました、是どつ様、追出すは安い事、やが鹿を射あは  
 所の法度はつども前の身も難義なんぎが出来ては、かゝやわやが身は、どふまかせ  
 ふと稚氣せうきも、後を案あんするさかしさは孝行かうかう見へて不便也、扱氣あつかのよいい  
 事をいふそれしられてたまる物か、もしゑられたらば百年め、命がけな  
 事するのも此身の榮耀えいようを望のぞむでない、所詮しよせん此狩人商賣人間のする業わざじ  
 やない、せめてわいらよりは狩人がさせともなく、侍さむらいもせふ斗とじや、どゝが



身は氣づかひはない程、早く早ふ谷かけへ、おれは別つて麓の方、合點かぬかるな心得たと、示し合せて親と子が、道は二筋引き別れ山路をさしてぞ、急ぎ行、谷山峯は、暉かす數の松明螺鈺の響は連る青願の聲松の嵐も露き、よき時分と芝六の弓矢つがふて麓の方木影は隠れ待所へ、猪を狩出す山路の騒ぎ俱は驚きかけ來る鹿件の爪黒得たりやつと、切て放す矢あやまたず鹿の咽喉貫きて其儘そこへ倒れ伏三作のかけ付てと、様射とめさつしやつたか、聲が高い、首尾よふ仕とめた、爺様どふやら剛ふなりましたと身を震ひして涙をへ、とくどくと氣遣すな、人の見ぬ中ち歸れば濟と傍見廻し、心を配り鹿引かたけ親子連宿りを、さしてぞ、立歸る三笠が木の雨舎り烈しき嵐吹きこえて君が遊の御車、此葉家と、いまりも獵師芝六が、侘住居、妻のお雉も健やかみ、つかへ參らす大君の供御のしかけの米粒を撰も、女中の手談、紺の藏

膝たれひ緋はの袴はかま打交うちまじりても女子同士おんなどうし、つい馴なれ安やすきならひなり、おしいか様上かみゝ様  
といふ物は、此様このようは一粒つぶゝ米こめを撰えり、是これはちつと色いろが黒くろい、是これは角かどが欠かけた  
のと皆撰みなえり出でゑて、上うへすす米こめは二粒ふたつぶか三粒さんつぶ、神様かみさまより大切な十善じゅうぜんの主様あるじ斯か  
なふてゐならぬ筈はず、是これを思おもへバ勿もつ躰たいない、王様おうさまは上うへる供御くぎよを踏ふ確から踏ふは足  
が腫はれふと、いへバ女中にようぢゆうが何なんのいな、上様かみさまでも肝心かんじんの時ときは、やつぱり臼うすが  
好このでな、勿もつ体たいないとこつちから遠慮えんりよすれば、けつかして下馬げば緩意くわんだいとお呵しか  
りなさると笑わらひ綻はらうふ障子しょうじの中なか、しほたれ公家こうけのまよげつぱさ、しよんぼ  
りと立出たてでゝ上臈じやうろう達夜だちやも早初しよ更かうも及びしよ、夕ゆふは前まへの供ぐ何なんとして遅おそ  
なる膳番ぜんぱんは何國なんこくも居おる怠おこにりなりと呵しからるゝ、お公家様方こうけさんとした  
事がやつぱり禁裏きんりの格式かくしきで何なんの獵師りやくしの内うちもそんな仰山げうさんな膳番ぜんぱんとや  
らが有物あつものかあなた方あなたもいゝ存ぞんない、貧乏びんぼう世帯せたいといふ物は、何も角かどもたつ  
た一人ひとり、むつくりと起おきると釜かまの前まへ、庭にわの掃除そうじは仕丁してうの役やく、お清所きよどころの飯焚まい役やく、

鑰<sup>かぎ</sup>の出し入内侍役、どんと仕廻<sup>まわ</sup>えまふて寐所<sup>ねどころ</sup>がお后様百人前<sup>ごうごうにんぜん</sup>する事な  
ら手の廻<sup>まわ</sup>らぬは御推量<sup>ごすいりやう</sup>遊<sup>あそ</sup>ばせ、此又こちの王様は、遅い事じやと夕やみ  
ふ、山を仕廻<sup>まわ</sup>ふて親子連<sup>こころづな</sup>いきせき背<sup>せき</sup>ふ大風呂敷<sup>おほふろしき</sup>敷<sup>しき</sup>寒風<sup>かんふう</sup>ふ汗たらく、おりの  
我家の門囃<sup>かじ</sup>今戻<sup>もど</sup>つたと内ふ入り、こゝ太切<sup>たいせつ</sup>なお方くなせ端<sup>はし</sup>近<sup>き</sup>ふ出し  
ますぞ、お前方もお前方在所<sup>ざいしょ</sup>の邊<sup>へ</sup>もの見るやうな、其大そふなお姿で、ふ  
よろ／＼出てござつては、何ぼふ山家の一つ家でも、誰見まい物じやな  
いお局方も年中神子殿の様ふ、其長い物を此狭<sup>せま</sup>い内で引<sup>ひ</sup>ずつたら裾踏<sup>すもと</sup>  
で轉<sup>ころ</sup>さつしやろ、夫で、奈良の町でよい流れ買<sup>か</sup>てきた、く是をお召<sup>めい</sup>か  
へど、風呂敷解<sup>と</sup>けて取出し、着<sup>き</sup>せるとてらの行尺<sup>ゆきさば</sup>も、哀<sup>あはれ</sup>きのふの、長袖<sup>ながそで</sup>を在所<sup>ざいしょ</sup>  
小紋<sup>こもん</sup>のかます袖<sup>そで</sup>、似<sup>に</sup>せ兜羅綿<sup>とろめん</sup>のひらた帶<sup>おび</sup>、ねから似合<sup>にあ</sup>ぬ、装束<sup>やうそく</sup>矢脊<sup>やせ</sup>のけ  
らを見<sup>み</sup>様な、名もかへて右大辨助様<sup>みだひんすけさま</sup>、お前<sup>まへ</sup>の大納言<sup>おほのうきん</sup>兵衛様<sup>べゑさま</sup>、こちらか髪も  
町風<sup>まちふう</sup>ふ嶋田<sup>しまだ</sup>とやらふ結直<sup>むすなほ</sup>し、おあちやおいちやふお梅<sup>おめい</sup>が香<sup>か</sup>、在所<sup>ざいしょ</sup>のかし

の風俗ふうぞくの憚はやかしながら私が傳授でんじゆ、こりやか、上様の膳ぜんはまだか、何れも  
様も嘸さぞ空腹くうふくよござりませふ、イヤ心づかい無用、帝さへは安體たいな  
れば、臣等が事は苦しからずと殿上人てんしやうびとも世と連て、かゝり人の身の氣の  
毒顔どくがん、何ぼ尋常じんじやうよおつゑやつても、内裏だいり様も喰くや立たぬ、思ひなし  
かきのふからめつきりとお顔が細ほそつた、かゝちやつと握にぎと飯めしなどし  
て上いと亭主ていしゆの如才じよさい内證ないしやうのしがをくろめて入所へ、腰は帳面さうめんぶらゝ  
爰へ郡山こほりの搗米つきこめや、内方うちかたよこんすか、新右衛門様しんえもんよふお出たれど折悪  
ふ今日は、お内儀、又留主るすといふのか晦日つもとりよ來るといつでも朝から内  
よ居ぬ故、けふは留主を言さぬ様よ氣をかへて朔日ついちちよ仕かけた、拂はぬ  
癖くせよ、節季せつきよ書出しなせおこさぬと、小みづがいやさふ、コレ持て來た此書  
付去年の尻残りが六十六匁三分五りん、いつ迄釣り付るのぞや、ふづく  
られては居ぬ男じや、サア今拂や今受取ふと、傍響あたりのりかす聲高く、大納言押

どいめ、下<sup>調</sup>の者、いとはしたなき争<sup>あらそ</sup>ひかなしづまれよやと有ければ  
貴様何じや、手の筋見る人か、コレ茶一つ汲<sup>くみ</sup>で下あれ、めつそふなあな  
た方は、大事のお客何じや客じや、米代も拂はずあんなけない人取込  
で、また米やを銜<sup>かたむ</sup>のすやの、コレ喰<sup>く</sup>ひつぶし達おれが喚<sup>わめ</sup>くが無理か此書出  
し、し見やしやれ、此切紙<sup>かみ</sup>の色紙<sup>しき</sup>の形扱<sup>かた</sup>の歌かどつくど、眺<sup>なが</sup>め珍<sup>めづ</sup>ら  
しき五つ文字、書出し一つ米代<sup>よねしろ</sup>六十六つ、去年<sup>こぞ</sup>の霜月<sup>しもづき</sup>残る銀<sup>しろかね</sup>、是は戀歌共  
思<sup>おも</sup>ひれず、戀も戀借錢<sup>しやくせん</sup>乞<sup>こ</sup>じや、何よもせよ下く、よの優<sup>やさし</sup>しくも三十一  
字をつらねしな、三十や四十の端<sup>はし</sup>た錢じやないわいの、貴様もかしり  
人<sup>ひと</sup>ならよふ聞かしやれ、爰<sup>こゝ</sup>の芝六<sup>しし</sup>の盗<sup>ぬす</sup>人じやかふいふが無念<sup>むねん</sup>なら、金  
拂へかふい云物の、コ唄<sup>うた</sup>衆<sup>しゅ</sup>こあさんの心次第<sup>こころしだい</sup>で、結構<sup>けつこう</sup>な了簡<sup>りょうかん</sup>が有<sup>あ</sup>ま  
薄<sup>うす</sup>い芝六<sup>しし</sup>、百目近<sup>ももぢ</sup>ふ仕送<sup>しど</sup>つた、しやりから付け入て貴様のしやり塔<sup>たか</sup>、  
とふから念かけて居る、しやり迎<sup>むか</sup>は胴欲<sup>どうよく</sup>な留主<sup>りゅうしゅ</sup>が定<sup>じやう</sup>なら、コレどふぞと

ひつたりと抱付けア、是ニ何さしやんす主が内ニ居やしやんすぞへア  
 く内ニ居ニなら銀受かねけ取ふわい、留主じやわいな、留主ならちよつとし  
 又取り付く、首筋つか搦なんで板間いたまよどつさり、悔ひづりしながら負まけぬ顔かほ芝六、夫  
 れ程内ニ居ながらよふ留主つかふな、米代受取ろかい、米代に渡し  
 て有アリヤ、いつ渡したチ、密夫まきとこの代三百目の内で六十六匁引て跡が二百三  
 十四匁、こつちへ今請け取ふ、夫ア、今渡せ、と詰かけられ、ぎつ  
 ちり詰つた入口びつしやり、門からしめて留主じや、密夫代も米代も逢あ  
 さへせねば取りやりなし、留主は五分、算用さんよう濟だど、お留主に成た腰こし  
 の骨はね、ちがく引ずり逃け歸る、妾めかけの地下には落ながら心の官位くわんゐ右近衛うこんゑの、  
 中將ちゅうじやう淡海公たんかいこうする、と立出、兼秋卿かねあきけう政常卿まさつね、君きみも益ます敷しく慮いりめでたくは渡  
 り、是といふも芝六夫婦が深切しんせつ虎とらの口のに難がを遁のがれ、此家このけは匿奉かくれれ共、計  
 ざる入鹿らんみかどが、亂帝らんみかどの御耳みみに達して、彌御惱やみおも重おもらんど、何事も包隠つみかくし、只

太平の容もてなし、御目盲させ給ふを幸ひ、此藁屋をやはり禁裏の御殿の中と、僞りすかし参らする我々が氣苦勞、此上ながら御悟りなき様もど、詞半のやれ疊出御也と警蹕の、聲諸共押明くる、明かり障子の御格子も、御いたはしや、天皇の、此賤が家との夢もだも白平絹も緋の袴襦も玉座なりければ、各々といと公卿達威儀を、正して拜謁有、配膳の典侍あちやの局、四方の御盤平戸焼の茶碗土器、其儘も下がるは膳を淡海押しとめ、朝飯晝のは膳、少し斗り召上られ、今夕の供は、お手も付かず此儘下よと勅詔か、扱ひお料理がは機嫌も叶ひぬか、不調法なは膳番の大隅大炊頭、急度申し付んと、立んとするを、淡海、さな心いためそよ膳番の者の罪ならず、兩眼くらき病ふの上采女が別れの歎も沈み思へ詮なき心の迷ひ、不徳の君とさげしまん耻じさよ、爰は常寧殿よな、夫れも詰しは誰ぞ、大納言兼秋、右大辨政常、其外参議、中將、少將、百官百司殘ら

ず參内仕る、エ、此目だも明らかならば、遠方みづきの幸はならずとも、此内裏  
 の中よても見所は様々、其障子の繪衣えぎぬは桐きり鳳ほう鳳見事な彩色さいしき、上段の  
 繪は、竹林ちくりんの七賢しちけん、又清涼殿せいりやうでんの廊下ろうかより、奥の間の四季しき、杉戸しんは蘆あしは鷹たか、雪  
 は梅種うめい々色々の名畫名筆、毎日見ても飽ぬは殿、夫れよ初春しよしゆんも成らざ  
 るは梅壺つばの梅今を盛り君の目も開かるべき瑞相すいさうみていと、誠にやか  
 ん奏問有そうもんば、實左社げにさ十善の位ことなり即ながら、此九重の内だも見る事叶  
 はぬ常闇とこやみの、御裳川みもすその流れを穢けがす我誤りのなす所誠まことは此月の内侍所ないしの  
 は神樂兼かみてしゆらいも有べし、病平愈やまひへいゆの祈いのりなれば、樂人共がくにんを召出しよだし、壽ことよきの  
 管弦くわんげんを始めよ、早とく々々と仰おほ又悔くり、と斗り俄にわかは管弦の才覺さいかくも出  
 て、返らぬ綸言りんげんの冷汗ひやあせながら、是はよき思し召樂がく何なんがよからふぞ、  
 還城樂けんじやうらくか、武德樂ぶとくか、樂人只今追付け是へ、何として遲參致ちさんしすと立端たちたんの  
 しは芝六しはが、手を引ひて門かどは出、扱迷惑めいわくな勅詔ちよくちやう俄は管弦くわんげんの望望のぞみ出來る



よしてから、笛太鼓で騒立て、ふたこ 忍人にんも御有家を知るゝ難儀何と智恵ちえの  
有るまいか、智恵といふて、私らがてこよおへぬ樂がくとやら、舞まひとやら、一昧ひと  
お前がこんな内で太平樂おつしやるからじや、ナ何と是はどふ有ふ  
私暫く廣瀬ひろせも居た故、べれく、万歳まんざいを覺て居ます、坊主ぼくしめも舞して私が  
小鼓管弦ついでんげんの代りよゝ成るまいか、素袍鳥帽子すほうとほしがないけれど、そこらはか  
ぐれ様の一徳常いちとくじょうの形でも大事ないく、ナ、それ究竟くつきやうと御前も出、樂人延  
引仕る中、廣瀬村の万歳瀧口へ参り、梅の早咲きと申し春も先立参る  
も吉きつ左右さう庭上ていじやうもて千秋万歳、相勤つとめさせ、いんと御免なるぞ始めませい  
ど、仰もあいま愛あいらしく時の幸ひ才若の扉開いて、万歳と有難かりける  
我君の惱のうしづまりは目も開き給ひける、誠も目出たふ侍さむらいひける、昔むかし  
の京は難波の京、中の京とやは志賀辛崎からさきの松の色、かはりし物は我々が  
身の有り様、君は、かいらせ給ふなど千年ちとせの齡よわひ奉る、忠臣ちうしんの柱はしらは月卿雲けつけいうん

客、日本の柱は日天子三本の柱を左近右近の花櫓四本の柱に紫震殿、五本の柱に五幾内安全、八重九重の内迄も始り、靡く君が代の、千代は八千代を、細石の祝ひ壽申すも甚敷感おはしまし、いしくも祝ひつる物かな誰か有祿取せよ、管弦系竹も祝儀は同じ、けふの舞樂も事終れば、百官百司も退出有、朕も夜の殿に入ん、思へば我の斯の如く、錦繡羅綾の内は座し、民の艱苦を露しらす、徳なふして榮花は酖る、神の照覽勿体なやど、自身の事は知り給はず、民を憐むは詞各顔を見合せて額は涙の天が下、暫し入はなれ奉る、芝六跡はさし寄て、仰付られた彼爪黒の女鹿、近邊の山へ尋ても扱すくない物、是迄ついに見當らず、漸昨日見付出し、念なふ射とめ、乳の下に血汐を絞り、壺は認め置ました、太儀へ、正は天下の用は立る、得難き鹿の手は入る事偏は、おとが忠義の働、父内大臣鎌足得々入鹿が亂を察し、罪なくして身退興福寺の後なる山上は取籠天皇

御惱祈のらひのりの移はらひ百日の行ひ、則今日が満願まんぐらんの終り帝此家みけ又まします事、先達  
て知せられ、明曉めいせう六つの鐘を限り、密ひそは是へ來らるべし、其時こそ其  
方が勘氣かんきも、赦免しやめん改めて元の家來かへんじやう上太郎利網としつな、テ有難ありがたし、忝かたじけなし、この年  
月の念願成就ねんげんじゆうじゆう浮木の龜共優曇うゐんげ花共、此上ながら鎌足公へお執成とりし仰あやぎ奉  
る必氣かならずづかひ致すなど、主従しゆく水魚すいぎよの中臣氏なかのみろじ、土おひも生ても穢けがれなき藁屋わらの、は  
殿へ入いり、様子立聞ようすたちきく女房の、嬉あはしい中の心懸こころがり草臥くたびさん、まよと立  
ち寄りて、調こちの人、わゑやお前まへも問たい事、けさの噂うわさも聞かしや  
んせ、きつい法度はうどを知りながら、春日かすがの牝鹿めしかを射殺うちころした者が有る、迎むかへ  
い吟味ぎんみがござんすげな、よもやとい思へど、万よろ一ひと鹿相しかさうでお前やなど、そん  
な覺へないかいなど、から問ひかけるも、夫思つまふまかも牝鹿めしかの覺さのき  
つくり、調譯わけもない、奈良ならの傍あたり赤子でも知て居る鹿の法度石はうどいしに結むすま  
合ふ事を知りつゝ、殺ころす白癡たひけが有る物か、まがたが、鹿しかといふの質置事しち、一いつ體たい

まかないおれなればち殺すの常住の事と云紛らしてもどこやらが  
鹿子<sup>かのこ</sup>まだらの雪見酒氣が築山<sup>つきやま</sup>で一ぱいせふ、かゝかんつきやど女<sup>め</sup>夫<sup>おと</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
酔<sup>よ</sup>た顔でも濟めやらぬ癪<sup>しゃく</sup>を押<sup>お</sup>へて入<sup>い</sup>りけり、村の歩人<sup>あるき</sup>が表<sup>あ</sup>から<sup>う</sup>く興<sup>きよう</sup>  
福寺<sup>ふくじ</sup>の塔頭<sup>たうとう</sup>から鹿殺しの科人<sup>しやうが</sup>、獵師<sup>れつし</sup>中間<sup>ちゆうかん</sup>は極つた、友吟味して訴人<sup>そにん</sup>した  
ら、は褒美<sup>ほうび</sup>を下さるゝとお觸<sup>ふれ</sup>が廻つた庄屋殿迄早でされど、云捨歸<sup>すて</sup>る高  
聲<sup>せい</sup>の小耳<sup>こみみ</sup>はつと三作<sup>さんさく</sup>が、若<sup>も</sup>し様の身の上、詮議<sup>せんぎ</sup>かゝらばどふせふ  
と稚心<sup>ちしん</sup>のやさしくも眞實案<sup>しんじつあん</sup>に詫住<sup>わすみ</sup>の手習文庫<sup>てらひぶんこ</sup>やれ双紙筆<sup>さうしふで</sup>くひえめし  
何やらん七<sup>なな</sup>ついろはの、清書文章<sup>しやうしょぶんしやう</sup>かき披<sup>さか</sup>しやのわんばく弟<sup>にい</sup>、兄様<sup>さん</sup>さつ  
きの箱下<sup>はこした</sup>されや、ぐれぬと<sup>ゴリヤ</sup>かふじやと引たくる筆のしんみの憎<sup>にく</sup>から  
ず、夫<sup>そ</sup>れもやらふが、杉松兄<sup>しんしょう</sup>が頼む事聞てたもるか、此狀<sup>しじやう</sup>を持ての太  
義<sup>ぎ</sup>ながら興福寺の門を擲<sup>な</sup>いて、寺中へ差上げますといふて渡して來て  
たも、そしたら何ぞ賃<sup>ちん</sup>下さるか、やる共、賃<sup>ちん</sup>よの春日野の火打燒買<sup>やきかひ</sup>

てやる、又嘘欺すのじやないかや、いゝほんまじや、そんなら合點じや、往  
て來ふと、すかさるゝのも、僞寄のも、年より賢杉松が狀懷にちよかゝ  
走り、見送る兄が書殘す、筆の命毛器用なが、仇と白地の神ならぬ折りも  
こそ有れひそゝと表に窺ふ捕手の侍とかけ聲かけ入て、かけ行奥  
よりかけ出る芝六待たゝ、こりや人の内へ理不盡と狼藉千万、聞へ  
た、お前方へ鹿奉行のお手下じやな、此家の内へ吟味有て、入鹿大王よ  
り詮議の役人儕が内へ匿ひ置た者有べし、眞直と白狀と、かさゝかゝれ  
どびく共せず、何の事かと思ふたら、私じや迎貧乏な狩人でも、相應の  
かくまいの致さいで、それを御吟味とは、お役人へ似合ませぬげうさ  
んなお侍様、とぼけな、かくまい置たはお尋の天皇并と鎌足が倅、淡海  
是非あらがへ、此通りと傍と有合ふ三作を取て引き寄せ指付る、刃の  
鞘と差當る、人質取れて、何と詰かけられ、先にお待ち下さい

如何にもヤ譯け致しませうが、爰ではどふもヤされず、大庄屋の方迄参り、委細白狀致しませう、然らば早く、歩め、三作、わりや、戸をしめて、かゝる氣を付けいといへいざ、お役人と打連れて毒蛇の口の一思案心の跡は出て行、一と間は様子立聞、淡海局と叫出し、芝六が心底忠臣無二と思ひしが、子よほだされて大事を誤る今の行跡、拷問及び、慥は白狀、どふも天皇、長く爰に置まされず、今霄の中は山越しとお供して立退ん、皆々密に用意、我の猶も芝六が歸りを待て一詮議と、鏝元くつろげ立上る、お待なされて下さりませと、お雉はかけ出手をつかへ、お疑ひもさる事なれど、あれ程迄思ひつめ、御勘氣を赦されふと、心を碎く夫芝六、中々白狀致す様、未練な心でない事、私が存じております、一先歸りをお待なされ、其上胡亂な事が有れば、一天の君よ、いかへられぬ夫と云せず、私から切りかけます、其時こそ心底の、

明かさくらさの今宵一夜、憚りながら私もお預けなされて下さりませ、  
實一命をさし出し、頼るゝ程の玄上太郎、どいひながら草も木も我  
大君の國あれど、今の草木も心置かるゝ此時節、すゝといひ用捨の  
ならず、は前へ參つて返事を待つと心、ゆるさぬ關の戸の破れ障子のつ  
ゞくりも、反古よせじと間合紙書きあつめたる胸の中母の心を三作  
も俱ゝ案ずる折からゝ、興福寺の衆徒鹿役人、先ゝ立たる杉松が、ゑるし  
の門口指し覗き、科人のあゝの恥よな、捕たといふや否、應言さす三作を、  
取て引立用意の早繩、お雉驚き、何事、大事の子をどふするのじや、鹿  
の春日のつかいしめ、殺した者の古へより、大垣の刑は行ふ大法、其は  
詮議の聞へたが狩人も多い中、外の吟味なされいで、此子一人が知つ  
た様ゝ、あんなりな當推、但し證據でもござりまするか、證據なくて名を  
さそふか、其恥が所爲といふ事、慥な訴人有て明白、其訴人えたい何所

のやつじや、覺へもない無實をいふやつ、切刻んでも飽足ぬ其訴人め、サア  
爰へ出してお見せなされ、訴人の此驗現在の弟が注進、よもや相違の  
有まいと、聞て憫り、びくくぼん、吾儕のさつきよから何所へ往て居やつた  
ヲわしや此狀もつて、あの坊様の内へ往て、連立てもどつたど、いふ又怪  
しと引つ取つて、讀度と胸どきく、何じや、お尋の鹿を殺しし者の、私  
兄の三作又違ひござなくいそんなら此書付けを、わしが持て往た、サア  
兄様賃下され、饅頭ほしいとぐんせなき、調何いふのじやつともふ、  
性もない子供のいふ事、取上げて下さりますな、三作、何のそなたが其  
様な法度を破つてたまる物か、チちやつと云譯しやいのだ、つき出せば  
顔ふり上げ、いかも弟が訴人の通り、鹿殺しに私でござります、コレそ  
なたの氣が上つたか、狼狽所じやないぞや、イ、狼狽にしませぬ、わしがて  
ました事、覺へのない狩人の、中間の衆又吟味がかしり、ひよつとどふし



た人違で、どし様の難義もならふもしれぬ、夫れが悲しさ、尋常も名乗て  
出ます、常にお前の咄しよも今のどし様の義理の有る親じや程も猶太  
切も孝行もせいど、云しやつたを、わしやよふ覺て居ますわいの、わし  
が仕置も合た跡で、どし様の泣しやれぬ様も、京の町へ奉公もやつたと、  
いふて置いて下され、是からは杉松を、わしと二人前可愛がつてや、鹿や兎  
の命を取れば、どふで末にかふなるものせめてあれ一人の狩人として  
下さるな、そればかりを頼みます、さらばでござるか、様ど、親の代り  
も罪科を、引受ける氣の立派さを、思ひ合せて、はつと今更未練なとめ  
様も、あらがいやうもないじやくり、扱もく、健氣などいふか産だ子  
ながら、恥かしい、義理有る後の親夫、わしやまだ恩を得送らぬ、傳人も  
及ぬ發明の、一生の智慧も壽命も十三年もつゝめたか、こんな子を持つ  
た親とひけらかしたいまれな子を、世も稀なる大垣の土の中へ生な

がら石<sup>つめ</sup>の誥<sup>ご</sup>で殺<sup>ころ</sup>すとい、なんぼ前世<sup>ぜんせい</sup>の約束<sup>やくそく</sup>でも、餘<sup>あま</sup>りむごい約束<sup>やくそく</sup>事<sup>こと</sup>、  
 なんぼふでも殺<sup>ころ</sup>さぬ、くく〜と我子<sup>わがこ</sup>よしつかとしがみ付き、涙<sup>なみだ</sup>の瀧<sup>たき</sup>よし  
 めるよぞ、いとくひ入る縛<sup>しば</sup>り繩<sup>なは</sup>、成敗<sup>せいばい</sup>極<sup>きく</sup>る科人<sup>とがにん</sup>よ返<sup>かへ</sup>らぬ諄<sup>しん</sup>今<sup>いま</sup>雪<sup>ゆい</sup>の中<sup>なか</sup>  
 の寺<sup>てら</sup>中の法事<sup>ほふじ</sup>明<sup>めい</sup>六<sup>ろく</sup>つの鐘<sup>かね</sup>つくを相圖<sup>さうず</sup>よ、山本<sup>やまもと</sup>の土中<sup>どちゆう</sup>を堀<sup>ほ</sup>て石<sup>いし</sup>の誥<sup>ご</sup>の刑<sup>けい</sup>  
 罰<sup>ばつ</sup>最早<sup>はやく</sup>七<sup>しち</sup>つ、もふ一時<sup>いちじ</sup>刻限<sup>くげん</sup>移<sup>うつ</sup>ると引立<sup>ひだち</sup>る、なふとふよくな、いんゝ畜生<sup>ちくしやう</sup>一<sup>いち</sup>  
 疋<sup>ひつ</sup>を殺<sup>ころ</sup>した科<sup>とが</sup>をそれ程<sup>ほど</sup>の、成敗<sup>せいばい</sup>敗<sup>は</sup>も及<sup>およ</sup>ぶまい、出家<sup>しゆつけ</sup>のお慈悲<sup>じひ</sup>よ、と  
 ふぞ助<sup>たすけ</sup>けて下<sup>した</sup>さりませ、叶<sup>かな</sup>ぬ事<sup>こと</sup>なら土<sup>つち</sup>の中<sup>なか</sup>母<sup>はは</sup>もいつしよと埋<sup>うめ</sup>んでと、  
 取<sup>と</sup>り付<sup>け</sup>く嶋<sup>しま</sup>も袂<sup>たもと</sup>の岸<sup>きし</sup>涙<sup>なみだ</sup>は漂<sup>たふ</sup>ふうかれ船<sup>ふね</sup>繩<sup>なは</sup>目<sup>め</sup>の綱<sup>づな</sup>の親子<sup>おやこ</sup>の別<sup>わか</sup>れ、見返<sup>みかへ</sup>る  
 姿<sup>すがた</sup>霧<sup>きり</sup>霞<sup>かすみ</sup>飛<sup>と</sup>が如<sup>ごと</sup>くよ引立<sup>ひだち</sup>行<sup>ゆ</sup>、母<sup>はは</sup>の正體<sup>せいだい</sup>腰<sup>こし</sup>もぬけ、三<sup>さん</sup>作<sup>さく</sup>よ待<sup>まち</sup>てくれ、思<sup>おも</sup>へば  
 く〜けふの日<sup>ひ</sup>、我身<sup>わがみ</sup>一人<sup>ひとり</sup>の惡<sup>わる</sup>日<sup>ひ</sup>か、由緒<sup>ゆい</sup>正<sup>ただ</sup>しい武士<sup>ぶし</sup>の子<sup>こ</sup>を、一生<sup>しやう</sup>狩<sup>かり</sup>人<sup>ひと</sup>山<sup>やま</sup>  
 賤<sup>ぢやう</sup>み、朽果<sup>くは</sup>さする斗<sup>と</sup>りか、所<sup>ところ</sup>の法<sup>はふ</sup>は行<sup>ゆ</sup>、非業<sup>ひごふ</sup>の死<sup>し</sup>は殺生<sup>せつしやう</sup>の罰<sup>ばつ</sup>か報<sup>むか</sup>ひ  
 か悲<sup>かな</sup>しやと、土邊<sup>つちべ</sup>に蹉陀<sup>さだ</sup>と身<sup>み</sup>を打<sup>う</sup>付け聲<sup>こゑ</sup>を、はかりのこがれなき、患<sup>うれへ</sup>を拂<sup>はら</sup>

よ玉箒、いかな大事も好物も、酔てのころり芝六が機嫌上戸のちろく  
戻り、女性、是よおのするか、此冷るよ地邊よころり、扱の貴様も酔醒  
しか、久しぶりの色事、抱てやらふと手を取、こちの人か、悲しや、  
なむ三きやつ泣上戸、我等の悲しふても笑ふ、貴様の目出たい事よも泣、  
又此様な嬉しい折から、祝ふて一つ泣給へど餘念たのいも泣顔を見  
せじと妻も氣を取直し、泣く笑顔繕ひて、又どこでやら、きつい機嫌で  
戻らしやんした、そふして、最前の捕人の侍、取巻れてござんした、其仕  
廻いどふ付いたへ、そこをぬかつて能物か、此よふ廻る舌をもつて、  
立板よ水を流す如く、どんと匿ませぬよて、すつぱりと云拔て戻つた、雨  
降て地塊る、是からの猶あなた様も、帯紐といておかくまひやしとい  
といふ物じや、そじやないか、お天子様の機嫌いどふじや、く悦び  
や、今日の日天様が、かぐれ様よならしやましたらこそ、かふいふ内へお

成なされて下さるといふに、有がたいといふか、忝いといふか、目出  
たいといふか、嬉しいといふか、是が悦ばず居られふか、そふじや  
ないか、まだ嬉しい事が有、あすの明六つがこんど鳴と鎌足様が爰へ  
ござる、そこで勘當は赦される筈、淡海様の請合じや、日頃の願ひ叶ふ  
明日、餘り嬉しさ身祝ひも、呑酒屋叩き起しては神酒五合備へた、忝い  
く、坊主よ、あすから元の侍も成てわれも大小さすぞよ、兄の何  
所も居る、三作よ作よ、く胸を裂、妻の苦しみ、作のお前の戻りが  
遅さ、一人獵も行といふて、夜の内に何所へめつそふな、も獵師のさ  
しぬ、誠の弓取も仕立る、あすの夜が明次第、もふそろく明空かけ  
るぞ出世の雲が見へるぞく、有がたい、く、早ふ明六つが鳴て下され  
天道様頼ます、くと祈る夫が空を見つ、覗く表も裏表、夜明の我子の最  
期時、とふぞ此夜が、百年も明ずも有てくれかしと、胸の阡陌の色も、埴

むいも六つ悲いも六つ無量の物思ひ、ありやもふ今夜、てうど元日  
を待心地、果報に寐て待ちつとの間いねつまふ坊主いおれが懐もど、  
つぽりかぶる蒲團より早とろくの草臥寐入、何よもしらぬ悦び寐顔、  
夫といふたら三作が心もそむくよ夫の命、夫も悲し我子も可愛し、心の  
千よ鳴鐘を、早つきいだす興福寺、なむ三寶、鐘の數ふちまる子  
の壽命一つの命を二つよわけ、養親への孝行心、ほめてやつて下されど、  
言もいられぬ女房が、心の苦痛三つ、四つ重て響く胸先の斧、鉄も打るし  
心地、五体、五つよいつの世の報ひを爰も、修羅の鐘、打切六つ、知死期、  
かどわつと叫ぶと一時も、蒲團の中も血の涙寐入伏たる稚子の咽ふへ  
疊ぬふたる刃、杉松をむきたらしい、酔狂ひか亂心かと、涙もいつそ  
狼狽て咽へ流るし、鞠れ泣芝六居直つて聲を上中將、淡海公へ、上る、  
玄上太郎が心慮を疑ひ遊ばされ、最前の捕人の拙者が心を引見給ふ

鎌足公の廻し者と、氣の付ながら情ない、人質じちも心迷いよひ彌もつては疑うたがひを重かさねたれば、天子も爰こゝに置給はじ、冥加めうがも叶あひ、一天の君を匿かくまひ、身の大慶けいも水の泡あは、勘當御免けんぐめんもなき時、生ても死ても返らぬ心外ぐわい、命を切ても、他言致さぬ魂たましを、今改めては覽らん入る、女房ゴリヤ張誥はり太郎が義心、大事の心底見せ損ふた、三作といふ、そなたの連子元はたの秦の益勝ますかつと云樂がく官くわんの女房蝦夷えみしの讒ざんもて潰つぶれた家、力も成て下されど、頼れての後連義理のちづれの有子がかせも成て、鎌足公も根性こんじやうを見下られたが口惜おしさ、指殺さしころした、二人が中ちゆうに出生しうせうした此杉松、科とがなければ主人へ面晴はれ、鬼もなつてと酔た顔、酒でいなるて、劔つるぎを吞侍の義理が、敵じやと思おもひ諦め、坊主がかゝり、随分兄ずいぶんを可愛かあいがつてやりやいのとどふと座して、泣ければ、夫程このほどと思ふて下さる、其兄の三作の鹿殺しの科人とがもなつて、縛しばられて行たいいな、すりやかれが科を身も引受て、名乗て往たか、それ殺して

いど狂氣きやうきの如く、かけ出す弓手の岩壁がんぺきも、太郎たろう暫しと聲有て、内大臣鎌足公、神事の禮服小忌衣、心葉の冠梅かむりが香の匂ひ、残れる采女の何方、手も捧さかたる内侍所悠然と、出給ひ、玄上けんじやう太郎心底慥ていじしも見届たり、我れ敵の亂を、さけ、よそながら守護する天子、一日もても其方が、は難をさけし、適忠義、入鹿が心をかけたる采女、久我之助も云含め、猿澤の池も入水として、此興福寺の山奥も、鎌足諸共隠れ住、今日計らず汝が、鯨、大垣の刑も行く所、不思議も命助つたり、三作參れと仰の下、上下改めえづく、と携へ持し、寶の箱明て我子の無事な顔、まだ生て居てくれたかと思がけなき夫婦が悦び、不審尤、天皇は惱の祈の爲、天の岩戸の古例を引、天照太神も祈誓をかけ、百日の行滿する今日、争ひがたき神の力刑罰の地も堀穿土中、怪しき光り物、能く見れば、先年失させ給ひたる内侍所神璽の箱入鹿が父蝦夷大臣、とく々謀叛の根ざしめて、埋隠せし二色の寶顯れ出

しは是正まさは神明たみの助給たすけふ三作が命いのち、今改あらたて鎌足が三代の忠臣ちうしん去ながら  
鹿を殺せし春日かすがの掟おきて同し血脈ちやくの弟が死骸がいを埋刑罰うづめけいばつの表を立て菩提ぼだいの  
爲ため、印の石の其上うへは、突鐘つきかね一字いちの鎌足が改あらたて建立けんりやうせんと、仰あやうひ今は曉あかつきの六  
つは死たる七つ子の數かずを合あして、十三鐘の音おともぞ哀殘あわれりける、鎌足重おもて、  
此八咫こゝろの鏡かがみは天照あまてらすすは神の影かげを寫うつせしは正體せいだい勿體もつだいなくも蝦夷大  
臣けが穢けがれし土中どちゆうは埋置うづめおく其故そのよこそ一天の影かげを曇くもせ、目めまいさせ給ひ  
しも日月の鏡曇かすみりし故、我行法ぎやうほうのけふに當あたつて、鏡出かがみさせ給ふ事、常闇  
の世の岩戸いわを開ひらき天照あまてらす神と天皇の對面たいめんの時とき至いたれり出しゆつぎほぞふと奏問そうもん  
の聲こゑは應おこじて淡海公たんかいは手を取とて立出たちる折わかから向むかふ鏡の光ひかり朝日の影  
に暉かきて忽たちまちは目も明あきらかふ、なつかしの帝みかど様、采女さいに是こゝと走り寄たづり互  
は床ゆかしき物語ものがたりは戀中こゝろも恐れ有ある、太郎たうらう汝なんぢが射やたる爪黒つまぐろの鹿しかは入鹿  
が調伏てうぶくよて、頓やがて太平万葉たいへいまふの代よしろし召めす暫しばらくも、民間あまのは落給おちひし



天より地中へ落給ふ、是ぞ稀なる天智帝、御目も將ふ秋の田の蒔穂の庵  
の假殿木の丸殿へ准へて、けふ出陣の城廓へ惡魔追伏與福寺へ、我藤  
原の氏の寺いざや、是より臨幸と、先をはらつて鎌足の威風りん／＼綸  
言の汗が、涙の露ぬれ、草葉へ置る芝六が、妻乞雄子や、子故の闇明ても  
くらき六つ七つ十一十二十三鐘の古跡を、今へ傳へける

### ○第三

奈良の都の八重九重禁裏守護の太宰の館入鹿公のお成り迎、嚙き渡る  
奥女中、荒牧彌藤次一間を出、仕丁共、今日へ入鹿公は目出たのは悦び  
ふ、奈良の町へ入込の諸職人、商人、藝者へ受領を下たされんとの勅詔相  
誥たる町人ども一人づ／＼呼出せはつと答へて立ち出る縣めしかや諸  
人、司を給て夫れ／＼、國名を付し鳥帽子子の始めまかけし、鳥帽子  
やが、身を立鳥帽子兩眉へ、三大臣のお召迎、高き位やかけるぼし、十二の

冠式法の、るぼしやなれば平七を、頭平と受領なされける、跡へ出たのる  
ぼしと白丁彌藤次吃見、其方の神職な、神職ならばなせ吉田へ参つて  
受領を受けぬ、拙者め鹿島の事觸當年の辛の卯の年祟り年とござ  
つて、鹿島の寶殿よりでつかちあい光り物が飛出、神の扉が八文字と  
披け神馬の四足と大汗をかいとござる禰宜神主是を歎きは湯を捧て  
七坐の齋時とお鹿島の陀宣と氏子共が下用櫃としやりを切してむ  
らつぎをするで有と、人の物でも手廻り次第打殺て其日を凌げ、むくり  
こくり地の庭を潤ひして米の下直と錢の高ふさしてやろとの陀宣  
でござる無上禮法新兵衛嘉兵衛拂ひ給へ清めて給ふとしやべりける、  
扱の汝事ふれよな向後そちが受領と、口松の差出の頭佐平次と、ゆる  
せし跡へぼつとしよ髪言ねと手足黒くと、鍛冶やの木挺の衆てんから  
り、ころりてんくからりの相槌と打つや、打ち物元が焼刃の焼物なれ

備前の守とや名よしあふ櫻さくらも色香いろか取り交まじて、手品てしなやさしきびんさくら、京の水色よい染上の、との茶小紋ちせもんも見初めて染て酔よてじやらくらさ  
しの葉小紋はせもん、今夜こんや必かならずかならずやいの、松葉小紋まつばせもんの戸明とあきて門かどもちつとやつ  
て下くだんシテ、儕わいの伊勢いせか熊野くまのか、私わたくしの伊勢比いせひ竺尼はんに、夫そならバ比竺尼ひはんにの司つかさか  
雨あめなんどいいの楠くすの、櫻さくら作さくりのどつてう聲こゑ、おらの攝州せつしゅう西成せいせいの郡上ぐんじやう福  
島の船乗ふねのりでござります、夫そならバ大名の船歌ふねうた、上うへつ方かた方の珍めづらしからん、  
諷ふうへくくの聲こゑも連つれ々さつるつゝ共ともいつきやのふ來きてな、これきよ立たより  
見て有ある、おんめんもとはころり、ころりんなころく共とも、こんころがし  
やりかの、しやなりんがちよろよ、けんれんばまたのいよほん、ほんほは  
か枝えだや、はんは葉はもイモ、葉はへはんは葉はも、ろやんいよイモ、さらへ、諷ふうひ納おさ  
めし船歌ふねうたも、彌藤やふだう治ちの聞き入こゝろて、出でかしたく、此後このちの其方そのかたを、船ふねの頭かぶど  
なすべしと、云いひしより名なを船頭ふねがしらと、名付なづけし跡あとへ道心じやうしん者もの風呂敷ふうりょしきかたよ

ひよつかく、コリヤ汝所化ならべ上人あんにん和尚しやうも成りたい望か、イヤく愚僧ぐそうの願人坊主がんぱんしゆ寺號をお赦ゆるし下さりませ、願人がんとい何の宗旨しうしされば八宗九宗しやうをもれ、二季の彼岸ひがふの鉦太鼓かねたこで町々を、六齋念佛さいねんぶつお目よかけふと風呂敷ふろしきより、取出し始める大鼓の拍子ひやうし、やあんやうりうし、く、なつてんりうたん金銀花さいた、ぎんなんきんかん楊梅やうばいかん梅瓢箪ばいひやうたんほうせんく、やあんでつせん花くせんだんちんでうふようりんご、ちやうしゆん半夏草げさく、エ、スエくりよ、エ、スエリヨ、こんりやう、エ、スエリヨ、こんりやう、こんしん、こんりやう、こんしんく、こずへぶく、いしせほろみとすと、打ち納め、扱あ盆前ぼんぜんのせがき、い鑢鉢にやうぼなんど打ならし法界ほうかいの施餓鬼せがきく、と六字語、七月廿四日しちがつにじゅうよっぴは地藏菩薩ぢざうぼさつを脊せたら負お一つや二つ三つや四つ、十より内の縁みきり子は、小石拾ひらふて塔とうと積つみ、一重いちじゆつんで、親の爲、二重にじゆつんで、きやうり兄弟我身の爲と、回向えうきやうする庚申かのへさるといと、打うて、かうしんのだいまち、因縁いんえんも、

赤前垂を腰に巻住吉踊、四社のお前で扇を拾ふた、扇めでたや末繁昌  
住吉様の岸の姫松めでたさよ、白かなかねのべてのふ襷にかけてよね  
くはかるせきのと、せんとしのやさらいく、エ、踊仕廻へば彌藤次も、  
是はしんどい宗旨じやな、向後、其方を、曉山西方寺と寺號をお赦しな  
さるゝぞ、ハア、有難し忝しと、悦び勇春駒に、めでたやく、春の初め春  
駒なんど、夢も見てさへよいとや、くく三吉乗たか、右の袂も三七三  
夜、左の袂も三七三夜、兩方合せて六七六夜、くく勇舞たる春駒が、轡の  
紋もきつぱりと、能い男共ゆうせんの、伊達な下着を一つ前横目つかふ  
て白洲もつくばい、私、堀の素人淨るり三右衛門とや者、政太夫、播磨  
若太夫、越前、筑前大和と受領致す、是は大坂の名人藝、私の太夫號を下  
さらば有難ふござります、チヨ、淨るりを語とな、幸ひく、奥女中も聞たが  
る、無間の鐘を所望く、是は迷惑、私、ちりや聲で歌事、参りませぬ、い

かぬを是非せひと權威けんりの所望、迷惑ながら聲はり上あがり、デシく石いしもせよ、金  
もせよ、心ざす所の無間の鐘、其金爰こゝと三百兩、深山みやまおろし又山吹の  
花吹きちらす、われ聲こゑよて、語れば扱あつかもこの聲こゑ、最前の藥鐘やくかねやと、いつし  
よと置たら能よからふと、どつと笑ひを催もよほふせり、一興けいく面白おもしろし、梅が  
枝の諸木しよぼく先立咲花なれば、三右衛門も向後けうこうの咲太夫と改あらたむべしと仰  
よはつと悦よろこびて、お禮れいやせば残りし受領じゆりやう又明日と言渡し、いづれも、白洲  
を立出る召めし又應おこじて大判事清澄きよすみはかま袴の壁かべ積たかも角菱有、不和成中の定高さだたかが  
屋敷、互あひふそれと白書院しよいん、目禮めれいもせずつとと通り、入鹿公の御座の間へ誰  
案内仕れと、云捨て行んとす、定高さだたか聲かけ先づ暫しばらく珍めづらしや大判事殿、太  
宰さいの小貳が跡目を預るわらわが屋敷挨拶あいさつもなくお通りの女と思ひ侮あやま  
つてか、但し武家の禮儀御存ごぞんじなくば少ちつと御傳授ごでんじゆやそふかと、詞の非太  
刀襦うちかきさば捌さばき、騒さわがぬ清澄空きよすみそら嘯さけき、小貳存生々ぞんじやう領地りやうちの遺根ゐこんは寄り、此屋敷の内

へん今日迄足踏もせぬ大判事、入鹿公のお召も寄つて参たの勅諭を重  
んずる故、皇居の間へ出仕の心、女童も用なければ、挨拶する口へ持ぬや  
夫れなれば猶もつて、今日入鹿様お成なれば大内も同然、大判事には疑  
ひの事有つて、此定高は吟味致せとの勅諭、此詮議濟ぬ内の一寸もは前  
へん叶ひぬ、お扣へなされ清澄殿、珍らしき事を聞く、君は詮議の筋  
有バ檢非違使は仰て拷問有らん、何のは遠慮、元來は疑ひ蒙るべき覺  
へなし、なまぬるき女の吟味、受ける様な清澄でおりない、お身見事詮議  
して見るか、太宰の後家此定高が、急度詮議して見せふ、こしやくな、  
そこ退て早通せ罷ならぬと根も持つ遺恨、互い、折れぬ老木の柳、松の  
間の襖押しひらかせ、出は成りと警蹕の聲、二人も飛しさり恐れ入た  
る斗也、入鹿の大臣寛然と、上段の櫺より遙見下し、大判事、未明より  
参内せよと、勅使を立る、甚の遅参、見よ今日の午の上刻、流星南へ出

て北<sup>なんどく</sup>に拱<sup>たか</sup>するに万<sup>ばん</sup>乗<sup>じやう</sup>の位<sup>ゐ</sup>に即<sup>つ</sup>丸<sup>まる</sup>が吉<sup>きつ</sup>星<sup>せい</sup>夫<sup>ふ</sup>程<sup>ぢやう</sup>の事<sup>こと</sup>知<sup>し</sup>らぬ大<sup>だい</sup>判<sup>はん</sup>事<sup>じ</sup>でなし、  
但<sup>たゞ</sup>し、入<sup>い</sup>鹿<sup>ろく</sup>もつかへるが不足<sup>ふそく</sup>と思<sup>おも</sup>ひ、身<sup>み</sup>を退<sup>しりぞ</sup>か下<sup>した</sup>心<sup>こころ</sup>か、緩<sup>ゆる</sup>怠<sup>たい</sup>也<sup>なり</sup>ときめ付<sup>つ</sup>く  
れ、<sup>コハ</sup>詔<sup>みこと</sup>共<sup>とも</sup>覺<sup>さく</sup>へず今<sup>いま</sup>一<sup>いつ</sup>天<sup>てん</sup>四<sup>し</sup>海<sup>かい</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>ハ</sup>手<sup>て</sup>もしよくするとい云<sup>い</sup>ながら、  
いまだ殘<sup>ざん</sup>黨<sup>たう</sup>先<sup>せん</sup>帝<sup>てい</sup>も心<sup>こころ</sup>を寄<sup>よ</sup>る族<sup>やう</sup>有<sup>あ</sup>て、帝<sup>てい</sup>都<sup>と</sup>を疑<sup>うたが</sup>ふ折<sup>せ</sup>から我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が領<sup>りやう</sup>地<sup>ち</sup>紀<sup>き</sup>伊<sup>い</sup>  
國<sup>こく</sup>の、西<sup>せい</sup>國<sup>こく</sup>南<sup>なん</sup>海<sup>かい</sup>の咽<sup>のど</sup>首<sup>くび</sup>もて大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>の切<sup>せつ</sup>所<sup>しよ</sup>、弓<sup>きう</sup>を張<sup>はり</sup>矢<sup>や</sup>尻<sup>じり</sup>を磨<sup>みが</sup>ふ隙<sup>ひま</sup>なければ  
思<sup>おも</sup>ひざる遲<sup>ち</sup>參<sup>さん</sup>、其<sup>その</sup>上<sup>うへ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>臣<sup>しん</sup>第<sup>だい</sup>一<sup>いつ</sup>の大<sup>だい</sup>判<sup>はん</sup>事<sup>じ</sup>も、何<sup>なん</sup>事<sup>じ</sup>の<sup>ハ</sup>疑<sup>うたが</sup>ひと憚<sup>はど</sup>なくぞやけ  
る、其<sup>その</sup>子<sup>し</sup>細<sup>さい</sup>といつば、先<sup>せん</sup>帝<sup>てい</sup>の妾<sup>めかけもの</sup>者<sup>もの</sup>采<sup>さい</sup>女<sup>にょ</sup>の局<sup>くわう</sup>を、丸<sup>まる</sup>が后<sup>くわう</sup>妃<sup>ひ</sup>も定<sup>さだ</sup>めんと行<sup>い</sup>衛<sup>ゑ</sup>  
を尋<sup>たづ</sup>求<sup>ね</sup>める所<sup>ところ</sup>、猿<sup>さる</sup>澤<sup>さわ</sup>の池<sup>いけ</sup>へ入<sup>い</sup>水<sup>みづ</sup>せし由<sup>よし</sup>いかもしても合<sup>あ</sup>點<sup>てん</sup>行<sup>い</sup>ず、察<sup>さつ</sup>る所<sup>ところ</sup>采<sup>さい</sup>  
女<sup>にょ</sup>が有<sup>あ</sup>家<sup>け</sup>の大<sup>だい</sup>判<sup>はん</sup>事<sup>じ</sup>そちがよくしらふがなと思<sup>おも</sup>ひがけなき疑<sup>うたが</sup>ひも、清<sup>せい</sup>澄<sup>てい</sup>  
不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>の眉<sup>まゆ</sup>をしはめ、<sup>コハ</sup>存<sup>ぞん</sup>じ寄<sup>よ</sup>らざる儀<sup>ぎ</sup>、其<sup>その</sup>采<sup>さい</sup>女<sup>にょ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>こと</sup>は、猿<sup>さる</sup>澤<sup>さわ</sup>の池<sup>いけ</sup>も捨<sup>す</sup>身<sup>しん</sup>  
有<sup>あ</sup>しとい、誰<sup>たれ</sup>しらぬ者<sup>もの</sup>ぞなきも、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が行<sup>い</sup>衛<sup>ゑ</sup>存<sup>ぞん</sup>せしなどとい、何<sup>なん</sup>を目<sup>め</sup>當<sup>あた</sup>  
の<sup>ハ</sup>仰<sup>おほ</sup>なるぞや、<sup>コハ</sup>とぼけな、汝<sup>なんぢ</sup>が驗<sup>けん</sup>久<sup>く</sup>我<sup>われ</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>の采<sup>さい</sup>女<sup>にょ</sup>が付<sup>つ</sup>け人<sup>ひと</sup>ならずや



其親たるそちなれば、よも知らぬとい云れまじ、サア眞直まことは白狀はくじやうせよ陳ちんず  
るは於てい計ふべき胸有り、イヤのふ大判事殿お聞き有しか、わらひは仰  
付けられし詮議とい此事、サア覺へが有バヤされよと云せも立す、イヤだま  
り召れ、女メの指出る所でなし、イヤ勅諭ちよくちやうを受けての詮議なれば、勅答ちくたの有  
無なは寄て、其座のちつ共立たひしにせじと膝立直ひざたてし語寄て双方いどみ争あらそふ  
たり、入鹿大臣大日明あき、イヤ工たくんだり拵こしらへたり定高が領分大和の妹山、清澄  
が領地紀の國背山、隣國境目の論ろんは寄り、互は確執くわつしつせしとい表の見ぞか  
け、内々はいやし合せ、古主こしうの帝へ心を通いず儕等おのれど、我眼力ががんりきは違ひにせ  
じ、さすれば天皇采女みづのめの兩家の中は隠し置かんも知しる故、大判事が詮  
議を中付た定高コリヤそちよも此疑ひにかゝるぞよ、是は又君の勅諭共覺  
ませぬ、夫小貳おつとより、中惡き大判事殿、何故や合さふ様もなし、私わたくしは迄か疑  
ひに恐れながら、云いな女め、さ程音信不通おんしん つかうの中なるは、大判事が舩久我之

助、そちが娘雛鳥と、密通致し居いにかゝ、知るまじと思ふか、恥どもが縁と繫がれたる汝らなれば、兩方共々吟味し還れぬ、何と肝と答へふがど、あく迄邪智の一言も、何思ひけん大判事席を蹴立行んとす、透さず定高が刀の鑑むんずと取り、待ち給へ清澄殿、屹相かへて、何國へ、何國へとい、親とが不和成中を存あがら、忍び逢ふ、恥が不所存、引捕へて吟味せねば子供が縁を幸々和睦せしと云れて、我家の恥辱となる、チそりや此方も同じ事、一旦武士の意地、今更中が直りたい斗り、娘とわざと不義させしと、世上の人とさみせられて、過行給ふ夫へ立ぬ、わらひも俱々と裾引上かけ出す二人をはつたどねめ、私の趣意も立騒ぐ尾籠やつ、儕らが恥の不義を吟味せぬ、凡が尋るゝ采女が有家、サ何れからありと早くいへ、何とく、恥が性根いざえらす、采女殿の義に且て存せず、我詞も偽有ば、弓箭神の御罰を請んと、刀すらりと拔放し、丁くと今

打し、此上こゝも御疑うたがひ有あばいか程ほどの拷問げうもんなり共、サア遊あそばせとどつかど座ざす、わらひ迎むかへも小貳せうじが妻、家いへもかへて采女さいにょ殿の匿かくひぬ、水責みづめ火責かめも逢迎あうようも、しらぬ事こと存ぞんじませぬと詞ことばするどよいひ放はなす、然しからば采女さいにょが詮議せんぎひ追おて、先汝せんじらが面晴おもてなれば、匿かくひぬといふ潔白けつぱくも、定高さだかの雛鳥ひなどりを入内じふだいさせよ、又大判事だいばんじも覺さなきは相違さうゐなくば、久我くが之助のすけを今日けふより、朕みづかが目通めとりへ出勤しゅつこんさせよ、急度きゅうど其旨そのね心得こころえよど、何がぞ探さぐる當座どうざの難題なんだい、二人ふたりは胸むねみぎつくりと、答こたへも暫しばしなかりしが、良有やうて詞ことばを揃そろへ斯有かく難がたき勅諭ちよくちうごうを互あひの子供こどもが違背ゐはい致いたさば、云いふや及およぶと傍成あたりにる生なけ置おく櫻おうの一ひと枝えだ追取おどくしん得え心こころすれば榮さかへる花はな背そむくは於おいて忽たちまちも、丸まるが威勢ゐの嵐あらしも當あた真ま此通このとおりと欄おぼしきふ、はつしと打折うちくわみり落花らくわみ微塵せんはつと斗たたかりも親おやの心こころも共ともも、散亂さんらんせり、猶なほもゆるまぬ大音上おほおんじやう、彌藤やふどう治ち早はやく參まゐれ汝なんぢの百里もも照せうの目鏡めがねを以もつて、かぐ山やまの絶頭ぜつどうも急度きゅうど遠見えんけんを仕しれ、兩人ふたりよつく聞きこけ若少わかししでも用捨致もちうしさ

ば兩家の没収從類迄も絶するぞ、性根を定め早行けど、せき立詮意も親  
ゝの、思ひひ千ゝの胸の中、見せぬおもては、忠と義をはり誥し氣のため  
みなく、打連れてこそ、出て行誠は泰の趙高が馬と欺く小男鹿の入鹿が  
威勢ぞ類ひなき、かゝる所へ中門より追ゝ驅入鎧武者は注進と呼んつ  
て、白洲の頭をさげ、河内の國は武智郡司安彦、先帝は味方をして大島  
の城は籠りしを、官軍残らずはせ向ひ敵を攻付一晝夜は落城、大和は安  
曇の文次宗秀、當麻の邊は陣を取南都を攻る其結構、馳向ふて戦ひしは  
味方の官車利を失ひ残らず敗北仕ると息つぎ致す言上すれば、物  
數ならぬ逆徒のやつばら朕馳向ふて微塵もせんぞよ、彼穆王が龍馬も  
勝れし希代の名馬、吉野の牧より狩出したる、其馬引けと廣庭へ引出さ  
せ欄より、ひらりと打乗り名馬の勇手綱はいくりしと、轡の音は  
りんくく、綸言誰か背くべき、大地狹しと馬上の勢ひ刻む蹄も街の罅

いそふれ、やつと出陣の駒を早めて駈り行古への神代の昔山跡の國の  
郡の始めて妹背の始め山々の中を流るゝ吉野川塵も芥も花の山實世  
に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所、妹山の太宰の小貳國人の領地、川へ  
見越の下館、青山の方の大判事清澄の領内、子息清船、日外より爰に勘氣  
の山住居、伴ふ物に巢立鳥、餌と我と只二つ、經讀鳥の音も澄て、心細くも  
哀也、頃々彌生の初めつかた、こなたの亭より雛鳥の氣を慰めの雛祭り  
桃の節句の備へ物、萩のこは飯、炊の、小菊、桔梗が配膳の腰も、すふわり春  
風、柳の楊枝は、近く、小菊、いつものお雛に、殿でお祭りなされるれ  
ど、姫様のおしつらひで、此山峯の假座敷、谷川を見晴し、櫻の見飽、雛様も  
一と入、お氣が晴れてよからふの、こちらも追つ付けよい殿に、持つたら、  
常住あの様、引つゝいて居たら嬉しかろ、桔梗の何云やるら、何ぼ  
女夫並んで居ても、あの様、行儀、畏つて斗り居て手を握る事さへな

らぬ窮屈な契りいいや、肝心の氣る時、離れゝの箱の中、思ひの絶る  
間、有るまいと、仇口とも雛鳥の胸ああたりの人目せくつらひ戀路の  
其中、又親とくとい昔より、御中不和の關と成り逢ふ事さへもかた糸  
の、結ばれどけぬ我思ひ戀し床しい清船様、此山のあなたよと聞たを便  
り母様へ、お願ひやして此假屋、は顔が見たさの出養生爰迄、來れ共、山  
と山とが領分の境の川、隔られ物いひかゝす事さへもならぬ我身の  
儘ならぬ、今の中、思ひの種いつそ隔て戀託る逢れぬ昔がましぞかし  
と切なる思ひかきくとき、歎け、子供も、お道理でござりますすはん  
ふひよんな色事で隣同士の紀伊國大和、は領分のせり合で、お二人の親  
御様のすれ、雛鳥様と久我様の、妹背の中を引き分ける妹山背山、船  
も筏も御法度でたつた此川一つ、つい渡れそふな物、小菊瀬踏して見や  
らぬか、めつそふな、此谷川の逆落し、紀州浦へ一つてきよ流れて往た

ら鮫さめの餌食えじきしたがり雛鳥ひなどり様、お前の病氣びやうきをお案じなされ、此假屋かりやへ出養でやう  
生じやうさしなさつたり、よそながら久我様くがやう、お前を逢あう後室こうしつ様の粹すいなお捌さば  
き、女夫にふとして下さりませと、直ただきよお願ねがひ遊あそばしたら、よもやいやとい  
岩橋いわはしの渡わたる事こそならず共ともせめて遠目とほめよお姿すがたをと、障子しやうじぐらりと椽えん  
端はなよ、視みてぼるゝぬ共久我之助くがのすけのうつくしと父ちちの行末身ぎやうまつみの上うへを、守まもらせ  
給たまへと心中しんちゆうよ、念悲觀音ねひくわんがんの經机案きやうつくへじ入いたる顔形かたち、手てよ取様とりやうよ、あれゝ、  
机つくへよもたれて久我様の物思ものおもはしいお顔持かおもちお癪さかがなふこりつらん、お  
傍そばへ行いたい、ミ爰ゆきよ居ゐるいいなといへど招まねけど谷川やがわの、漲みちぎる音おとよ紛まぎれて  
や、聞きこへぬつらさ、しんき、こちらが思おもふ様やうよもない、ミこつちや向むかて見  
たがよいと、あせるお傍そばよ氣きの付つき、ほんゝ夫おとこれよ、口くちでいられぬ心のた  
け兼かねて認しため奥山おくやまの鹿しかの卷筆封ふしづふじ文戀ぶんこひし小石こいしよくくり添そへ、女にの念ねんの通  
せよと祈願きぐわんをこめて打うつ礫つた、からりと川かわよ落瀧津波たきつ波なみよせかれて流れ行

、「どんな心の念は届ても、女力の届かねば思ふた斗り片便り、返事を極  
 浦佐用姫の石も成り共成たいと、ひれ伏山のかひもなき、久我之助川も  
 目を付け、何國よりか水中も打たる石も重けれど、逆巻水の勢ひも沈み  
 もやらす流るゝは、重き君も入鹿と云逆臣の水の勢ひも、敵對がた  
 き時代の習ひ、夫を知て暫しの中、敵も従ふ父大判事殿の心、善か悪かを  
 三つ柏水も沈めば願ひ叶はず浮む時願成就、吉野を假の御板川太神  
 宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘取て谷を傳ひも水の面、見やる女中がすし  
 今間の小石が届いたか、久我様が川へ下りなさるゝ、あの岩角のあり  
 曲りが、川端がいつち狭ひ、幸のよい逢瀬と、いふも嬉しき雛鳥の飛立斗  
 り振り袖も裾もほらゝ坂道を折から風も散花の櫻が中の立姿えど  
 け難所も厭ひなく、久我様かなつかしやど、いふも思はず清船も、雛鳥  
 無事でと顔と顔見合す斗り意間の、心計りが抱き合詮方戻先き立り、申



し清船様わゑや、前より逢たさふ、病氣といひ立爰迄、來て居れど、親の  
敬さぬ中垣を忍んで通ふ事叶はず、女雛男雛も年より一度の七夕の、逢瀬  
に有る此様よ、お顔見ながら添事の、ならぬ何の報ひぞや、妹脊の山の、  
中を隔つ吉野の川は、鵲の橋はないか、とくとき言、開清船も楫有らば早  
渡りたき床しさを、胸より包みて、道理く、我も心は飛立ど此川の法度嚴  
しき、親との不和斗りでない、今入鹿世を取て君臣上下心く、隣國近邊  
といへども、親み有らば徒黨の企有んかと、互に通路を禁しめて船を留  
たる此川の、領分を分る關所も、同然命だより有ならば、又逢事も有べきぞ  
今流したる水の、柏波もまれて浮し、心の願ひ叶ふゑらせ入鹿が、掟  
嚴しければ、我も世上を憚りて、此山奥の隠住心の儘、鶯の聲、聞共籠  
鳥の雲井を慕ふ身の上を、思ひやられよ、雛鳥と儘ならぬ世を恨み泣、  
又逢ふ事も有ふとい、別るゝ時の拾詞、譬未來のとし様よ、勘當受る共

わえやか前の女房じや逆も叶ぬ浮世なら法度を破つて此川の早瀬  
の波も厭ふまじ何國いか成る方へなと連て退て下さんせわたりそ  
こへ行ますど、既又飛込む川岸又周章驚きどしむる姫く放えやど泣  
き入る娘短慮なり雛鳥山川の此早瀬水練を得たる者だ又渡り難き  
此難所忽命を失ふのみか母室後又歡きをかけ、我も彌憎しみかゝる、  
科科を重る道理必早まり召されなど制する詞一とすじ又思ひ語め  
たる女氣も今更よゐる折りこそ有れ大判事清澄様御入なりとえらす  
る聲はつと驚き久我之助歸るを名残り、押しとひるも、我身を我身の儘  
ならず、このふ待ての聲斗り、後室様御出と、告る下部又詮方も、なくく  
庵の打露れ登る坂さへ別れ路、力難所を行心地空又えられぬ花曇り  
花を歩めど武士の心の嶮岨刀えて、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を  
裂、川邊傳ふ大判事清澄、てなたの岸々太宰の後室定高又それと道分の

石と意地とを向ひ合ふ、川を隔てゝ、大判事様、は役目御苦勞又存じます  
と、聲襠をかい取りの夫の魂放さぬ式禮、清澄も一揖し、早かりし定高殿  
御前を下るも一時、參る所も一つなれ共此背山の身が領分、妹山の其元  
の御支配、川向ひの喧嘩とやら睨合て日を送る此年月、心解るか解ぬか  
のけふの役目の落去次第、二つ一つの勅命、狼狽た捌めさるなと胸くし  
やつく茨道、脇へかはして仰の通り、入鹿様の御詮意、お互に子供の身  
の上受合ふての歸りながら、身腹に分けても心の別く、若あつとやさ  
ぬ時の、マゝい前よりどうせふと思し召す、知れた事、御前で承つた通り、  
首打放すぶんの事は、不所存な駈け有て益なくなふて事かけず、身の中  
の腐り殺で捨るが跡の養生畢竟親の子のと名を付るゝ人間の私、天地  
から見る時の同じ世界も涌た虫、別は不便と存じやさぬ、さきつい思  
ひ切り、私の又いかふ了簡が違ます、女子の未練な心からの、我子が可愛

て成りませぬ、其かゝりよお前のお子息様の事、眞實何共存じませぬ、  
只太切ないこちらの娘忝い入鹿様のお聲のかゝつた身の幸譬どふやさ  
ふ共、母が勸て入内させ、お后様と多くの人、敬ひ傳かそうと思へば此  
様な嬉しい事、ござりませぬ、と空笑ひ、又得心せぬ時、そ  
りやもふ是非、及ばぬ、枝ぶり悪い櫻木、切て繼木を致さねば、太宰の  
家が立ませぬ、そうなくて、叶ふまい、此方の駈迎も得心すれば身の  
出世、榮花を咲す此一枝、川へ流すが知らせの返答、盛りながら流るゝ  
い吉左右、花を散して枝斗り流るゝなら、駈が絶命と思われ、いか  
も、此方も此一枝、娘の命生け花を、散さぬ様、致しませう、今一と時が  
互ひの瀬、此國境の生死の境、返答の善悪、寄つて、遺恨、遺恨を重  
るか、是迄の意趣を流して、中吉野川と落合ふか、先づ夫れ迄、双方の  
領分、お捌を待つてをりますと、詞時つ親と親、山と大和路分かれても、替

らぬ紀の路恩愛の胸の霞も埋れし庵りの、内も別れ入る立派よいひに  
放しても定かぬ知らぬ子の心覺束なくも呼子鳥娘と谷の戸も音な  
ふ初音雛鳥も母の機嫌をさし足も噂様よふぞ、今日のお目出たふ存じ  
ますと、武家の行儀の三つ指も、かたい程猶親子の玄たしき、よふ飾が  
出来ました今日もそなたの顔持ちもよさそふで一入めでたい、母も祝  
ふて献上の此花、備へてたも、いくつも成ても雛祭りの嬉しい物、女子共  
何なりと、娘が氣も合遊びをして、随分と勇めてくれど、いつも勝れし後  
室の機嫌の訴詔のよい出えは、今のをちやつと乗り出して、はらうじま  
せと、娘も、腰押されても兎や角ど、いひそくこれのもつれ髪、のふ雛鳥  
背たけ延た娘を親の傍も引付けて置け、結句病の種夫れで急も思案を  
極め、そなたもよい殿様を持す、嫁入さすが嬉しいか、正、氣遣ひ仕やん  
な、可愛娘の一生を任す夫、そなたの氣も入ぬ男を、何の母が持さふぞ、ま

姉共、いゝ左様でござります、氣の通つた後室様、嫁入の先、大かた今  
 の、こがるゝ君でござりませふと、押し推當とも得手勝手、誰もか縁を組  
 紐、胸の眞紅のふさがる箱取り出し、妹脊をならぶる雛の日の嫁入の  
 吉日、此箱の主、極る殿は雛の膳で夫定め、こそなたの夫と云ひ誰有  
 ふ、入鹿大臣様じやわいの、そんならわたしを嫁入さすとい、太宰の  
 小貳が娘離鳥、美人の聞へ敵聞達し、入内させよと有難い勅諭、いはつ  
 と恠りうろくと詞の涙、ぐむ斗り、肝が潰れる筈、夫とやすも恐多い  
 一天の君を聲と取る家の面目、日本國も此上のない嫁入の随一、果報な  
 娘、此様な目出たい事が有物か、女子共、いゝお目出たいとやすふか、い  
 つそ亂騷でござりますと、工合違ひの嫁入り、菊も桔梗も投げ首の、二  
 人の小腹立て行、母の心も色と咲き分けの枝差出し、親の赦さぬ云か  
 いし、徒に呵つて返らず、一旦思ひ初た男、いつ迄も立通すが女の深破り

やとい云ぬが貞女の立様か有りそふな物、とつくりとよふ思案しや、此  
花の八重一重、互は不和なる親との心揃ぬ二つの花、一つ枝は取り結  
び切放す離されぬ悪縁の仇花、今そなたの心次第で、當時入鹿大臣の  
深山下風は吹散され、久我之助の腹切ねばならぬぞや、雛鳥と縁を切て  
入鹿様へ降参すれば、清船も命を助る、えらせの川へ流す櫻、あるか散ぬ  
が身の納り、時は従ふ風は靡き、君が手生けの花はなれば、八重も一重も  
恙なふ九重の内は傳るゝ互の幸、戀しと思ふ久我之助助けふと殺さふ  
と今の返事のたつた一つ、貞女の立様、サア見たいと、戀も情も辨へて、義  
理の柵せきとめても涙せき上々ながら母様段々聞譯せられたお詞の  
背きませぬ、そんなら得心して入内えてたまるか、アイ、ア、嬉しや、出かま  
やつた、夫でこそ貞女なれ、馴ぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑ひれな  
けふより内裏上臈の髪も改めすべらかし、祝ふて母が結直してやりま

まよといそく立ちの立ながら娘の心思ひやり、別れて櫛のはかなさ  
も解ほどかれぬ浮思ひ重き脊山の庵の内父が前も謹で、久我之助が必  
底聞てし召分けられ、切腹御赦免下さる事、身も取ていか斗り大慶至極  
と手をつけ、默然たる大判事、長打療む、目を開き、今朝入鹿大臣此大判  
事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投たりどの偽り、其方が、舩久我之助、人  
知らぬ方へ落としやりしと極れば、必定汝らが方、匿有べしとの難題、元  
來知ぬ大判事、能く思へば采女の御難をさけん爲、猿澤の池も入水の舩  
もてなして、密に落とし参らせし中、久我之助が智恵でない鎌足公  
の差圖を受ての計らひと、知たし身もけふが始め、親も陰に包みし  
大事を洩さぬ心の金打若輩者、神妙の仕方、出かしたると思ふ  
付け、邪智深き入鹿、久我之助が降参せば、命を助ん連れ來れど、情の詞に  
釣り寄て、拷問もかけん謀責殺さるゝ苦しみを切腹さすれば、采女の詮



議の根を斷大功天下の主の爲に、何れ一人など替ふ生る草一本、  
引ぬくよりも瑣細な事と、涙一滴こぼさぬ武士の表、子の可愛ない者  
が凡生有者ふ有ふか、餘り健氣な子に耻て、親が介錯えてくれる、侍の續  
羅を飾、いかめしく横たへし大小、齡が首を切刀といふ五十年來知ざりし  
と、老の悔も清船も、親の慈悲心有難涙、命二つ有ならば君も死て忠義  
を立て父も生て養育の恩を送りやさん、今生の殘念は一つと、顔  
を見上げ見下してわつとひれ伏し親子の誠、こなたの亭も母後室、  
目出たい、そなたの名の雛鳥を、其儘の内裏雛、装束の付け様も此女雛と  
見合せて、早く有りければ、恨めしげに打守り、女夫一對いつ迄も  
添遂るこそ雛の徳、思ふ人引離され、何樂みの女は后、茨の絹の十二  
一重雛の姿も恨めしと、取て打付け様板も、ころりと落ちし女雛の首、驚  
く母の胸板も必死と極る、娘の命、包めどせきくるはらく、涙娘入内さ

ずといふたに偽り、眞此様も首切て渡すのじやないのふき、そんならはんくゝも貞女を立さして下さりますか、忝い有難いと、伏し拜む手を取て、入内せずも死るのを、夫程も嬉しが、娘の心えらいでならふか、あつと受ても自害して、死る覺悟の知ながら、そなたの死る事聞いたら、思ひ合な久我之助、俱も自害召れふも知れぬ、せめて一人の助けたさ、一旦得心したとして、母が手づからといた髪、下げ髪じやない、成敗のかき上髪介錯の支度じやわいの、高いも卑いも姫ごせの、夫といふにたつた一人、穢らしい玉の興、何の母も嬉しかる、祝言こそせね、心斗りの久我之助が、宿の妻と思ふて死や、是程も思ふ中、一日半時添しもせず、さいの河原へやるかいのと、引き寄せく離鳥も膝も取付き、抱付き、忝さと嬉しさと逢て別るゝ名残の涙、一つも落る三つ瀬川、川を隔て清船が、最期の觀念惡びれず、焼刃直なる魂の、九寸五分取直し、腹もぐつと

突立るつきたつ、暫引廻すしばらく、覺悟かくごの切腹せく事はない、冥途めいじの血脉けつみやく讀よみさしの  
無量品むりやうほん、親おやが讀誦はくじゆする間、一生しやうの名残り女おんなが頬ほ一目見てなせ死しぬ、存ぞんじ  
も寄らず此期このとき又またんで左程さほど狼狽ろうたた未練みれんな性根しやうこんのござりませぬ去りな  
がら、今いまの際きわの御願ごがんひ、私相果はてしと聞きば、義理ぎり又また繋つなれ雛鳥ひなどりも俱とも生害しやうがいと  
すべし、左有さゆうする時ときの太宰たさいの家も斷絶だんせつ暫しばらくの間かんながら切腹せつぷの義ぎにお隠かくし  
なされ降參承知かうさんしやうち致せし休やすみ後室方こうしつへお知しせ有あらば女おんなも得心とくしん仕り、入内いりない  
致せば渠儂かれが爲ためめ、不義ふぎの汚名おごめいの受たれ共、是こゝぞ色いろ迷まよひぬ潔白けつせく、出でかし  
た能氣よきが付た年とし來立きたたてぬく武士ぶしの意地いぢ、不和ふわな中程義理深ふかし、命いのちを捨する  
の天下てんかの爲ため助る、又家の爲ため、氣づかひせずと最期さいごを清きよふ花はなの三吉野侍さんきちよざむらい  
の手本てほんよなれと潔いさぎよく、いへど心の亂咲みだれきあたら櫻わかの若者わかを、ちらす惜おしさ  
と不便ふびんさど小枝こえだよそいぐ血ちの涙落なみだて、波間なみだ又また流れ行い、夫れ共知らず悦よろこぶ  
雛鳥ひなどり、花はなが流るゝの嬉うれしや久我様くがさまのお身み又また恙つかのないゑるし、私わがの冥めい

途へ参じます、千年も万年も、御無事で長生遊ばして、未來で添ふて下さ  
えせと心でいふが暇乞、思ひ置く事、云置く事もふ何よもござんせぬ片  
時も早ふサかゝ様、切てくゝと身を惜まぬ、我子の覺悟も勵され、胸を定  
めて取り上れど、刀の鞘も錆付く如く、離れ兼たる血脉の継、今切り殺す  
雛鳥を、無事とえらする返事の櫻、同じく川も浮ふれば、嬉しや、是ぞ雛  
鳥が入内のえらせ、久我之助が心の安堵、采女の方の御有家の、最前申し  
上る通り、此世も心残りなし、御苦勞ながら御介錯、く噂様切つていの、  
未練もござんす母様と泣かぬ顔するいちらしさ、刀持つ手も大磐石思  
ひの同じ大判事、子よりも親の四苦八苦、命もちりく、日もちりく、  
そふじや、早酉も入る、日輪の娘がお迎ひ彌陀の、來迎西方淨土へ導き給  
へ、南無阿彌陀佛と眼を閉て、思ひ切つたる首諸共わつと泣聲答る、鴈肝  
も、徹して大判事、刀からりと落たる障子、雛鳥がくび討つたか、久我殿

ハ腹切てか、テえなしたりとどうと坐し、悔も泣も一時又鞠て詞も、なかりしが、良有て定高聲を上、入鹿大臣へ差上る雛鳥が首、御掄使受け取り下されと呼ゐる聲を吹き送る風の案内又大判事歎きの、姿改めて衣紋繕ひしづくどふり立つ、川邊の柳腰、娘の首をかき抱き、大判事様、わけて何よも申しませぬ、御子息の命いどふぞと思ふた甲斐もない、あへない有り様、お前様のお心も推量致して居ます、添え添れぬ惡縁を思ひ合たが互の因果、此方の娘も添たいくと思ひ死餘り不便に存じます、せめて久我之助殿の息き有中又此首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入りさす心實尤、嫁ハ大和賀ハ紀伊國妹脊の山の中又落る、吉野の川の水盃、櫻のはやしの大島臺目出たふ祝言さしませふわい、そんならは迄の心もとけて、互ひ又姪同士、忝いと悦ぶも跡の祭り、ほん又脊たけ延た者を、いつ迄も子供のやうと思ふて暮すハ親のならひ、あまやか

した雛の道具一人子を殺して何よせふ跡に置く程涙の種秘共其一式  
殘らず川へ流し灌頂未來へ送る嫁入り道具行器長持犬張子小袖簞笥  
の幾棹も命ながらへ居るならバ一世一度の送り物五町七丁續く程美  
と敷せんと樂しみと思ふた事引かへて水と成たる水葬禮大名の子  
の嫁入と乗物さへも中くし記念も仇の爪琴と首取乗する弘誓の船  
あなたの方より彼岸と流るゝ血汐清船が今般の顔ばせ見る親の口に  
祝言心の稱名千秋萬歳の千箱の玉の緒も切て今いあへなき此死顔生  
きて居る中此ようは聲よ嫁よと云ならばいか斗り悦ばんは領分の遺  
恨より意地と意地を立通す其上重る入鹿の疑ひ中直るも直られぬ  
義理と成たが二人が不運あれ程思ひ詰た嫁何の入鹿と随ひて迎も死  
ねばならぬ子供一時は殺したる未來で早ふ添してやりたさいひ合さ  
ねど後室よも是迄不和な大判事を煙と思し召ばこそ、恥と立て一人の

娘、よくこそお手ふかけられし、過分くわぶんも存る定高殿さだたかどの、勿躰なづかない、其お禮  
いあちらこちらふつゝかな娘故、大事のお子をは切腹せつぷく器量きりやう筋目すぢめも勝れ  
た殿は、夫そとも持た果報者くわはうしや、どいひながら、あれ程迄手しほこかけて育て  
た子を又手ふ掛けて切る心こころ、推量すいりやう致してゐる、武士の覺悟かくごの常ながら、ま  
さかの時の取亂し、介錯かいしゃく仕後しごれ面目ない、いゑく、それで目出たい此祝  
言是がほんの葬さうと嫁入一代一度の祝言しうげんも、智殿の無紋の上下、首くびばかり  
の嫁は寮りやうも、對面せふといしらなんだ、それも子供が遁のがれぬ壽命うめ、兎うも  
角かくも世の中の子といふ文字も死の聲の、有も定まる宿業しゆくごうと、隔へつる心  
親おやの積る思ひの山やまく、とけて流れて、吉野川いど、漲みちるばかり  
也、涙はらふて大判事首かき上て聲高く、聆清船承りんしやうせんいれ、人間最期の一念  
よよつて輪廻りんゑの生を引とかや、忠義も死する、汝なんぢが魂魄こんぱく君父くんふの影身えみも付  
添そて、朝敵退治てうてきたいちの勝軍を草葉のかげより見物せよ、今雛鳥と改めて親が

ゆるして沈<sup>ちん</sup>未來、五百生迄かいらぬ夫婦、忠臣貞女のみさほを立死たる  
 ものと高聲<sup>かうしやう</sup>は、閻魔<sup>えんま</sup>の廳<sup>ちやう</sup>を名乗て通れ、なむ成佛得脱<sup>じやうぶつとくだう</sup>と唱<sup>とな</sup>ふる聲の聞へ  
 てや物得いねど合す手を、合せ兼<sup>かね</sup>たる此世の別れ、早日も暮て人顔も、  
 見へず庵<sup>いほ</sup>りの霧隱<sup>きりかく</sup>れ、うづむ娘の亡骸<sup>なきがら</sup>にこなたの山よといまれど、首<sup>くび</sup>  
 脊山<sup>けんし</sup>は檢使<sup>けんし</sup>の役目、我子の介錯<sup>かいしやく</sup>涙の難<sup>ひが</sup>、よしや世の中憂事<sup>うれじ</sup>に、いつかたへ  
 まの、大和路や、跡は妹山、先だつ脊山、恩愛義理をせき下す、涙の川瀬、三吉  
 野の花を、見捨て、出て行

○第四

引いたり、引いたり、チット、み月七日、例年<sup>れいねん</sup>の水を新井<sup>あらゐ</sup>は操返<sup>くも</sup>す釣瓶<sup>つるべ</sup>の綱も  
 三輪<sup>わ</sup>の里、酒商賣<sup>しやうばい</sup>の世杉屋が身過ぎの水の内井戸をわけて、祝<sup>いは</sup>ひの賑<sup>にぎ</sup>に  
 しき、サツく濟<sup>き</sup>だど取<sup>み</sup>と、御酒洗米備物<sup>みさひよねもの</sup>、皆<sup>みな</sup>汗<sup>あせ</sup>を入<sup>いれ</sup>ける、主<sup>あるじ</sup>の母<sup>はは</sup>の納戸<sup>なんど</sup>  
 を運<sup>はこ</sup>ぶ用意<sup>ようい</sup>の酒肴<sup>さけさか</sup>、いつよないはやく機嫌<sup>きげん</sup>、近所<sup>きんじよ</sup>の衆<sup>しゆ</sup>どなたも大義<sup>だいぎ</sup>で



ござんえ、た嘉例の通り酒盛して暮る迄ゆつくりと遊んでいんで下さんせ、土左衛門さん、年かさはお前から酒始めて下さんせ、又雑作なよしよさんせいで、はいらが相借屋で手傳ふのも、年中爰の井戸の水をつかふ恩返し、のふ五洲兵衛そふじやないか、そふ共、氣をはつて貰て術ない、是からいつもの通り賑やかと遊びましよ、野平藤六さん、ござや、夫れこそふと、かみさん、見れば爰もてらやの様ふ、七夕様が祭て有るな、見て下さんせ、爰たてないと思へんえ、が、こちの娘の、お三輪、何やら星様願が有る、迎あの様、内で祭も色々の備へ物、ませた世界、えやないかいな、そりや、寄特なこつちや、そして此お娘の留主かへ、ちいさい時いたてら子やへ、七夕と呼ばれました、一つ呑で下さんせ、子太郎、酌を、おらぬか、どりや、吸物、豆腐でも焚て来まえ、よと母親の、納戸へ入れ、バ打ちくつろぎ廻る、盃底なし共、

引受く、いつき香肴の鉢を、引き寄せて箸放さずの、めつた喰丁稚の子  
太郎靱顔、扱、氣味のよいとい挨擦、や、よつ程下作な香様、や、井戸  
の鮎が水呑む様、口明いてがつぶく、夫れで、味が知れよくから、  
此酒のかみ様がはり込で、こちの名酒の第一番男山といふ酒、やが、  
こな様達の本のむちや香、此銚子のかりめから、もふ鬼殺しとしてく  
れふ、そして、よいかげん酒呑んしたら、いつもの通り騒ごかい、こち  
のお三輪様の三味線と、太鼓も借りて來て置いた、おつと合點と口利の、  
土左衛門が眉、皺、夫れ、そふ、やが、此隣へ近頃來た相借屋の烏帽子  
折、此井戸がへも立合ず、あんまりなめた奴、やないか、野平何と思や  
るぞ、く、なま、だらけた顔付で、馬鹿いんぎんな生れ付き、平生ぬかす挨  
撥も子細らしい切り口上、毛唐人のやうなやつ、大かた、今時花、早學文  
といふ本を見て、唐のはめ、句をしをるの、や、此井戸がへも出合ぬから

い、急度物いひ付けてやろと借屋の内の神様達、御詫宜も取らぬ、夫れ共  
えらすのつしゝ歸る隣の烏帽子折、辛き世渡りあま口より羊羹色の黒  
小袖、一腰指た取なりぬ、浪人どこぞえられける、門口より腰がゆめ隣家より  
かります其原求女でござります、お屋敷方の用事より付き、未明より罷出只  
今歸宿仕る、後室様より彌御機嫌うるのしうござりませぬ、後刻繪りと  
御意得ませぬと我家へ入を惣とが、これゝゝ待たんせ、けふの  
爰の井戸がへ、相借屋が寄て居るのぬ、こな様斗り來すよいて付合が濟  
のかい、但しぬおいらを潰すのかど、ねだりせりふぬ求女に悔り、上り口  
より兩手をつき、是は、お顔を見れば皆合璧のお旁、是の井戸がへお手  
傳ひ、曾以て私存せず、是とやすも不案内から先格の作法を存せず、段々  
の失禮眞平御赦免下されど、疊より額すり付ける、これゝゝ、又子細らし  
い事いへんすかいの、勝手をえらぬやえよとがない、了簡せいあら夫

で濟、こつちも一番いふた跡の、いざこざのないわいの、此土左衛門が  
呑込だく、然らばあかた様がお取あしで、个様も御教訓なされた上、  
其いざこざとやら、御遺恨のござりませぬか、サアもふよい云んすな、扱  
ふいらの餘程酔て居る、是からの嘉例の騒ぎや、調子が合いで面白、  
此石できゆつとやらんせ、忝ふのござります、私一滴もたべませぬ、  
そしたら勝手次第、是からが騒の趣向、此土左衛門も烏帽子や殿、五  
洲兵衛も丁稚の子太郎、しめて四人の大おどり、三味線大鼓は野平藤六  
よいかく、求馬様も合點か、私にも其踊を、こな様の、此借屋での新  
面、猶踊もやならぬわい音頭もおれが二役ぢや、千代の始めの一と踊  
り、先は松坂こへたる、松坂こへたやつさ、踊はありやく、  
殿のもじくと、手持ちぶさたもみえぼし、  
立てゑぼしと折かけた、  
風折ゑぼし見すまして帆かけゑぼしと歸

らるゝ、ヤットサ 家主もぎ兵衛いつきせき、いかゝ嘉例カレの祝いわいでも、あんなり騒さわが、かさ高たかなど、門口こわから聲高こゑよ、わめいてはいれど、いかな事、耳へも入いれず、ヤットサもぎ兵衛叶なずども、くゝ又、呵しかる詞ことばも、拍子ひやうしづき、ヤットサ 此こ家主をそでよして、酒を吞のめ共云いべこそ、ヤットサ、儕等われら斗うり吞喰くひ、近所かまを搆かまひぬ大騒おほさわぎ、ヤットサ 是程いふても聞入きこえや、家明付あけるが合點あてか、サ、合點あてぢや、是を來て見よ、かしのへ、お家主渡したと、踊拍子おどの醉機そい嫌夢げんむ中ちゆうよ成て立歸たてかへる、家主跡あとよ、どほんと成なり、やくたいたもないやつら、どうくゝおれ迄夢中よした、婆様ばさま内うちよ、逢あたいといふ聲聞こゑて納戸うら、是こゝに、お家主様あやか、子太郎め、あなたがお出なされたら、なせおれよしらせおらぬ、ア、ニ、いぬんすやら、わのお家主様も、いんま迄同おなじ様ようよ踊おどて、有た物、又つけくゝ、と何云いある、ヤ、く、よし、なんぞ御用ごようでござりまするか、ア、用共くゝ、大事だいじの用、去るお侍さむらいから頼たのれたが、入鹿様いんろくの云付いで、鎌足かまといふわろの息子むすこの、淡海方たんかい、流る

浪して居ゐげな、夫れを見付みつけ出したら大金、何でもこちへござれ、とつくりと云て聞きそ、ちやつとくくく、くそしたらお前へ参りましょ、ヤ  
子太郎ねよ、サア聞いそがしう成つて來たもふ日が暮れたそふな、火も消けして見せ  
明けい、用心しん氣を付けい、又此娘こにてらやから戻りが遅おそい、酒買しが來  
たら擲たく出せ、盜人たうきが來たら酒はかつてやりおれど、氣のせく儘は間違まちがひ  
だらけ、打連うちてこそ出いでて行、目と俱いまいとなむさまも入相いりあひの、四方のいち  
ぐら戸ざし時、子太郎跡あとを打見やり、灯を上げ表おもての戸夜の構かまへのそこ爰  
ど、こなたの道々、歩あゆよる、振ふりの袖そでの香かやこどなき面おもてを隠かくす絹きぬかつぎ、誰し  
ら絹きぬのやさ姿うか窺うかがふ内うちは隣となりの軒つきしらせのしんぶき主もとのの求もとめ、今宵こんやいどふし  
て早はやかりし、くこちへと共跡いっしょい、いわず語らず手を取とて、戸口立たて寄入よせる  
跡あとは、子太郎不審顔ふしんが、隣の門口耳かみどをわて、聞きこすまして立戻りたてもど、なんでも隣の  
ゑぼしめい、おれとい違ちがふてよつ程ほどゑらい色事いろこと仕しやわい、わいつが見

事をえぼして、代物えめかると聞へた、このお娘は聞せたら大抵の  
事じや有まい、はし早いやつで有ると、つふやく所へ、娘のお三輪寺  
子や戻り、足早に門口はいれば、お三輪さん戻らんしたか、く事や  
く、大事や、あの人のなんやいの、私に胸りさやつ  
たわいの、さやつたわいの、さしやつたわいの所かいの、お前も忠義  
をいふて聞す、忠義とい何の事やいの、忠義とい忠臣の事やわいの  
の、其忠臣のえつて居るがの、夫れがどうぞえたかや、其忠臣の隣の  
えぼしめがな、隣のえぼしとい、求様の事かいの、求馬、其求の姿  
からおこつた事、このかみ様の家主殿へ用が有ていかえやつた、其跡  
へ何じやかえらぬが、眞白を絹をかつぎ、幽霊かと思ふたら、美しいげん  
さいが隣の門口とくと叩た、そしたら求様がすつと出て、よう早ふ來た  
と手と手を取て内へはいつた、夫からおれがえつとして聞てゐたら

とこちへ雇ふ男どもが、朝の間は酒桶洗ふ様よ、シイといふ音がえた、どふでもありや求様まんが、さしらでこすると見へるわいな、サントお三輪様マン、だまつて居られまいが、ナそんなら何といやる、求様まんの所へ美しい女中様が見へて、其女中様を連立てはいらえやんしたといやるのか、アイそりやア合點のいかぬ事、幸さいわひかゝ様も留主るすあれば、そなたいて求様まんを、爰へ連て戻つてたも、ナット合點吞込だど、走り出て隣の門、破る斗りよ打たゞき、コレ求様隣の酒やから使ふ來た今のが濟んだら印判時つてござんせど、口から出次第、求びつり何やらんと立出れば物をもちわす、アくこちへと無理やりよ手を引連て我家の内、夫れと見るゝ娘のお三輪、口よいねどあからむ顔、求様まんお歸りなされたか、ホ是いゝお三輪様まんてら屋へお出なさつたげあと、互よあちな墨付きを子太郎ねがひつ取て、アかれが役詞のもう是迄、そこで何かの立て引きさんせ、爰らで我ら粹すいを通し夜食やしきの扶た



持<sup>ち</sup>ゝ有<sup>あ</sup>つかふ、兩人<sup>兩人</sup>共後<sup>共</sup>は逢<sup>あ</sup>ふと納<sup>なん</sup>戸<sup>戸</sup>へ走<sup>は</sup>り入<sup>い</sup>る、跡<sup>あと</sup>は二人<sup>二人</sup>のつき  
はなくおぼこ育<sup>そだち</sup>の娘<sup>むすめ</sup>氣<sup>き</sup>ふ、思<sup>おも</sup>ひ詰<sup>つ</sup>たる一<sup>ひと</sup>と筋<sup>すぢ</sup>を、いれふとすれば、胸<sup>むね</sup>せま  
り、今<sup>いま</sup>子<sup>こ</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>らう</sup>は聞<sup>き</sup>たれ、美<sup>うつく</sup>しい女<sup>を</sup>中<sup>ちゆう</sup>様<sup>さん</sup>が、宵<sup>よひ</sup>からお前<sup>まへ</sup>へ來<sup>き</sup>て、まやげな、定<sup>さだ</sup>  
めて夫<sup>そと</sup>れい隱<sup>ひそ</sup>し妻<sup>つま</sup>、是<sup>こゝ</sup>迄<sup>まで</sup>お前<sup>まへ</sup>とわたりしが、中<sup>ちゆう</sup>逢<sup>あ</sup>事<sup>じ</sup>さへもたましく、と千年<sup>せんねん</sup>  
も万年<sup>まんねん</sup>もかはらぬ契<sup>ちぎ</sup>りとおつまやつた、其<sup>その</sup>約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>のいつわりか、浮<sup>う</sup>世<sup>ぜ</sup>の譯<sup>わけ</sup>  
も辨<sup>わ</sup>へぬ、在<sup>ざい</sup>所<sup>しよ</sup>育<sup>よく</sup>のわたりでも、いひかゝした事<sup>こと</sup>忘<sup>わす</sup>れはせぬ、あんなりむ  
こいと、取<sup>と</sup>付<sup>け</sup>て涙<sup>なみだ</sup>先<sup>さき</sup>き立<sup>たち</sup>恨<sup>うら</sup>言<sup>ごん</sup>、是<sup>こゝ</sup>の思<sup>おも</sup>ひも寄<sup>よ</sup>ぬ疑<sup>ぎ</sup>ひ成<sup>な</sup>程<sup>ほど</sup>女<sup>を</sup>中<sup>ちゆう</sup>の來<sup>き</sup>て居<sup>ゐ</sup>る  
が、あれい、春<sup>はる</sup>日<sup>が</sup>の神<sup>かみ</sup>子<sup>こ</sup>殿<sup>どの</sup>、其<sup>その</sup>連<sup>れん</sup>合<sup>ごう</sup>の禰<sup>ね</sup>宜<sup>ぎ</sup>殿<sup>どの</sup>の烏<sup>くわ</sup>帽<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>を、眺<sup>のぞ</sup>み見<sup>み</sup>へたの、ま  
や、美<sup>み</sup>女<sup>じよ</sup>はあろか、いかな天<sup>てん</sup>女<sup>にょ</sup>が影<sup>えい</sup>向<sup>かう</sup>有<sup>あ</sup>ても、外<sup>そと</sup>へあつちる心<sup>こゝろ</sup>はない、和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>三<sup>さん</sup>神<sup>しん</sup>  
を誓<sup>ちかひ</sup>ふかけ、いつはりのやすぬと、時<sup>とき</sup>の間<sup>ま</sup>似<sup>に</sup>合<sup>あ</sup>落<sup>らく</sup>付<sup>け</sup>せ、さすがおぼこの  
解<sup>と</sup>やすく神<sup>かみ</sup>様<sup>さん</sup>迄<sup>まで</sup>誓<sup>ちかひ</sup>言<sup>ごん</sup>ふ、夫<sup>そと</sup>でわたりしも落<sup>お</sup>付<sup>け</sup>いた、必<sup>かならず</sup>かはつて下<sup>した</sup>さんすな  
と、立<sup>た</sup>上<sup>あ</sup>つて七<sup>しち</sup>夕<sup>しゆ</sup>ふ、そなへ祭<sup>まつ</sup>りし二<sup>ふた</sup>つの、小<sup>こ</sup>手<sup>た</sup>卷<sup>まき</sup>、持<sup>も</sup>出<sup>で</sup>て前<sup>まへ</sup>に置<sup>お</sup>き、わたり

がてら屋へいた時よお師匠様よ聞て於いた、殿御の心のかゝらぬ様よ  
星様を祈るよ、白い糸赤い糸、小手巻よ針を付け結び合せて祭るとや  
ら、夫れが則ち願ひの糸の乞巧針、お前もよふしつて玄や、白い糸  
の殿御と定め、女子の方の赤い糸、それでわたしも此願をめてら屋で見  
た本の中よ心をかけし女の歌、何とやら、それよ、戀渡る、思ひのちい  
よ結びれて、幾夜願ひの糸の小手巻、其男の返しよ、逢見ての、後も願  
ひの糸筋を、よそへ亂すな君が小手巻、くそふでござんした、いつ迄も  
かゝらぬしるし、赤い糸をお前よ渡し、白い糸を私が持ち、契りもながき  
願ひの糸、夫婦の約束星合よ、かさゝぎならぬ小手巻を千代のなかだち  
取かゝし、肌よ付き合ふ、わりなきゑよし、求が内々以前の女歩み出てこ  
なたの門口隣の烏帽子折様、こなたへ來てござるかな、赦さつしやれ  
と内へ入る、姿よ求の手持ぶ沙汰、お三輪のなんの氣も付ず、あなたが

今のお人かへ、<sup>イ</sup>あれ、神子様宏や、それで薄<sup>うす</sup>衣着てござる<sup>ナ</sup>ナし、お  
前様<sup>マへ</sup>の、お連合<sup>つれあひ</sup>様の、ゑぼしを謎<sup>あづかい</sup>にお出なされたのじやナ、そふで  
ござりませふがな、<sup>イ</sup>そふでござりますと、紛<sup>まぎ</sup>らかす包<sup>つ</sup>む詞<sup>こと</sup>の絹<sup>きぬ</sup>をもる  
月の笑<sup>え</sup>顔をびんとすね、<sup>ア</sup>ナ求<sup>もと</sup>様、<sup>ア</sup>女中はおはしたか、何人でござり  
ます、<sup>ア</sup>是、此酒屋の娘御、<sup>共</sup>、<sup>ア</sup>隣<sup>となり</sup>の娘御と、最前から久しい間、何の用  
がござりましたと問<sup>と</sup>れて求<sup>もと</sup>はこたへもなく、うちつくそふり見て取る  
お三輪<sup>さんりん</sup>、<sup>ア</sup>神子様とやらいふ女中様、人を<sup>ア</sup>おはしたかの何んのと  
ひつこなした物の云やう、求<sup>もと</sup>様、<sup>ア</sup>わたしが用がたあんどござんす  
お前のお世話<sup>せわ</sup>、<sup>ア</sup>成るまいし、かもふて下さんすあ、是、<sup>ア</sup>はしたない  
其様、<sup>ア</sup>いはしやつても、そもじなどの用を聞く、求<sup>もと</sup>様じやないわいのふ、  
<sup>ア</sup>お歸りと手を取れば、お三輪が隔<sup>へだ</sup>て、<sup>ア</sup>わたしはまだ用が有る、い  
なす事は成りませぬ、<sup>ア</sup>爰<sup>こゝ</sup>は置きはせぬ邪魔<sup>じま</sup>せずとそこ通<sup>とほ</sup>しやと、<sup>ア</sup>

を引つ立て立出れば、放さじとお三輪もまた、あなたへ引けばこなたへ引、譯も渇またはれる雁、つばさ振り袖ふり分け姿、戀を諍ふ其折から、いさせき戻る此家の母、求殿、こなさん又は用が有る、どつこへもやる事ならぬうごくまいぞと身がまへゝ何かしらすしら絹の姫は、外へと出ゆくを、とめる求も又すが、娘を押しわけ母親は求馬やらじと引きとめ、つぎ々手と手をしがらみの風もまるとあらそひ、子太郎立出見まはして、これ幸と母親の帯もしつかりくつたる、縄さき桶の呑口も結付け納戸へ逃げて入る、こなたいたがひも戀したひ姿亂るゝ姫百合の手をふりきれバ一時も、亂れて走るを母親が、やらと追はつなぎ縄、りきむ拍子も呑み口抜け酒の瀧津瀬、胸りはいもう、三人門へいくれととし、思ひを跡や先き道を、したふて

○道行戀のかだまき

岩戸隠れし神様は、誰とねくしてとこ闇の夜るくことと通ひては、又  
歸るさの道もせ氣もせ夫れも何故戀故も、やつるく所躰恥しと、儼隱す  
薄衣も、包どかほり橘姫、思ひぬ人を思ひ詫心のたけをくどけ共、つれな  
き松の下紅葉こがれてたへん玉の緒も服故ならべ捨草も、暫しにいこ  
ふ芝村の賤の男が、置き手のひで、忍びくの出逢妻晩もとざらべ、  
のんやほんよさ、せとの柿の木、枝こへて連理をちぎる言の葉は、それ  
も戀中爰はまた箸中村よ一森の長者が跡と名もひく釜が口をも出  
はなれて、あゆむく、くらき、くれ竹の、しげれる中を分け行ば、葉ごとの露  
が、ほろくどほろく打なるきじの聲、思ひくらべていと猶、心ほその  
よ立つくすよくや、かじしよおどさるくわれが姿も又おちて、はつと立  
行羽風につれて、ちりくちるや、柳本流るく水もすそぬれて、物思へと  
や帯どけの、里羨し自、ついよ一度の情さへあいて、身をしる、涙雨、ふる

の社の御燈のかげか、松の木の間もちらくと見へつ隠れつ、歸るさ  
 の跡を求馬がしたい來て、互はたと行合の星の光りも顔と顔、戀人  
 か何故も、爰迄跡を追鳥は、もしやねぐらの契りをも、かなへてやろとの  
 お心かと、胸まはいへど詞もいをもはゆふりの袖几帳成る程節成る心  
 ざし仇と思はじ去りあがら、左程こがるゝ戀路もて晝をば何と、うば玉  
 の夜斗りなる通ひ路は、いとふしんあり名所をきいたる上はこなたな、  
 二世の堅めは願ふ事、あかさせ給へどひたすらも、どはれてげも耻し  
 のもりて、あまれる、浮身の上、語るもつらきかつらぎの峯の白雲有ぞ共、  
 さだかならざる賤の女と思ふてふかい疑ひの、雲をはらして自が、思ひ  
 もはらして給はらばどんな仰も背くまい、譬草葉の露霜と消ても、何の  
 厭やせぬ、是程思ふも胸欲あ、どけぬか前のお心はあんまり結ぶの神様  
 を祈過した咎かや、つれなの君やと恨わび思ひ亂るゝ、薄かげ夫れとお

三輪の走り寄、中を隔てゝ立柳、立退、袂引きとゞめ、開へませぬ求馬様。  
氣の多い、悪性なそもや二人が馴初め、始て三輪の過ぎし夜も、葉越の  
月の俤、お公家様やら、侍様やら、しれぬなりふりすつきりと、水際の立、  
よい男、外の女子の禁制と、しめてかためし肌、と肌、主有る人をば太膽な  
断なしと惚るといどんお本もありやせまい、女庭訓しつけがた、よふ  
見やしやんせ、たしなめなされ女中様、そもじとてたらちねのゆる  
せし中でもないから、戀のしがちよ我殿御、わたししが、いわたしがと俱  
ますがりつ手を取て、園も色よく咲く草時は、男おんなもあざらへい  
い、云れふ物か夕顔の、梅の武士櫻は公家よ、山吹は傾城杜若は女房よ、色  
の似たりや、あやめめかけ、牡丹は、奥方よ、桐の御しゆでん姫ゆり、娘  
盛と撫子のナルグエなるとならずとあらさかや、此手柏の二人の女、晚ば、晚  
む萩と萩中よ、もするゝ男へし、放ちはやら、じとすがり付、こなたが引け

は、あなたがとゞめ、戀の柵<sup>しがらみ</sup>蔭<sup>かげ</sup>かつら、付きまとはれて、くるくく、廻るや三つの小車の花よりしらむ横雲の、たなびき渡り有りくくと、三笠の山も程近く、鳴鐘<sup>なるかね</sup>の音も驚く姫、歸る所の何國<sup>いづくに</sup>ぞと求馬が氣轉<sup>きてん</sup>振袖の、はしよぬふてふ取かいす、るんのおだまきいとしさの、あまりて三輪も怪氣<sup>き</sup>の針男<sup>はりお</sup>の裾<sup>すそ</sup>も付る共、しらす印<sup>しるし</sup>の糸筋をえたひしたふて、榮る花も時し有ればすがり嵐の有ぞとい、いざ白雲の御座<sup>みくら</sup>新<sup>あらた</sup>造<sup>つく</sup>る玉殿<sup>ぎよくでん</sup>の、彼唐國<sup>かのたうこく</sup>の阿房殿<sup>あほうでん</sup>爰<sup>こゝ</sup>も寫<sup>うつ</sup>して三笠山、月も入鹿が威光<sup>いこう</sup>の覆<sup>おほ</sup>いれますぞ是非<sup>せひ</sup>なけれ、腋門<sup>えきもん</sup>の方々宮越玄番荒卷彌藤次、は前よき儘高ふ吹、帆かけ、烏帽子も十分、のけぞり返り入來<sup>いりき</sup>り、仕<sup>し</sup>了<sup>りやう</sup>共朝清<sup>あさきよめ</sup>な、イヤ何玄番殿、此度<sup>このたび</sup>新<sup>あらた</sup>築<sup>きつ</sup>かれたる此山御殿、朝日よかやく所、吉野<sup>よしの</sup>龍田<sup>りゅうた</sup>の花紅葉、一度も見る共及びますすまい、ナニサ<sup>ナニサ</sup>イヤモ言語<sup>ごんご</sup>も述<sup>のべ</sup>がたき御物好<sup>ものずきめ</sup>、瑪瑙<sup>めのう</sup>の梁珊瑚<sup>りやうさんご</sup>の柱水晶<sup>はしらすいしやう</sup>の御簾<sup>みすだり</sup>璃瑠<sup>りる</sup>の障子<sup>しょうじ</sup>、コレ見られよ、飛石の琥珀砂<sup>こはくさい</sup>の金銀、又釣殿<sup>つりどの</sup>も登り見お



るせば、春日の杉も前裁の草びら、若草、山葛籠山のまき石同前猿澤の池は、お庭の井戸も見へますと、咄の尾も付く仕丁共、結構な普請でござります、そふして何やらふつくと、能句ひが致します、其筈、椽板櫃に至る迄皆伽羅と沉香やおが屑とい違ふた物、玄やのふ又次、サイ、又お學問所の唐を寫して唐木、玄やげおの、其唐木とは何ぞ、先花輪、紫檀、黒檀、たがやさん、うらやさん、當封本封、や手の筋、や、男女相性、や墨色の考、失物待ち人、書判の善惡、そりや山に殿でいなふて山伏じやぞや、サア王様も此山でねやしやるよよつて山伏じや、人を嘲哂するかな、長老とは坊主の事か、女子の事、玄や、そりや女良、玄や、如露とは花も水かける物じや、どふいやこふ云と、なんぼ貴様がくすなの辨でもおれもや叶ぬ、ふるなの辨、玄や、くすなとい魚、玄やはやい、くすなじや、ふるなじや、くすなじや、ふるなじや、く。

く、く、く騒さわしいそりや何事清め仕廻まわハ早く下さがれ、皆行け、く、と  
 廻まわ立てやり調お聞有れ彌藤次殿我君此殿へは移りと見へ、物の音近きく  
 聞へや、いか様左様と威儀ゐぎつくろひ嚴重げんぢゆうよこそ、扣ひかへ居る、花よくらし月  
 も明かし、酒地しゅぢの遊びも酔よめつかれ、は殿く、の通かよひ路も、數多あまたの宮女くわんぢやうが道  
 樂がくも君の機嫌きげんを鳥甲かよどしら調ぶる笛や簫しょう筆しつ筆しつ太鼓たいこの音も、鶉けいぞく徳とくも己おのが不徳を  
 押おし登のぼる雲間うんけんの深緑ふか蜀錦しよくきんの褥しとねの上、むんづと座せし有様ありさま、實類げんたぐひなき榮花  
 の殿、玄番彌藤次頭をさげ、先達さきだちて卿上雲客達々君の壽ことよきを祝しすされし  
 數の嶋臺たい、女中方、獻覽けんらんも備そなへられよ、アッ答て持出る思ひく、の飾物かざり何  
 がな君が壽を祝いわふ、鶴龜つるかめ松竹の、影かげに千尋ちひろの深緑ふかみどり、松と鶴龜合せて見れば、  
 一万二千の齡よわいを君も、讓壽ゆづりことよく、蓬來山ほうらい、扱又次の島臺しまだい、周しうの帝みかどの妾假おんなのかりの情  
 の弟草實げにてう寵愛ちやうあいの色菊や、葉毎はごとを染めし其筆の、命毛いのちげ長き八百歳老せぬや  
 く、藥の名をも菊の酒、くめ共盡つきぬ泉いづみの壺つば、天上人の方々御祝儀、也と

相述る、一入興けき入鹿が悦よろこび、百司百官くわん々、下万民ばんせいに至る迄我在位長か  
れと願ふ事、めいゝが身の冥加なれば、猶万歳ばんざいを唱となへど高慢かうまん我慢まんの詔しり  
はつと兩人階下かいひれ伏我おのやゝ及およばず、民百姓も野やゝ手を打て舞まひ  
樂たのしむ、誠まことは戸ざゝぬ御代とや、今此時いまいとめつたゝ追蹤つしやうしやう狸々りりの、人  
形かたち見とれ官女達くわん、こゝ此狸こゝが手て持た酌しやく盃はいも取はづし壺つばゝ誠まことの  
造酒みきをたゝへて、是で御酒宴しゆゑん始めふか、いか様夫やう能御慰おんごゐく早ふと取  
ゝ手てまづ遮さへる盃はいの廻まわれやゝ、万代も盡つぎし盡つぎせぬ寛樂くわんらくの興けうを催もよほす、其  
所ところへ物ものも頼たのませうとどつてう聲こゑ撥は鬢びんあたまの大男おほのお、御殿間ごてんま近くぼつ  
かゝゝゝ着きたる木綿もめんの長上下ながじやうげのりしやきばつて立たはたかり、入  
鹿殿しかのの爰こゝじやな、内うちはならわいして下んせと、木で鼻はなくゝるむくつけ詞こと  
宮越荒卷目みやこし角立かくだて何奴なにやなれ、君きみの御前ごぜん共とも彈はらぬ馬鹿ばか者ものめ、すさりお  
らふときめ付つる、おりや、難波なにわの浦うらのふか七ななといふ綱引つなひでこんすが、い

つやらからこちの方へ、宿がへしてごんしたお公家殿鎌たりの大身から、雇やとひれてきた使でござんすと、いふを遙はるかく見おろす入鹿しか。心得ぬ其鎌足めい首陽山の昔を學び跡を隠せしと聞しは、扱しゆひ難波の浦は有けるよな、普天ふてんの下卒土の濱、王地はあらざる所なければ、今日迄飢も臨す堅固はありしに我惠あらすや、夫れを思はゞとくも参り恩を謝すべきの所、使を立しと緩怠くわんだい也ま、夫れおれが知つた事かいの、かふ見た所が、よつ程短氣者ぞやわいの併喧嘩しかしげんくわはこなんの様よ、こつきで行のが、徳宏や、鎌殿も一旦に云かりて、てつばつて見よふと思はれたそうなが叶ぬやら、どふぞおれよいて挨拶してくれて、夫れはくきつよいのりの、大概な事ならもふ了簡りょうけんしてやらんせ、懇な中ひ得て心安立で、間違が有る物ぞやてのふ、中直りの印宏やてしきす一升おこされたど刀のさげ緒ふぶらくと、結びし徳利急度目を付け、いまだ日本へ渡らぬ

兵器唐土より有と聞く飛道具の類成るか、何れもせよ怪しき物を所持せしむよ、旁油斷致すなど眉を蹙て、身構へたり、とつけもない、徳利と見やんせ酒玄や、コレそこお手代衆、早ふ、夫れえんせさんせ、善惡えれざる鎌足を差上し酒ならバ、毒藥仕込あらんもえれず奉る事罷ならぬ、まゐすい、どれおれが毒味してやろ茶碗ないかへ、そんなら赦さんせ直やり玄やと、云つゝ徳利の口から口、よい酒じやゝなわ、是を呑ぬといふ事が有かしらぬとふつて見て、ヤなむ三、皆呑でえもた、ひよんな事してのけた、ひよつと鎌殿逢んしよと儘おれがんだと云すよ、よふ屈いたと禮いふて下んせやと、家武者な様でも正直者まゑめは成て氣の毒顔、まだ何やら言傳つて來たが落しなせぬかと懷さがし、有、是は見やんせと、一通を渡せば彌藤次押し抜き、我不肖たるよよつて、暫く心を惑はすといへ共、今一天四海御手の内は落

入事正しく天の譲り給ふ万乗の御位、入鹿公も背く天も背くも同じ  
 と、先非を悔て爰も降参を乞者也、今も臣下も屬するの印し、君の齡を東  
 方朔もたとへ此桃花酒を以て御壽を祝し奉る、内大臣藤原の鎌足、謹で  
 やすと讀上る、なまくら者の鎌足め、臣下とならんなどい、い  
 ら、しき偽りやつ、何ぞや鎌殿をうそつきとい、何ぞ慥な證據がごん  
 すか、小ざかしき證據呼り、彼が心腹いふて聞そふ、聞ませうか、先  
 づ此入鹿を東方朔も譬たるが野心の證跡、そりや又なごよ、昔漢の  
 武帝が代も、東方朔といへるやつ、三千年も一度實を作る桃を三度盗で  
 喰ひし故、九千年の齡をたもつ、桃も百の縁をかたどり、百數百官を手も  
 入し入鹿を、盗人也といわぬ計りの底工、よくつくいやつと居尺高、くそ  
 りや無理じやく、やうづ虫め、何を知つてこしやくやつ、何もしら  
 んけど、かゝりも成て來たおれぞやよよつて一番いふのぞや、鎌足が

かゝりならば、是をもちかり又心見よと傍なる島臺退取て盾間へはつ  
しと打付る臺のみぢんは飛ちれど、びく共働かず、よいかげんまだい  
けさしやれ其厄拂ひの代物、東方さくどやらは譬たといふて業わかす  
のか、年よあやからんせどこそ書ておこさしやつたれ、盗人と書いちや  
ないぞや、夫れよそちから色くな講釋を付て盗人せんさく、知た同士に  
すゝしいとやらで、盗人の覺へが有かして今の投打てこなんの正直な  
人さんじやと世間の噂見ると聞とで大きな違ひ、そんな盗人と録ど  
んを怨みおれがさすまいわいの、仁體も似合ぬ事さんずの、よもや  
そふ宏や有まいがの、但覺へがこんすか、イヤそふかいのと、文盲だらけも  
理屈の理屈どふでございるとやり込れ、邪智の入鹿もよがわらひ、口  
がしこく云まげしな、ういやつ出かした、其褒美の、鎌足が實否を正す  
迄己の人質最早籠中の鳥同然歸る事あらぬと思へ、ヤ、玄番彌藤次

いざ萩殿よて天盃てんがいを廻らさん、來れやつと引き連れて帳臺ちやうだい深く入ふけり詞、コレ詞くおれを質しち又取らしやると、着物や道具だうぐと違ふて、代物しろものが飯喰めしふぞや、併しかしあの業腹ごうで、大抵ていで喰くひかるまい、すき腹又今の酒でよつ程醉よそが來たわい、どこでなと一と寢入りやつてこまそと伸上りのしあが、腰こしがふもい筈よ此大小、らつちもない物さとしておこして、あた面倒めんどうなと椽板ひちぎくろへ、ぐたりと鳴なるの相圖あいづかと、突出とつす鎗やのしの薄搦すくさかのすころり、臂枕ひぢまくら不敵ふてくなりける、男なり、御所々外ごそこへ、咲出ぬ若きこだちが入かひり、男見よくるあいそ、い、お茶よお菓子よたべこ盆ぼん、銚子しやうしかひらけ持て出い、そな人の何なんに用で、お召寄有し、いしらねど、嘸待さぞ久しう氣もつきやう、九献くけん一つとさし置か、體寢からだ返り腹這は、頬杖ほづつつく、打眺うちながめ、貴様達きさまの誰れじや、我われ、い上様うへさまの、身近みぢかく召めさるゝ女共、何じや、短い女子みじかじや、く成程なほどれも是もようよへ込んだ者じや、わいらの爰めしこな食焚めしこじやな、けふな前垂まへだれ



してゐるな、つがもない。さればみ事、わしらを問やるそなたの名、  
ふか、何ふかといふ、商賣の夜網、又出りや、沖でも磯でも行當りよ、よふ寐  
る故、よふか七といふ、漁師、料紙といふ、なんぞ書いてたものか、夫  
れならば、必繪や歌、いや、宏やぞや、今難波津で持はやすか、ぶき芝居の  
其中でも、よう聞及んだ文七や、八藏の紋ならば、書てほしいと、えどもな  
き櫻の局、摺り寄つて、そうして下、皆そなたの様な男かや、能い男も  
たんと有るであろ、地下の女子、羨しい、芝居に見次第、能男、持次第、は  
ん、又此御所女、何が成る、見るも、冠装束窮屈で急な逢瀬の其  
場でも、衣紋の紐、上帶、解かほどこか、大抵では、下た紐迄、手がど  
かずつゐ、其内、花、風、月、村雲、さゝりが出來て、はい、なひ別れをす  
るわいのといふ、さへ顔、紅葉の局、中將や少將、あたりて戀すれば、あ  
かひかけが、邪魔、成尻目つかひ、出來ぬ、其上、愀氣いさかいも、こ

つちからの檜扇ひるあふぎで擲なけばあつちの笏しやくでとめつゝぱりかへつていきつた計り、いらふても見ぬさかほこの車情しやうじやうも受けて見ず、玄くろんきくでくらそより、いつその事ゝ玉の緒もたへなばたへたがましである、もしもやさそふ水じもあらば、いまたいいのどふか七ゝひしと二人いだし付き憐びつくりはいもう業ごうゝやしし、けたいなげんさいめら、あつちへきりくうせあがれと、けんもほろゝゝ云ちらされし、さつてもすげない戀しらず、玉の盃底ぬけ男、不骨こつ者よと不興ふけうして、ほゐなく奥へ入にけり、あたり見廻し長柄ながえの酒、庭の千草ゝさらくゝと濯そくぎかくれば、忽たちまちゝ葉立も變へんぢて枯かれしぼむ、六むゝ最前の鎗やといひ、又またひや此毒酒このどくしゆ、レレきつい用心と、猶打見やる庭先へ月と矢つがひばらくゝ追取かこませ宮越玄番みやこし、いかゝしても心得ぬつら魂たましひ、尋問たづねべき子細の有れば、引つ立てこよとの綸言りんげん成ぞ早くまいれ、呼よびよこんせいでも行の玄くろや、假初かりはつゝもびくゝと、ちよ

つとでもさいるがいな、腰骨踏はねふみかりせんきの虫と生別れさすぞ、ヤコレ家來共さん、わり様達も其鳥おとし放はなすがさいご、とつゝ、かまへて首引ひきぬき拔、かたはしからぬたよするぞ、とりやおれから先へ行やんしよと、事共思おもぬ太膽者、胸の強弓矢襖やうすまを引明ひらてこそ入よける、されば戀する身ぞつらや、出るも入るも、忍ぶ草露踏分て橘姫、すこゝ歸る對たいの屋の障子しやうじよべらり打つ礫つばてお歸りのえらせぞと、めいゝ庭よつとひあり、えをり開いて入參いんぜんらせ、おいとしやゝ御所のお庭の内さへも、つゐるよお拾ひろひなされぬ戀なればこそかちはだし、嚙朝露ささでお裾すそもぬれん小打着めきよ、召せかへんと立寄たよりて、お振袖ふりそでよ付て有、此紅これあかの糸不審ふしんと、たぐりたぐればくるゝと、糸よ寄る身いさゝがよの雲井の庭へ引かれくる主い床しの、ヤ求馬様か、はつと驚く姫方も、さゝぎさゝめく局達、扱も見事引寄た、七年物の戀人様が、ようこそお入遊いりあそばした、くこちへと手を取とば、

手前てまへのついで道通り、此おだ巻を拾ひ上るやいな、めつたよ引れ参つた者  
何なにも存せぬお赦しと、出る向ふを立ふさぎ、エ手の悪いなされ様、わた  
しらよ御遠慮ごえんりょは、内うちのお咄はなしならどりやお次へと立て行、姫ひめのどかう  
の詞ことばなく、差うつゝひいて思案しあんの求馬しんば、此は所の姫と有ば聞きこえ及ばず、入  
鹿いんかの妹橘殿と、云れてはつと胸せまり入鹿が妹としり給たまへよもお情  
け有るまいと、隠かくし包かいかいもなふは存有りしお前こそ、藤原の淡海たんかい様  
と、いふ口ちやくと袂たもとは覆おほひ、女をあれど敵方てきかたよ、我名われなをえれば一大事、不便びん  
なれ共助け難し、成程お道理は尤、生て居る程思ひの種たねお手よかゝるが  
せめての本望ほんぼう、かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻りんゑが残る、サア殺ころし  
て下さんせと、刃やいばを待たる覺悟かくごの合掌がっしょう、心庭見へた、誠夫婦と成たくば、  
一つの功こうを立たてられよ、一つの功を立よといへ、入鹿が盗み取たるこそ、  
三種さんしゅの神器じんぎの其一そのいちの十握とつかのは劔けん、奪返して渡されなば望の通二世の契けい

約得<sup>やくとく</sup>心なけれバ叶<sup>かな</sup>ぬ縁<sup>ゆかり</sup>、是非<sup>是非</sup>もなや、悪人<sup>あくじん</sup>もせよ兄上<sup>あにがみ</sup>の、目を掠<sup>かすめ</sup>る  
い恩<sup>おん</sup>しらず、どあつてお望<sup>のぞ</sup>叶<sup>かな</sup>へねバ夫婦<sup>ふうふ</sup>と思ふ義理<sup>ぎり</sup>立ず、恩<sup>おん</sup>も戀<sup>こひ</sup>のか  
へられず、戀<sup>こひ</sup>も恩<sup>おん</sup>に捨<sup>す</sup>られぬ、二つの道<sup>みち</sup>よからまれし、此身<sup>このみ</sup>のいか成報<sup>なりやう</sup>  
ひぞと忍<sup>しの</sup>び歎<sup>なげ</sup>ておいせしが、そふじや、親<sup>おや</sup>もせよ兄<sup>あに</sup>もせよ、我戀<sup>われこひ</sup>人  
の爲<sup>ため</sup>と云ひ第一<sup>だいいち</sup>の天子<sup>てんし</sup>の爲<sup>ため</sup>命<sup>いのち</sup>を掛<sup>か</sup>て仕課<sup>しけ</sup>せませふ、出<sup>で</sup>かされたり、  
又<sup>また</sup>えらせの相圖<sup>さうず</sup>の何<sup>なん</sup>と今宵<sup>こんよひ</sup>は遊<sup>あそ</sup>の舞<sup>まひ</sup>も事寄<sup>ことよ</sup>寶劍<sup>ほうけん</sup>奪<sup>うば</sup>ひお渡<sup>わた</sup>しやさん、笛<sup>ふえ</sup>  
や鼓<sup>つづみ</sup>の音<sup>おと</sup>をしるべ、奥<sup>おく</sup>の亭<sup>てい</sup>迄<sup>まで</sup>お忍<sup>しの</sup>び有<sup>あ</sup>れ、然<sup>しか</sup>らバ我<sup>われ</sup>の此所<sup>このところ</sup>も暮<sup>く</sup>るをえバ  
し待合<sup>まちあ</sup>さん必<sup>かならず</sup>首尾<sup>しゅび</sup>よふ、合點<sup>がてん</sup>でござんす、若<sup>も</sup>し見付<sup>みづ</sup>られ殺<sup>ころ</sup>されたら、是<sup>こゝ</sup>が  
此世<sup>このよ</sup>のお顔<sup>かほ</sup>の見納<sup>けんさ</sup>め、たとへ死<sup>し</sup>ても夫婦<sup>ふうふ</sup>じやど、おつじやつて下<sup>くだ</sup>さりま  
せ、運命<sup>うんめい</sup>拙<sup>つた</sup>く事顯<sup>ことあらわ</sup>なれ、其場<sup>そのば</sup>で空<sup>そら</sup>しく成<sup>な</sup>る逆<sup>さか</sup>も、ぢんみらいさいかいら  
ぬ夫婦<sup>ふうふ</sup>、忝<sup>はづか</sup>し嬉<sup>うれ</sup>しやど、抱<sup>かか</sup>きえめたるおし鳥<sup>とり</sup>の、つがひし詞縁<sup>しご縁</sup>の綱<sup>づな</sup>引<sup>ひ</sup>わ  
か、れてぞ忍<sup>しの</sup>べるゝ、迷<sup>まよ</sup>ひはぐれし、かれ鶉<sup>うづら</sup>草<sup>くさ</sup>の靡<sup>なび</sup>をしるべよて、いさせき

お三輪の走り入こ、此おだ巻の糸めが、切くさつた計はづかりで道からとんと見失うしなふた、去りながら爰外あへ家いへのなし、大方此内へはいつたゝ違ひのない、誰たれぞ来こよかし問とたやと見やる先、おはしたかが被かまふかゝえやなく、と豆腐箱提歩たふふぼていふ来る、うとと呼かくれば、呑込早合點のりこはやあて、お清所尋きよところるのなら、そこをこちらへかう廻つて、そつちやの方をあちらへ取、あちらの方をそちらへ取、右の方へはいつて、左の方を眞直まっすぐ又、脇目わきめもふらずめつたやたらゝすつと行きや、私が尋るの、お清殿とやらでござんせぬ、年の頃廿三四で、色白よくつきりとした、よい男の参りませなんだかへ、来たげなく、夫のお姫様の戀男じやげなの、三輪の里から跡退て來た所を、何がお局達ばよくが引捕ひらへ、有無うむを云せず御寢所しんじよへ、ぐつと押込上おしこみから蒲團ふとんをかぶせかけ、宵よの中内證ちゆうないしやうの祝言しうげんが有筈はずと、暮ぬ内くぬうちから騒さわでじや、けなりとちと迄、内太股うちまたがぶきくと卯月うづきあ

たりのはぢけ豆まめ、とうふの雇用いそぐが急いそぐよど、玄やべり廻まわつて出て行いく  
ひよんな事が出来てきた、ほんよく油斷ゆだんも透すも成なるこつちやない、大そ  
れた人の男を盗くさつて、何じやいしこらしい内祝言うちげんじや、餘りな踏付ふみ  
けやう、よいく、其かゝりどこゝ居よふと尋出し、求馬様きんばと手を引いて、  
是見よがしよいんで退のけるが腹いせじやと、行んどせしがよくはしたな  
い者じやと、ひよつと愛あいそを盡つくされたら、と云て此儘も、見捨て是がどふ  
いなれふ、どふせうぞと心も空登うつはる階長廊下きさばしちやうか、行こふ女中見咎どがめて一人  
が留れバ二人立、三人四人いつの間も、友呼千鳥ともよちむらくと爰かしこか  
ら寄たかり、ついし見馴ぬ女子じやが、そなたの誰じや、何者じや、い  
私の内方の、夫れよ、さつきのお清殿の寺友達、奉公も出られてから、久  
しう逢ぬなつかしさ、ちよつと見舞まゐりましたら、是のやう來た、  
上がれ茶ちやく香、そふして、たべこ香、お上よ、あためつそふな、御祝言ごしげんが

有と聞けば聞程涙がこぼれて、あたためでたい事じやげな、ほんゝ内方の様な能衆の御祝言の、どの様お物じや己おのれやれ、拜まがんでなりと腹いよと、うかくゝ爰迄参りました、どうぞお前方のお心で、智様をちよつと、拜まがまして貰ふたら、忝ふござりまするといふ顔も、恨色成る紫むらさきの、ゆかりの女と早悟さどり、なぶつてやろと目引き袖引き、調くそちの仕合な、かういふ折に参り合、お座敷拜むといふ事、女の身で、手柄てがら者した、がこちらが呑込で、お座敷へい出す物の、何ぞさしすべ成るまい、何と皆様、いつその事此者、酌取しやくらそでいあるまいか、よかろう、ア、ヤ、其酌とやら、何の又そち達が知つてよい物か、今爰で教おしてやろ、幸ひ爰ゝ御酒宴の銚子てうし島臺、有り合の鐺君様、い紅葉もみぢの局つばね、梅の局、嫁君役、残り、いかい添待女ぞへ郎と、櫻の局が指圖さしづして、いやがるお三輪、長柄ながえの銚子持ちやうし持たせ持調ち添ア、盃がさね三つ、重嫁君へ二度ついで、左りへ二足、立コレのじや、何じやいのう、



かゝせずとよう覺や、三度目ついで聲君へ、酒がこぼれるわいのふ、  
不調法な、是からが亂酒うたい物、是も嗜なければならぬ、四海浪なと  
諷やいの、さ、どいいやか、そんなら智様拜ます事は、ならぬ、夫れがい  
やなら早ふ諷やと、せつき立てられ是が、何と千秋万歳の千箱の玉の  
血の涙、聲語らせてないじやくり、めでたう哀も出來ました色直しも  
はんなりと、梅が枝でも落組でも、聞たい所望じやく、さ、あられも  
ない事おつしやりませ、山家育の數驚はう法花經も片言計り、上り下り  
の仇口や、馬士の歌なら聞ても居様もふ何事もお赦しなされ、早ふ其智  
様も、智様が見たくば早ふ諷や、馬子の歌なら面白からふ、次手も振も  
立て仕や、いやならこつちも成ませぬ、歸りやくと引出され、何の  
いやとやませふ、そんなら諷や、いゝ諷ひまするとなくくも涙も、しほ  
る振袖は、鞭よ手綱よ立上り、竹も雀は品よくとまる、とめてとまらぬ

色の道かいな<sup>調</sup>、爰なほてつ腹めと此様も、すますると打ふせば、皆  
く一度も手を打つて、扱もきつい嗜事<sup>たしきみ</sup>、よい慰で我<sup>おれ</sup>が、ほてつ腹迄よ  
れました馬士殿太儀と云捨て、行を驚き、さ、わたしも俱もと取すがれ  
ど、ふり放されて、いがはとこけ、寐ながら裾もえがみ付き引ずられて聲  
を上<sup>調</sup>のふ皆様お情ない、どふぞ私も一所も連れてござつて下さりま  
せ、お慈悲くくと手を合せ拜廻るを擲<sup>た</sup>のけ、えつて、逆も及ばぬ戀争<sup>ちそ</sup>ひ、お  
姫様と張合ふとは叶ひぬ事じや置いてたも大膽女<sup>だいたん</sup>のえつけをせうと、  
耳を引やら脇明け、手を指入てこそぐるやらつめりつ、たゝいつ突倒<sup>つきたふ</sup>  
し、く是で姫様の悵氣<sup>りんき</sup>の名代納まつた彌<sup>い</sup>めでたいは祝言<sup>しうげん</sup>三國一じや  
聲を取濟したえやんく、えやんと濟だど打笑ひ局へ入る跡は、前後  
正躰<sup>ただ</sup>泣倒れ暫し、消入り居たりしが、胴欲<sup>どうよく</sup>じやわいのく、男の取られ  
其上も、まだ此様も耻かしされ、何、どこらへて居られふぞ思へば、  
難<sup>た</sup>

面男憎い、此家の女めゝ見かへられたが口惜いと、袖も、袂も喰ひさき  
く、亂心の亂れ髪、口ゝ喰しめ身を震ひせ、妬えや腹立や儕おめく  
寐さふかど、姿心もあらく、えくかけ行向ふゝ以前の使者、そなたも  
邪魔仕ゝ出たのえやな、もふこふ成たら誰出ても、構はぬく、そこ退き  
やど、袖すり抜てかけ入袂えつかど踏へ、待て女、待たぬ爰放しや、放  
しやく、と身をもがく髻、搦て氷の刃、脇腹ぐつと差通せぱうんどのつ  
けゝ倒れ伏、刀拔捨邊を窺ひ目を配る、奥の豊ゝ音樂の調子も、秋の哀な  
る、お三輪はむつくと起返り、扱は姫が云付じやな、むえたらしい、恨み  
はここから有物を、却てそちから殺さする、心の鬼か蛇かいやい、殺さ  
ば殺せ一念の、生かいり死かいり、付まゝとふて此恨、晴さいでおこふか、思  
ひ知やど奥の方、睨たる眼、尻も、さけふこはねもうはがれて、さもいま  
いしき其、有様、えろりと見やり、女悦べ、夫でこそ天晴高家の北の方、命捨

たる故より、汝が思ふ御方の手柄と成り、入鹿を亡す術の一つ、出か  
 したなど、何といやしい此身を北の方といへ、うちがあたりひやせし方は、  
 忝く、中臣の長男淡海公、又私が死るのが、いとしいお方の手柄よ  
 成て、入鹿を亡す術といへ、其譯語らんよつく聞け、彼が父たる蘇我  
 の蝦夷齡傾く頃迄も一子なきを憂へ、時の博士よ占はせ、白き牝鹿の生  
 血を取母よ與へし其驗、すこやか成男子出生、鹿の生血胎内よ入を以て  
 入鹿と号、去によつて、きやつが心をどらかすよ、爪黒の鹿の血汐と、疑  
 着の相有女の生血是を混じて此笛よ濯ぎかけて調る時、實秋鹿の妻  
 乞とく、自然と鹿の性質顯れ、色音をかんじて正体なし、其虚を計て寶  
 劍を過なく奪返さん、鎌足公の計略、物かげ方窺ひ見るよ、疑着の相有  
 汝なれば不便ながら手よかけしと、件の笛の六穴よたばしる血汐、受け  
 濯ぐ、今こそ揃ふ此幻術、此笛こそ入鹿を挫火串ならん、有難や

と押戴おしいたき、いさみ立たる其骨柄こつがらげは藤原の内うちにて金輪五郎今國と鍛きたは鍛し忠臣也調、なふ冥加なや、勿躰なや、いか成る縁で賤しづの女めが、そふした  
お方と暫しでも、枕まくらかゝした身の果報、あなたのお爲ためは成事なら、死でも  
嬉うれしい忝はづい、どいふ者の今一度、どふぞお顔が拜なぐさたい、譬たとへ此世の縁薄く  
と、未來そふに添そふて給たまはれと這廻はひる手は、おだ巻の、此主様は逢あれぬか、どふ  
ぞ尋たずて求馬様調もふ目が見へぬ、なつかしい戀こひし、といひ死しふ、思おもひの  
玉の糸切し、おだ巻塚と今の世迄ありひき鳴響なりひびたる横笛堂の、因縁いんねんかくと哀也、今  
國不ふ便べんいや増ましふせめて葬はうむり得えせんと、脊せきは、お三輪が亡骸なきがらを追お馳は來  
る荒あらし、共とも、曲者くせやらぬと取巻たり、見向もやらす、悠ゆうとど几帳きちやうの綾絹引  
ちぎり、死骸がいと俱ともは我五體ごたい、くるくゝ、まつかと引結び死調人を取置我等こ  
そ先出來合の坊主役、十念授てこそそふも、つどくゝは邪魔らしや、  
一度よかためて授るが、うぬらが爲ためは百年めいざこいやつと力士立、

廣言くわうげんなる骨佛こつほとけと、前後ぜんご双々そうそう十文字じゅうもんじ、鎗やう先揃さきぞろへて突出とつしゅつす、ひらり早業はやわざすつかり素鎗すやうはぐれる片鎌踏落かたかまたおちせ、後ごをつく棒ぼうまつかと取と、えりへをねらふは不敵ふてきやつ、左様さようも甘ふかんいさす、またも引たくつて打折うちせたり、手取てとよせよとどつと寄よ、當あたるを幸砂石しやうさせきの如くほり飛とされ、逃行にうかう奴原やつはら餘あまさじと奥深おくふかくこそ、行先かうさきの、殿とのくは銀燭ぎんしやくをかしぐる戸張綾錦紅葉とはりうめにしきの殿とのの、簾卷れんくわん上妹姫うへいもへの今様けふさまを、遊覽ゆうらんせんと入鹿いりか大臣だいじん、女原をんなはら、そち達たち姫ひめが殿とのへ參まゐ、用意よういよく、始めよと云來いれよ、早ふくといらたての、使重たかひさのる樓うゑも、橘たちばな姫ひめの今宵けふやこそ、よき折鳥帽子せりとりぼうし水干みづかんの衣紋えもんも、はでの舞まいの袖檜垣ひがきの影かげも、淡海公たんかいこう、弓矢ゆみやつがふて忍しのび寄よ、目充めちうは入鹿いりかが胸先むねさきへ、羽響ひびき高く切きて放はなす、苦もなく擲なで、大音聲おほおんせい、宿直しゆくちくいなきか早參はやまゐれ、承うけたまへると彌藤次やふぢ玄番げんぱん、走はしかゝつて打うかくる心得こころえたりと切結きぎやくふ、姫ひめの寶劔たからけん振袖ふりそでも、押隱おしひそす間まも阿修羅あしゅらの如く、樓目うゑめがけ懸かくる入鹿いりか支隔さへだつる官女くわんにょ共ども、はらりく、と投落なげおちし飛とかゝつてかい擲な

む、遁ぬ所と橘姫寶劔下へ投捨れば、取得る淡海支る兩人、打合く、いと  
み行、見るも、く我が身も、驚れ取れし雛鶴の詮方涙震ひ聲、嘸わ腹が  
立ませふ、其お怒をさせますも、皆自が徒から赦て給われ兄上と、歎き詫  
るを、はつたと蹴やり、鉛刀に等しきなまくら物、とく敷籠置し、  
劔をえば、天皇始鎌足親子もおびき寄、皆殺しとする此計略、誠の劔を  
安くと、きやつら如きと奪れんや、エ、スリヤ、今の劔の偽りとなき、我帶せ  
しこそ十握の劔、扱ひと立寄肩先を、拔手も見せず、丁と切、折から吹出す  
笛の音も、聞入、入鹿の醉るがごとく、勇氣碎けてかつぽと伏べ、ふしぎや  
劔の拳をはなれ、忽化たる龍の形、雲よりねり、雨をさそふて舞下り、松の  
梢をさらく、さつと飛入、溝の水、白浪さはぎど、とゆすりあ  
ふるゝ、すまじき、橘姫の手疵も忘れ、守り詰しが、夫よ、怪しと思ふ心  
より龍共蛇共見ゆれ共、正しき十握の御劔ならずや、譬誠の惡龍成共、何

か恐れん夫の爲、腮あごよかゝり死る共いどのぬく、再びもとの寶劔たからけんと、顯  
ひれ給へど心願し、ひらりと飛込水煙けむり逆立浪なみよ打立られ、遙はるかく流れく  
くる枯枝かれえだよ取付身の浮草うきくさ、たゞよひながら間近く寄ば、金龍頭かしのうをふり返  
し、紅花かうくはの舌したをひらくく、ひらめくそびら鱗うろこをならし、浪間なみまを分われ、續つづ  
てわけくゞれくゞり、沈しづめば沈み命限りど、追廻おひまわせば、又も虚空こくうよ立の  
ぼる、こなたも岸きよかけ上れど叶かなぬ思ひ身をあせり足も空そらなる雲行  
を目め充あふ、こそはえたひ行、次第しだいよふくる夜あらしよ、つれて聞ゆる人馬  
の音、貝かい鐘かね太鼓たいこ亂調らんてうよ、打立く、鯨波くじなみの聲、官軍くわんぐん隨へ鎌足かみそ公、薄紫うすむらさきの狩衣かりぎぬよ  
肌はだの腹はら卷ま着き込こを着し、玄上げんじやう太郎御供ごぐよて優ゆうく然ぜんと入給へば、二人の敵を  
討うとめて立出る淡海公、金輪かみりん五郎詞ごろうしを揃そろへ、我われ君御賢察けんさつの如く、入鹿いんろが有  
様希代の此笛、併ひ十握の御劔の儀ぎひ、氣遣きぢひ致すな最早我手われてよ入たる  
ぞよ、其子細こさいの兼かてゝ、徒黨とどを集るかたらい山、絶頂せつてうよよち登のぼれば、黒雲くろぐみ俄



又覆ひかゝり、ひとつの金龍我袖も落るやいなや十握の御劔と顯はれ  
ます、今方へ彼山を龍岳と號くべしと、仰も高き多武の峯此大臣の靈嶺  
なり、玄上太郎すゝみ出く入鹿、汝是迄朝恩厚く蒙りながら、王位を犯  
す天罰の、只今歸するとしらざるや、見參やつと呼ひつたり、眠り臥たる  
兩眼を、くわつと見ひらきうなり聲、事としや鎌足我も刃向へんなん  
どし、鶏卵をもつて岩石もあたらんとするより危き工目も物見せて  
くれんすと、遙の樓へ飛かりたり、玄上太郎金輪五郎、双方へ引包で切か  
くる、ちつ共疼まぬ勇猛力、弓手もなき捨馬手もかなぐり、追立く追ひ  
廻し、鎌足目かけ飛かゝる、騒す神鏡手もさしげ、入鹿が頭も指向給へば、  
鏡も寫る降魔の相、和光のきらめき眼くらみ、勢ひたへてたぐく透  
を窺ふ勇氣の兩人、腰の番をまつかと組、面倒など兩手も提打付く、  
膝も引敷き動かせず、鎌足後もつくと寄る、神通奇代の焼鎌も、水もたま

らずかき切たる、首は其儘こゝろより上り、火焰をくわつと吐かけ、飛鳥の如くかけ廻る、一念の程ぞ醜しき淡海きつと見口より唱ふる重獸品、忽治る朝敵のしげきが本を打拂ふ、鎌足の徳劔の徳實譽有る藤原氏、花の紐解橘姫誠をてらす神鏡は、神のおかけの尊くも、思へば伊勢とお三輪がぼだい、賤のおだ巻きくり言を、くり返したる言のはを末に傳へし物語り

○第五

逆徒凶賊直に退き、年盡新よ春の空都を江州志賀に移され、今ぞのどけき大内山主上の敵慮安らかみ、猶奥深かき玉だれや、中央の坐より中臣の内大臣鎌足卿、同じく淡海義士の面より、玄上太郎利綱一子三作諸共に、清凉殿より居並へば、鎌足の大内治國の褒祿沙汰ありて、入鹿が妹橘姫親兄よりかへ忠義の貞節、豐代姫と名を改め、淡海が宿の妻と我君の勅諭

なり、また大判事清澄は、暫く敵の臣下とあり、四海を治る智謀の勞詞も述べがたし、向後武官の司とし三作を養子となし、志賀之助清次と名乗べし、其外又太宰の後室金輪五郎をはぎめとし、各々大祿給はりて主上を初め一座の勇み、かゝる所へ金輪五郎殘黨を搦め取り凱歌をとなへ入り來れば、故人とありし清船雛鳥兩人が追福は妹脊の山とかはれ共、かゝらぬ志賀の山櫻供養絶せぬ花の塚、譽れを世々の香は匂ふ折吉川波春の風幣帛もて拂ふ國の寫市中屋敷と所せき月の遠近松の半、二月の夕部あたにかゝ坂東南海穀民は至善平かゝ秋は米夏は麥、鱗迄も浮める形千代の並松洛陽は文作青き若みどり、惠得の姿満願の神は伊勢又春日は八幡三の惠みも鎮常打はづさぬ陣太鼓久しき、御代を祝はける

妹脊山

明和八 辛卯年正月廿八日

妹脊山婦女庭訓終

明治廿四年五月十四日印刷  
明治廿四年五月 日出版

日本橋區通四丁目四番地

編輯兼  
發行者

內 藤 加 我

日本橋區新和泉町一番地

印刷者

瀧川 三代太郎

發 兌

日本橋區通四丁目四番地

金 櫻 堂





處世の道は長せんと欲し書冊の必要を知る人へ是より以下は掲載する廣告を見よ書冊の世を裨益する尤も親切なる好友なり處世の道は長せんと欲し書冊の必要を知る人へ以下掲載する廣告を見よ！

岡本可亭編纂

# 女

# 寶

全壹冊 正價金四拾錢

本書は女子一代之教育技藝音樂脩身等網羅して余す所なく女子處世之要典なり  
輓近文化之風潮は随ひ世は教育を頌揚する者へ尤も女子の教育は注意する所なり  
女子其人の教育如何の其兒子は波及し清淨無垢の幼童をして或は賢たらしめ  
或は愚たらしむ是れ女子教育の忽かせよすべからざる所以なり苟も善良の慈母  
たらん者へ一續の勞をおしむ勿れ

香夢樓主人編

訂正  
増補

通俗男女造化機論

全壹冊 正價三拾五錢

男長するに至て女を娶り女長じて男に嫁し始て夫妻あり相交りて以て子孫を蕃殖し血脉を永遠に傳ふ是れ造化之妙案にして人生之大道なり然るに男女や長ずるに及んで陽氣勃々爲るに大道を忘れ只に淫樂を事とし社會の秩序を亂し自己が一身を誤る者多し豈に慨嘆に堪ざらんや本書に造化生殖の原因より其妙用得失を説き而して少年婦女子が淫事多情より來す處の害を述べ以て身を立道を行ふの理由を詳述せし者なれば熟讀含味し家を興し國を富まし永く子孫の光榮を計れ



淚香小史譯述

指

環

全一冊 正價金二十錢

嚇々として美人の軟手は輝ける者の指環なり美人能く指環を以て艶男を迷はし  
艶男之を以て美婦を誘ふ嗚呼指環の月下氷人なり本書に至ては即ち然らず此可  
愛的なる指環を以て忌むべく怖るべき盜賊の規約を結び世人の耳目を暗ませし  
犯罪の始末を書綴りし者にして原著始て佛京巴里まで發賣せし時喝采を博せし  
事他は比類なく遂は傑作の中は算へられたる小説なり頃日淚香小史之を譯して  
都新聞に掲載し世評高かりしを今度一冊子と爲したる者なれば其面白き事の弊  
堂の贅言を待たず諸君既は知り給はん

安中  
草三 後開榛名梅ヶ香

全一冊 正價金三十五錢

三遊亭圓朝翁の口述に係る著書一度發售せし以來翁の名忽ち世に發揚し爾來活版に付する者實に數十種に至れり然れども中より就て尤も有名なる者此榛名梅ヶ香の右より出るものなし實に圓朝翁が第一の著書なり卷中大意を云へば文化年中上州安中驛に義俠草三郎ある者あり親の爲に賊を爲し一度悔悟したるを再度主難を救はんと欲して大賊をなす其間幾多の變遷或は險を犯して危人を援け或は白刃を踏で不辜を救ふ等義俠の赤心痛むべきあり悲しむべきあり翁が人情の表裏を語り得るの得意なるを有名ある速記者酒井君が艷筆に綴れる者なれば一度此書を繙かば正に寢食を忘るゝの思ひあり請ふ速に妙味を味ひ給へ

凡亭素人譯

# 探偵譚

全壹冊 正價金貳拾錢

本書は佛國有名なる探偵小説家の健筆に成れる者數種を集め譯述を以て名ある  
凡亭素人が艷筆に譯述せし者にして玄妙なる探偵の運用累々として幅港せり抑  
も探偵なる者の人の未だ見ざる所未だ知らざる所を暴露し奸邪の輩をして高枕  
安眠せしめず何れ依て斯の如きを得るや甚だ怪むべしと雖も探偵の探偵の原  
則あり其應用は依て功を奏し惡漢を懲し良民を救ふ嗚呼探偵なるかな探偵なる  
かな探偵の獨り罪人を縛するの術のみとなさず平素己が處世に應用せば又大に  
利する處あり請ふ愛覽を給へ

眞　　ッ　　暗

全壹冊　正價金貳拾錢

眞ッ暗とい何を曰く事犯罪の顛末なり讀終るまで誰人の所爲なるやを示さず讀者をして暗黒の中ニ徘徊せしむ故ニ其名あり眞暗を讀終る前ニ早く既ニ其本末を觀破し得る者の實ニ卓眼ニして暗ニ物を見る鼻の如き眼光ある人ト云ふべし唯ニ解シ難きを主意としたれども深く考案を廻らせば益々解シ難シ實ニ解シ難きニ有らず存外解ニ易きなり存外暗黒ニ有ざるやも斗られず此トンチル小説こそ信ニ探偵小説の妙味を盡したる者あらざらんや讀者ニ試ニ茲ニ暗黒を探れ暗黒の中ニハ隨分面白き事の多き者なり

九亭素人譚

# 美人の獄

全壹冊 正價金貳拾錢

花は風月を霞雲まじふならぬが浮世なれ春は花咲く彌生頃花見遊山とさんざめ  
く乙女は引替へ裏店に細き煙りの手内職不幸をかこつ處女あり夏の涼しき川風  
を袂に受けて船遊び暑を知らぬ風流男あれば焼付如き炭火を笠をも冠らす車挽  
き玉なす汗を拭く暇も中々つらき世渡り涙吞込赤貧者秋の月見は冬の雪何れ  
をろかに無かりける實は世の態ぞ是非なけれ今此ふみの主しある美人雪子も思  
わぬ罪を身は受けて乾すよしもなき濡衣軟弱き花の姿もて荒き囚屋の詭佳居無  
き名を人より立てられて云囃さるゝ愛さつらさ其事の葉の浮沈みを艶なる筆よもの  
せられたる尤も可憐なる冊子あり

銀行  
奇談

大盜賊

全壹冊 正價金拾貳錢

本書ハ佛京巴里府メテ有名なる金満家ホーフル銀行メテ三拾五萬圓の大金を何者カメ盜取セられ其形跡を探るメ苦しみたるを千變萬化の奇術を以テ當時巴里メテ有名なる探偵レコークが探リ得たる顛末メシテ譯述メ工なる涙香黒岩君カ翻譯シ新聞紙上ヘ掲載シ非常メ江湖の喝采を博セシ新案小説ナリシを今度弊店メ於テ一小冊子トナシタリ請ム愛讀メらん事を

懷中義太夫

# 倭文範合本

全一冊 正價十八錢

## 卷中目錄

●菅原寺子屋の段●兜軍記琴責の段●朝顔宿屋の段●三代記三浦別の段●先代  
萩政岡忠義の段●太功記尼ヶ崎の段●廿四孝十種香の段●一ノ谷熊谷陣屋の段  
●安達原袖萩祭文の段●お染久松野崎村の段●白石嘶新吉原の段●佐倉惣五住  
家の段●女舞衣三勝酒屋の段●蝶花形小坂部館の段●浦里時次郎吉原揚屋の段  
●忠臣藏山科の段●加々見山長局の段●鳴門順禮歌の段●御所櫻辨慶上使の段  
●膝栗毛赤坂並木の段●三十三間堂平太郎住家の段●お俊傳兵衛堀川の段●梅  
川忠兵衛新口村の段●腰越狀泉三郎館の段●昔八丈城木屋の段●玉藻前道春館  
の段●國姓爺樓門の段●伊賀越沼津の段●妹背山四段目の切●千本櫻すし屋の  
段●千両幟猪名川内の段●楚仇討瀧の段●鈴鹿合戦平治住家の段●時雨炬燵紙  
屋の段●盛衰記逆櫓の段●お染久松質屋の段●二度目寺岡切腹の段●矢口渡舟  
場の段●一ノ谷須磨浦の段●近江源氏小四郎恩愛の段

懷中義太夫

# 續倭文範合本

全壹冊 正價金拾四錢

## 卷中目錄

●伊賀越岡崎の段 ●彦山六助内の段 ●桂川帶屋の段 ●忠臣藏六段目 ●日吉九三  
の切の段 ●累土橋の段 ●加々見山草履打の段 ●忠臣藏七段目 ●朝顔濱松の段 ●  
菅原車曳の段 ●廿四孝勘助住家の段 ●矢口八郎物語の段 ●覺仇討餞別の段 ●守  
護城正清本城の段 ●盛衰記源太勘當の段 ●累植生村の段 ●姫小松島物語の段 ●  
彦山須磨浦の段 ●花上野志度寺の段 ●千木櫻茶見世の段 ●忠臣藏三段目 ●忠臣  
藏五段目 ●伊賀越六ツ目口 ●覺仇討九の切 ●太功記本能寺合戦 ●合邦社内の段  
●岸姫松朝比奈上使 ●蘆屋道滿狐別の段 ●安達宗任物語の段 ●三日太平記松下  
住家 ●荻萱山の段

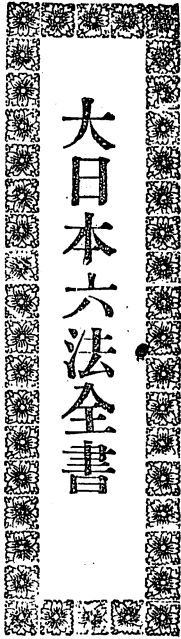


# 歌曲粹錦

全壹冊 正價金拾四錢

本書ハ歌曲類一切を網羅す曰く端唄曰く都々逸曰く清  
元曰く常盤津曰く義太夫曰く新内曰く二上り新内曰く  
富本曰く一中曰く園八曰く琴歌曰く上方歌曰く清曲曰  
く小謠総て余すなし苟も通客となり粹士たらんと欲す  
る者ハ一本を座右ニ於て愛覧を給ヘバ幸甚の至リニ不

堪



# 大日本六法全書

全壹冊 正價金五拾錢

今や帝國の法典ハ完成せり吾人が希望しつゝ在りし新法典ハ發布せられたり吾人國民たる者必讀せざるを得ざるハ弊堂が贅言を要せざる所なり雖然新法典や大冊として悉く暗射する事甚だ至難あり依て常々一冊を座右に備へて閱覽の便を取ざるを得ず實に弊堂が此書を發售する所以として單に諸君閱覽の便を計り無用の註釋を付し徒に冊子をして冗長ならしむる等の事なく正文に謗訓し尤も價格を低廉ならしむ請ふ陸續御注文あらん事を謹白

# 名作三十六佳撰

各一部 正價拾錢宛

本書の古來傑作の名ある義太夫丸本として月々漸次出版する者なり其既成  
目録は左よ

## 目

## 次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 繪本太功記             | 全一冊 |
| 生寫朝顔日記            | 全一冊 |
| 假名手本忠臣藏           | 全一冊 |
| 伽羅先代萩             | 全一冊 |
| 武田信玄本朝廿四孝<br>長尾謙信 | 全一冊 |
| 菅原傳授手習鑑           | 全一冊 |
| 十三鐘<br>緋懸柳        | 全一冊 |
| 妹脊山婦女庭訓           | 全一冊 |



殘口道士著

艷道通鑑

全壹冊 正價金貳拾錢

和文之妙手殘口道士が艷麗無比なる特筆を振われたる書として享保年間の昔し  
は在て能く状態人情を寫し出したる書なれば文學の資として見べき者巨多なり  
其流暢なる恰も花の如し縋ひて以て其眞價を探れ

香夢樓主人編

耐忍 偉業 商人立志編

全一冊 正價三十五錢

此書の吾日本は英商ありと其名を万里の異境まで博したる近時有名の豪商廿  
有餘人を撰み加之商賈必用の條々を掲げ而して偉業成功の美譽を求むる要路を  
説明せし書なれば商賈は有志の諸君争つて購讀せられ以て常に坐側は置き偉業  
人々の思想は注目なさは利を益するの云も更なり吾全國の勿論遠く歐米諸國商  
人の實況及び商賈就て進退學動併せて得失富饒を求め得るは足る商家六韜三畧  
と言つ可き良典なり請ふ四方の君方試みよ朗讀せられんことを

丸亭素人譯

黑闇鬼

全一冊 正價廿五錢

本書は佛國有名なる大家の探偵談なり、猛惡なる大強賊奸佞なる大罪人かゝる不敵の曲者を目に見えず手は捕へ得ざる黒闇中より狩出すは探偵吏を用ひず離れ難く棄難き人情を以て繋ぎ留たる關係人の手は一任し遂は惡鬼は天誅を加ふる最も高尚にして尤も奇偉なる書なり

井原西鶴著

文反古

全一冊 定價十二錢

井原西鶴著

小夜嵐物語

上中下三冊

輓近稗史小説の流行實は其隆盛を極め著譯醜刻今の殆んど其數を洩さずと雖も惜むべしや文章の高尙優美なる者に至りては曉天の星光と一般の觀なき能はず蓋し本書の如き其隨一なる者か井原西鶴氏の貞享元祿年間は在て浮世草子體の一派を開き文林の泰斗と仰かれしも一時其名隠埋して顯れず明治文化駭々として進み今や元祿の傑作明治の文壇は登らんとす江湖の諸君書を寄せ言を傳へて本書の開版を促かざる者日は其幾十を知らず依て今般活版は附して發市するに至れり伏て希くは世間獲利の斷篇零冊と同視せず續々愛覽以て高妙の文章を窺ひ且文華の眞面目を知らるれば幸甚

● 小町奴

桃水痴史著

● 怪談乳房榎

三遊亭圓朝口述

● 綠林門の松竹

三遊亭圓朝口述

● 西京土產 樽之高倉

松林伯圓口述

● 因果 果小町

村井吉瓶口述

● 倭歌敷島譚

春錦亭柳櫻口述

● 仇娘好八丈

春錦亭柳櫻口述

● 女權美談 文明の花

杉山蓋世著

● 復讐美談 孝子之血涙

大久保夢遊著

● 珠簾若葉艷

川上鼠文著

● 日本忠臣傳

香夢樓主人著

● 滑稽十二ヶ月

瘦々亭骨皮道人著

● 滑稽狂進怪

瘦々亭骨皮道人著

● おとけ新聞

瘦々亭骨皮道人著

● 行成放題樂雅記

瘦々亭骨皮道人著

● 面白誌

瘦々亭骨皮道人著

● 滑稽用文章

瘦々亭骨皮道人著

● 落葉の掃寄

末廣鉄腸居士著

● 海王丸

桃水痴史著

● 葉山繁山

桃水痴史著

● 業平竹

桃水痴史著

● 精神機關

嫁君情史著

● 春ノ一枝

桃水痴史著



次 目 成 既 版 出

繪本太功記全一冊  
生寫朝顔日記全一冊  
假名手本忠臣藏全一冊  
伽羅先代萩全一冊  
武田信玄本朝廿四孝全一冊  
長尾謙信  
菅原傳授手習鑑全一冊  
十三種  
絹懸柳妹脊山婦女庭訓全一冊  
逆櫓松平がな盛衰記全一冊  
矢箴梅  
奥州安達原全一冊  
一乃谷嫩軍記全一冊  
壇浦兜軍記全一冊  
蝶花形名歌島臺全一冊

次 目 成 既 版 出

彦山權現誓助劔全一冊  
伊賀越道中雙六全一冊  
三日太平記全一冊  
太平記忠臣講釋全一冊  
花上野譽石碑全一冊  
北條時賴記全一冊  
國姓爺合戰全一冊  
神靈矢口渡全一冊  
小野道風青柳硯全一冊  
箱根靈驗覽仇討近刻  
太平記菊水の卷近刻